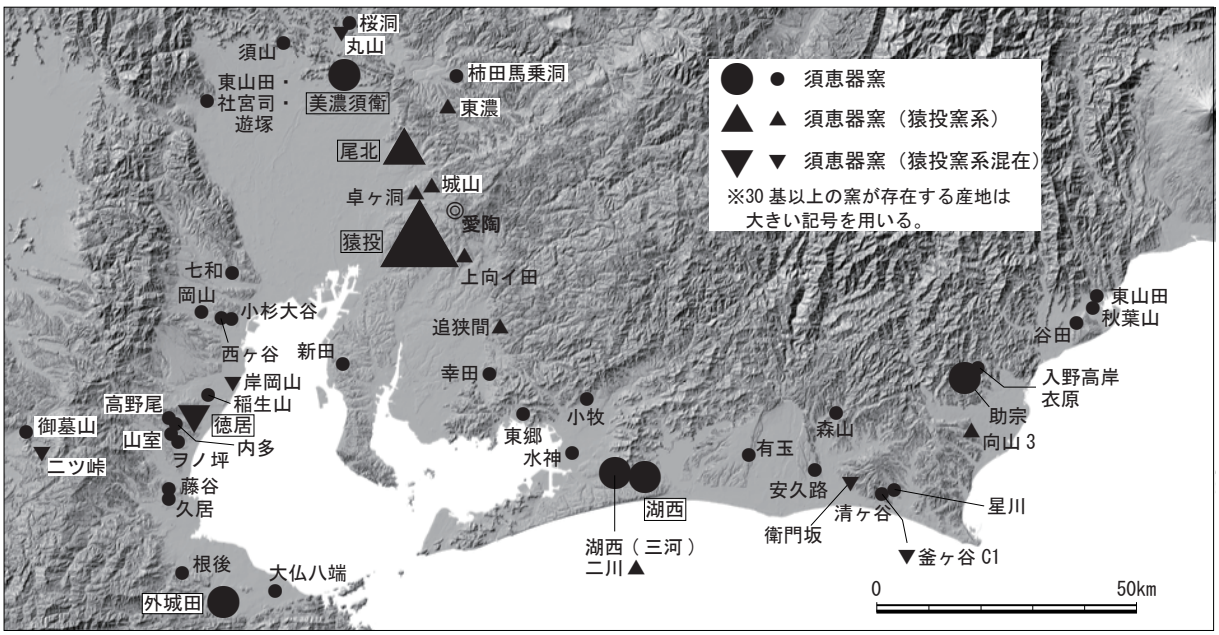
愛知県陶磁美術館　特別展「This is SUEKI―古代のカタチ、無限大！」関連イベント

若手研究者による全国須恵器窯シンポジウム
―研究の現状を共有し、未来を探る―

資料集

日時：2026 年 2 月 22 日（日）10:30 ～ 16:20 ／場所：愛知県陶磁美術館　本館地下 1 階講堂
主催：愛知県陶磁美術館／助成：公益財団法人 中辻創智社



東海の須恵器窯（地理院地図陰影起伏図（国土地理院）をもとに作成）

次第

（1）10：30-10：35　開会のあいさつ　趣旨説明　大西遼（愛知県陶磁美術館）

（2）各地の須恵器窯研究の現状と課題

①10:35-10:55　舘内 魁生（東北大学埋蔵文化財調査室）「東北地方の須恵器窯について～平安時代を中心に～」

②10:55-11:15　立原 遼平（神奈川県教育委員会）「関東地方の須恵器窯について―研究史の整理を中心に―」

③11:15-11:35　大須賀 広夢（湖西市産業部文化観光課）「遠江湖西窯跡群について」

④11:35-11:55　大西 遼（愛知県陶磁美術館）「東海西部の須恵器窯について―猿投窯を中心に―」

＜11:55-13:10 休憩　※12:45-13:05：特別展「This is SUEKI」の展示案内＞

⑤13:10-13:30　髙島 悠希（(公財）滋賀県文化財保護協会）
「猿投窯における須恵器貯蔵器種の地域色―古墳・飛鳥時代の甕を中心に―」

⑥13:30-13:50　岩越 陽平（奈良県立橿原考古学研究所）「陶邑窯跡群について―古墳時代を中心に―」

⑦13:50-14:10　我妻 佑哉（奈良文化財研究所）「東アジア窯業の源流から見た摂津千里窯の製作技術」

⑧14:10-14:30　鈴木 茂（野洲市教育委員会文化財保護課）「滋賀県内の須恵器生産と鏡山古窯群について」

⑨14:30-14:50　稲本 悠一（兵庫県教育委員会）「平安時代の播磨の須恵器窯について―研究の現状と課題―」

＜14:50-15:00 休憩＞

（3）15:00-16:10　シンポジウム―研究の現状から須恵器研究の未来を探る（パネラー：（2）発表者、司会：大西）

（4）16:10-16:15　講評　城ヶ谷和広氏（愛知県埋蔵文化財調査センター）

（5）16:15-16:20　閉会のあいさつ

東北地方の須恵器窯について
～平安時代を中心に～

舘内魁生　東北大学埋蔵文化財調査室

はじめに

東北地方は本州の約 3 割を占める広大な地域であり、脊梁山脈によって東西に大きく区分されるほか、大小の丘陵や河川によって多様な地理的環境が生み出されている。そのため、東北地方の須恵器と一言で言っても、地域ごとにバリエーションが大きい。歴史的に見ても、早くから古墳が築かれた南東北に対して、律令国家が軍事力を背景に進出した中部東北、郡が設置されず北海道との交流も盛んだった北東北など、地域によって異なる背景を持つ。本稿の目的は、このように多様かつ複雑な様相を呈する東北地方の須恵器窯を整理することである。

ところで、須恵器研究の花形と言えばやはり古墳時代であろうか。あるいは、「律令的土器様式」（西 1982）が形作られていく飛鳥時代や奈良時代かもしれない。対して、平安時代の須恵器はその重要性が認識されているものの（宇野 1984、吉田 1986、菱田 2002、高橋照彦 2016）、他の時代に比べて研究の蓄積が多いとは言えない。その背景には、平安時代の窯業では地域性が顕在化し（北野 2007）様相が掴みにくくなることや、施釉陶器など多様な食器が登場する中で相対的に“衰退”していくように見えるといった理由がある。実際、平安時代における須恵器生産の減退は、西日本、とりわけ畿内や北部九州では顕著な傾向で、陶邑もこの頃に生産を終了する。

一方、東北地方では 8 世紀後半代から須恵器生産が急速に拡大し、律令国家の外側であった青森県にまで及んだ。しかし、中世まで生産は続かず、10 世紀に入ると急激に減退していく。このような目まぐるしい展開がまさに東北地方の須恵器生産の特色でもあるのだが、その背景にはいったいどのような事情があるのであろうか。本論では平安時代に重点を置きつつ、東北地方の須恵器生産について述べていきたい。なお、東北地方の須恵器生産についての総論的な文献として東北古代土器研究会（2008ab）、菅原（2010）、櫻井（2025）などがあり、これらも併せて参照していただきたい。

1. 東北地方における須恵器生産の展開～8 世紀まで～（表 1・図 1・2）

【古墳時代】

東北地方での須恵器生産の開始は案外古く、5 世紀中ころの大蓮寺窯跡（宮城県仙台市）が知られている。初期須恵器の一元論/多元論の議論の中で取り上げられ、注目された窯である（植野 1991 など）。また、金山窯跡（仙台市）と泉崎窯跡（福島県泉崎村）も古墳時代に属する。仙台平野では 4 世紀代から前方後円墳が作られたが、大蓮寺窯跡や金山窯跡はこれらの墳墓への供給を目的としたものであったと推測される。一方、宮城県北の大崎平野にも既に前方後円墳が進出しており、宮城県北部一帯が初期大和政権の勢力の北限だったとされる（辻 2000）。

しかし、5 世紀に属する窯跡の操業期間は短く、仙台平野では単発的な生産であったと考えら

れる。また、6 世紀代の窯跡は現在発見されておらず、この時期の須恵器生産は不明である。

【7 世紀前半】

次に須恵器生産が始まるのが 7 世紀前半である。生産地は福島県沿岸部から仙台平野にかけての地域に限られ、それ以外の地域では未発見である。善光寺遺跡（福島県相馬市）はこの時期の代表的な窯跡で、大化の改新を挟んで継続的な操業が行われた稀少な事例である（木本 1990、藤木 2015）（図 3）。最初期の器種は杯・杯蓋・長脚高杯・甕・堤瓶・壺で古墳時代的な様相を示すことから陶邑 TK209 段階に、続く 2 型式ではカエリの付いた蓋が出現することから TK217 段階と見られている。なお、2 型式では瓦の生産が行われたが、その供給先は東北地方でも最初期の寺院である黒木田遺跡（相馬市）とされる。

高崎遺跡（宮城県多賀城市）は 8 世紀に多賀城が作られる丘陵の近くに位置しており、製品は善光寺遺跡 1 型式に似るものの、やや在地化が進んだものとされる。製品は周辺の横穴墓などに供給された（多賀城市教育委員会 2007）。

【7 世紀後半】

7 世紀中ころから後半にかけては、国家が積極的に辺境政策に乗り出す時期である。例えば、郡山遺跡（宮城県仙台市）に大規模な官衙が建設され、ほぼ同時に日本海側では渟足柵・磐舟柵が設置された。こうした政治的な動向を背景に、須恵器生産地域もやや拡大する。

置賜盆地（山形県南部）では日本海側最古級の高安窯跡（山形県高畠町）などが出現する。また、福島県沿岸部ではこのころから大規模な製鉄が行われるようになり、平安時代まで続く国内有数の製鉄遺跡群が登場する。これに伴い、善光寺遺跡周辺では須恵器生産が拡大していく。

【7 世紀末～8 世紀前半】

7 世紀末には郡山遺跡の官衙が取り壊され、新たに主軸を真北方向に改変したさらに大規模な官衙（Ⅱ期官衙）が作られた。そのプランが藤原京と類似することからも、Ⅱ期官衙は多賀城に先行する陸奥国府と考えられている。その後、陸奥国府は神亀元年（724）に多賀城に移され、以後、仙台平野が陸奥国の中心として機能した。一方、日本海側では和銅元年（708）に越後国出羽郡が設置され、和銅五年（712）には出羽国が新たに設置される。これを受けて、天平五年（733）には雄勝郡の設置と秋田城（出羽柵）の造営が行われた。律令国家は一気に秋田まで領域を広げたのである。

この時期は須恵器生産地域が一気に拡大する。まず、宮城県北部の大崎平野では日の出山窯跡（宮城県色麻町）など瓦陶兼業の生産地が相次いで出現した。そもそも、大崎平野は黒川以北十郡と呼ばれる特殊な地域で、坂東からの多量の移民を基盤として作られた小規模な郡からなる。エミシの居住域との境界に設けられた城柵への人的・物的資源の供給を担っていたとされる（熊谷 1989）。そのため、この地域での窯業は坂東諸国のバックアップがあったと考えられ、「常」「相」「上」「下」「毛」「上毛」など坂東諸国を示す文字瓦が特徴的に見られる。瓦は大崎平野の城柵や寺院、創建期の多賀城に供給された。

また、それまで須恵器生産が希薄だった東北地方南部の一部地域でも、郡設置などを背景に相次いで生産が開始される。その中には、麓山窯跡（福島県郡山市）のように郡家（あるいは郡家付属寺院）向けの瓦生産を伴うものが少なくない。

日本海側では秋田城や雄勝郡の設置に前後して、それぞれの地域で須恵器生産が始まる。手形山窯跡（秋田県秋田市）と末館窯跡（秋田県雄物川町）では上野地域に特有の鍔付須恵器蓋が出土しており（図 4)、操業に際して他地域からの技術移入、あるいは製作者の移動があったと考えられる。

【8 世紀後半】

天平宝字三年（759）には雄勝城（秋田県横手市か）と桃生城（宮城県石巻市）が、神護景雲元年（767）には伊治城（宮城県栗原市）が設置され、律令国家は陸奥沿岸部と内陸部それぞれで北進を始めた。これをきっかけに、現地住民（エミシ）との対立が深刻化し、弘仁二年（811）まで続くいわゆる三十八年戦争が引き起こされた。

この時期は須恵器生産でも大きな画期があった。すなわち、8 世紀前半代から続く生産地から別の立地へ生産の拠点が移り、9 世紀代へと続く中核的な生産地が顕在化する（菅原前掲)。例えば、横手盆地では盆地西部の末館窯跡から盆地東部の中山丘陵窯跡群へ拠点が移る。中山丘陵窯跡群は地域の中核的な生産地であり、その後 10 世紀初頭まで生産が続けられた。米沢盆地では盆地東部から南部、そして西部へと拠点が移動する。一方、陸奥南部の柴田郡や伊具郡、善光寺遺跡のある宇多郡では生産遺跡が一時的に見えなくなる。こうした生産地の移動や消滅の背景には、新たな郡の設置や、消費地である城柵や郡家の移設などがあると考えられる。横手盆地では 759 年に雄勝郡と平鹿郡が設置されたことが生産地の移動の契機となった可能性が高い。また、米沢盆地では 8 世紀中ごろに大浦遺跡（置賜郡家？）など米沢市域に拠点が移動したことが関係すると思われる（佐藤 2024)。

一方で、日本海側では会津盆地や庄内平野での操業が開始されるなど、生産地域はやや拡大する。後述する大戸窯跡（福島県会津若松市）もこの時期に操業を開始した。

2. 東北地方における須恵器生産の展開～9 世紀以降～

【9 世紀】

三十八年戦争の過程で律令国家の版図はさらに北進し、陸奥国中・北部に胆沢城・志波城・徳丹城が、出羽北部では第 2 次雄勝城とされる払田柵が設置された。しかし、延暦二十四年（805）以降、律令国家の北進政策は見直され、大規模な軍事行動や新たな城柵建設は行われなくなる。一方、天長七年（830）の秋田城周辺での大地震、嘉祥三年（850）の出羽国大地震、貞観十一年（869）の陸奥国大地震など自然災害が相次いだこともあり、東北地方北部はたびたび小規模な反乱が起きるなど不安定な状況であった。一方、多賀城周辺では方格地割による街区が成立し、国府周辺が最も発展した時期である。また、陸奥出羽南部では郡家付属寺院以外にも小規模な寺院が相次いで建立され、いわゆる山林寺院もこのころから出現する。

須恵器生産地域は律令国家の北進と歩みを同じくし、岩手県中部まで広がる。この時期の須恵

器生産地については以下の類型に分けられる（舘内 2025）（図 5）。

A：9 世紀以前から継続し、9 世紀以降も継続する生産地

B：9 世紀以前から継続し、9 世紀前半に操業を終了する生産地

C：9 世紀代に生産を開始し、短期間で生産を終了する生産地

D：9 世紀代に生産を開始し、9 世紀末以降も生産を続ける生産地

まず A タイプであるが、分布は東北南部 3 県と秋田県域に限定され、岩手県と青森県では該当するものがない。規模は比較的大きなものが多く、いくつかの支群が集中する窯跡“群”と呼べるものも含まれる。付近には供給先である城柵あるいは国府があり、その地域の中核的な窯と評価できる。また、新城窯跡群・庄内東部窯跡群・平野山窯跡群・大衡窯跡群・台原丘陵窯跡群ではそれぞれ秋田城跡・城輪柵跡・宮城県北部の寺院と城柵・多賀城跡に瓦を供給しており、こうした瓦の需用が窯業全体を支えていた。

B タイプの分布は A タイプとほぼ重複し、A タイプと同じ郡内に所在する窯もある。そのため、各地域の中核的な窯に次ぐ規模の生産地と評価でき、9 世紀前半には消滅することから A タイプに吸収されるように見える。

C タイプは最も多く分布範囲も広い。A・B タイプがなかった岩手県内でも志波郡の木節遺跡・星川窯跡、和賀郡の相去窯跡群、外浦洗田窯跡、胆沢郡の見分森窯跡などがある。分布は青森県を除く東北地方のほぼ全域で、A・B タイプと同じ郡内に所在する例もある。重要なのは A・B タイプとの位置関係で、A・B タイプと C タイプはやや離れた位置にある場合が多い（図 6）。例えば、横手盆地では中核的な中山丘陵窯跡群が操業しているが、C タイプはより北の山本郡内に点在している。最上郡では A タイプの平野山窯跡群が山形盆地の西側にあるのに対し、C タイプは東側の奥羽山脈の山中にも点在する。また、C タイプは窯数が 1 基から数基程度の小規模なものが多く、操業期間も非常に短期間である。

最後に、D タイプは五所川原窯跡群（青森県五所川原市）と瀬谷子窯跡群（岩手県奥州市）のみが該当する。8 世紀代に生産地がない地域で新たに誕生した中核的な生産地であり、10 世紀代まで継続するなど東日本では特異な消長を示す。北東北に特有の須恵器生産地と言えるだろう。特に、五所川原窯跡群は列島最北の須恵器窯であり、その製品は北海道まで流通したことが知られる。

以上、類型に沿って 9 世紀以降の生産地の消長を概観した。ところで、9 世紀以降の須恵器生産地の分布に関して、奈良時代までの「一郡一窯」から国府が関与する国レベルの生産地へ移り変わることが知られている（菱田前掲）。丹波篠窯、北陸（南加賀窯跡群・丹生窯跡群）や讃岐（十瓶山窯跡群）に顕著だという。これに対して、東北地方では大きく「集約」と「拡散」の 2 つの様相が認められる。すなわち、8 世紀代から続く生産地は淘汰され、やがて A タイプの中核的な生産地に「集約」される。ただし、B タイプから A タイプに技術移動があったか、B タイプの供給圏に A タイプの製品が供給されるようになったかは細かな検討が必要である。そのため、“見かけ上の”集約の可能性も残されるものの、A タイプがその地域を代表する中核的な生産地であったのは確かである。

また、A タイプには菱田（前掲）の広域型に相当するものがある。例えば、大衡窯跡群は近年の調査で宮城県北の城柵・寺院に瓦を供給していたことが明確になり（宮城県教育委員会 2024)、郡を越えて須恵器も供給された可能性がある。さらに、地理的な区分で見ると、A タイプの生産地は盆地や平野部に 1 つずつ分布することから、地理的なまとまりごとに供給圏を有していたと想定される。

一方、小規模で短期間操業の C タイプ生産地が多数出現した現象は「拡散」と評価できるだろう。福島県内の C タイプの生産地では大戸窯跡群と同じ製作技術が認められ（後述)、A・B タイプからの技術伝習や製作者の移動によって C タイプが開窯した事例は少なくないと思われる。また、C タイプ成立の背景には各郡内にいた複数の郡司輩出勢力（須原 2011）が自立して生産を始めたことや、人口増加・居住域の拡大などが想定される。

以上の様相から、菱田（前掲）が指摘するような郡レベルから国レベルへの生産地という変化は東北地方では認められない。そもそも、東北地方では国レベルの生産地（国内一円への供給を担うという意味だけでなく、国府が生産に強く関与するという意味合いも含まれる）の存在が不明確である。畿内や瀬戸内地域では国レベルとされる生産地が国府所在地の近くにある例が多く、国府と生産地に密接な関係が認められる。これに対し、東北地方では比較的大きな規模の生産地が複数個所に点在しているのが特徴である。陸奥・出羽国内一円に製品を供給するような生産地はなく、小地域ごとの中核的な生産地が各地域での需要を満たしていた。そのため、一国レベルの大規模な生産地が発展しなかったと考えられる。

【10 世紀以降】

陸奥南部では多賀城周辺や胆沢城が機能しているものの、それ以外の集落や生産遺跡は急速に消滅していく。特に 10 世紀後半以降になると考古学的に確認できる遺跡は僅かとなる。これに対し、陸奥北部では 9 世紀後半以降に集落が増加し、特に八戸以北の地域では鉄生産に関連した新興集落が相次いで成立した。10 世紀後半にはこうした集落が消滅する一方で、環濠集落（囲郭集落）が成立する。出羽北部では 9 世紀後半以降、秋田県北部から津軽平野にかけて大規模な集落遺跡が出現し遺跡数が増加する。外部からの人の移住や（遺構として残る）定住化が背景とされる（高橋学 2016)。これとほぼ同時期に、津軽平野では須恵器生産や小型竪型炉による鉄生産が開始されるが、これらの鉄製品・須恵器、あるいは米・漆器・塩は北海道に運ばれたとされる（小口 2003)。

こうした動向と軌を一にするように、須恵器生産も 10 世紀代に急速に減退した。中には酸化炎焼成の土師器生産へ変質する場合や瓦生産のみが残存する場合もあるが、須恵器自体は生産しなくなる。10 世紀代で確実に操業しているのは、五所川原窯跡群と瀬谷子窯跡群、大戸窯跡群のみである。

【中世窯への転換】

東北地方の場合、結論から言えば中世窯に転換した生産地は確認できない。11 世紀代の東北地方は須恵器生産の完全な空白期であり、渥美系の技術が導入された水沼窯跡（宮城県石巻市）

や花立窯跡（岩手県平泉町）の操業が始まる 12 世紀を待たなければならない。また、12 世紀の陶器生産は須恵器系を母体にして瓷器系の要素が導入された「折衷系」の技術（飯村 1995、小山 2022）であり、古代の須恵器生産がそのまま中世に継続したとは言えない。

東北地方で中世窯に繋がる須恵器生産地が生まれなかった理由は、前述したように国レベルの大規模生産地が生まれなかった点が大きいだろう。加えて、平安京の瓦の需要を満たした播磨などと対照的に、東北地方では 10 世紀以降に瓦生産が下火となり、須恵器ともども減退していた点も大きい。こうした背景が複合的に作用して須恵器生産が途絶えていったと考えられる。

3. 大戸窯跡群の特色

本章では東北地方最大規模の大戸窯跡群を取り上げたい。大戸窯跡群は東北地方の南端に位置する会津盆地にある。東西約 2km 南北約 4.5km の範囲に須恵器窯 184 基、中世の窯跡 36 基が確認されており、このうち 22 基が発掘調査された（会津若松市教育委員会 1998）。

・製品の特色

須恵器は猿投窯の影響を強く受けていることが知られており、灰釉陶器椀を模した椀や猿投とよく似た形状の長頸瓶・広口瓶などがある。一方、会津は地理的に新潟県にも近いが、突帯が付く瓶類（上雨屋 12 号窯試掘調査）や接地面が内側を向く形状の高台（南原 33 号窯）など、北陸の影響も見受けられる。また、上雨屋 12 号窯段階から南原 19 号窯段階の長頸瓶の頸部に「リング状突帯」と呼ばれる突帯が付けられるのも特徴である。

・焼成方法の特色

大戸窯跡群では長頸瓶の焼成に杯型焼台（貯蔵具専用焼台とも。望月 2008）を使用する。北陸由来の技術である。ただし、全期間を通して使用されたのではなく、操業開始期から南原 19 号段階までの期間に限られる。

・大戸窯跡群の編年

大戸窯跡群の編年は石田明夫らによって 1990 年代に示された（石田 1992・1994、会津若松市教育委員会前掲）（図 7）。相対的な変遷は現在でも有効であるが、年代観については消費地での出土事例に矛盾が無いか確認が必要である。また、年代観は猿投の編年に依っており、例えば最初期の MH33 段階は鳴海 32 号窯・折戸 10 号窯に並行する 8 世紀後葉とされる。後に猿投の年代観が修正されたものなどは注意が必要である。

・コストをかけた高品質な製品

平安時代の須恵器は施釉陶器などに対して低コスト生産されたことが知られており、例えば長頸瓶では倒置の工程が省略されて高台が失われていく（中久保 2012、稲本 2021）。

一方、大戸窯跡群の長頸瓶では倒置して高台を貼り付ける工程は最後まで失われない。9 世紀後半以降の資料でも湿台痕を残すものがあり、これを裏付ける。また、体部側面のケズリ調整や

底部外面の調整も基本的に失われず継続する。このことから、大戸窯跡群では長頸瓶・広口瓶が継続的に高コスト生産されたと考えられる。大戸窯跡群の長頸瓶は非常に高温で焼成されるためか、全体的に硬質な焼き上がりで、自然釉が灰釉陶器のように付着したものも珍しくない。外見的な特徴は東海地方の原始灰釉や灰釉陶器を意識した可能性が高く、当時としても施釉陶器に次ぐ“高品質”な製品だったと考えられる（村田 2018）。

・中広域流通

多賀城跡と周辺遺跡では 8 世紀末から 10 世紀代まで幅広い時期の大戸窯産須恵器が出土する。そのうち、多賀城周辺の街区では 7 割ほどが瓶類であるという（村田前掲）。これは明らかに特定器種の流通と評価でき、大戸窯跡群が多賀城周辺の需要を支えていたことは確かであろう。一方、多賀城跡以外の地域では同様の様相が認められない点も注意すべきである。宮城県と岩手県内で確実に大戸窯産と言える事例は多賀城周辺を除くとそれほど多くはない（舘内前掲）。会津盆地以外では地域の拠点的な遺跡、寺院、官衙など特定の遺跡での出土例が目立ち、遠隔地の狭域流通と評価できる。篠窯産鉢や初期の東播磨に見られるような、特定器種を広く流通させる様相とは異なり、まして中世的な流通とは質的に異なる。

・生産地間交流

近年、筆者は杯型焼台を有する東北地方の生産遺跡（大戸系の生産遺跡）に注目し、その生産地間での技術交流や製作者の移動について検討を進めている（椿野・舘内 2025）。現在把握できている事例は、壇山窯跡（山形県川西町）・大神窯跡（山形県米沢市）・三本楢窯跡（宮城県村田町）・入道迫窯跡・滝野原窯跡（福島県南相馬市）・伊達窯跡（福島県桑折町・伊達市）・タタラ山窯跡（福島県いわき市）・西新田遺跡（福島県喜多方市）である。このうち、山形県内の焼台は長頸瓶専用ではなく、年代も大戸窯跡群に先行する可能性があるためここではいったん置いておこう。福島県内の事例（伊達窯跡を除く）は年代や長頸瓶自体の特徴からも大戸窯跡群に由来する可能性が高い。実見した限りでは、福島県内のこれらの生産地では大戸窯跡群と同様、自然釉のかかった長頸瓶を生産していた。前述のように、高コストで生産されたブランド志向の強い大戸産長頸瓶を模した可能性がある（図 8）。

さらに技術伝播を考える上で注目されるのが瓦生産である。大戸系の生産地のある郡では有蕊弁蓮華文と呼ばれる瓦当文が共有され、一部では嵌め込み式技法と呼ばれる特徴的な製作技法も共有される。この有蕊弁蓮華文の郡域を超えた展開について、背景に郡司層の同族関係が指摘されている（藤木 2006）。恐らく、そうした同族関係がある郡司層間で瓦笵の共有や製作者の派遣・伝習などが行われていたと考えられ、大戸系の杯型焼台もそのネットワークで拡散した可能性がある。

4. 新たな研究の試み

大戸窯跡の製品、とりわけ瓶類は精良な胎土に淡い自然釉が掛かるもので、かつては灰釉陶器とも間違えられることが多かったという。いわゆる原始灰釉に近い製品と言える。原始灰釉につ

いての議論は近年も盛んで、8 世紀にも人工的な施釉があったとの指摘もある（贊 2024）。しかし、大戸窯跡の製品は人工施釉ではなく、時期的にも灰釉陶器の生産が確立した 9 世紀代に入るため、これまでの議論の枠組みでは評価が難しい。むしろ、東海地方から離れた東北地方において、限られた技術の中で「外見が灰釉陶器によく似た製品」を作ることが目指されていたのであり、灰釉陶器とも須恵器とも異なる位置づけを与えるべきではないだろうか。

そこで筆者ら（舘内と立原遼平氏）は、大戸製品の視覚的特徴を定量化し「外見」の特徴を客観的に評価する方法を試みている。色調・釉の光沢具合を定量的に把握することで、灰釉陶器との類似度や大戸系生産地の製品との比較が可能になる。また、多賀城や東北最大規模の山林寺院である慧日寺などで計測を行い、これらの遺跡に高品質な製品が供給された可能性を検証している。

おわりに

2025 年 2 月に開催された第 51 回古代城柵官衙遺跡検討会では瀬谷子窯跡群の再整理の成果が公表され、それに合わせて東北地方の平安時代の須恵器の生産や流通の状況が紹介された。検討会の討論の中で 1 つ話題になったのが「多賀城の須恵器はどこから来たのか？」であった。分厚い研究の蓄積がある多賀城跡でさえ、須恵器については供給関係が分かっていないのである。このように、東北地方の須恵器についてはまだ多くの課題が残されている。

最後に、東北地方の須恵器を検討していると「本当に須恵器は必要だったのか？」という疑問を抱く。第 1 章でみたように、須恵器生産地が拡大したのは 8 世紀以降であり、地域によっては須恵器を入手できたのはわずか 100 年足らずである。貯蔵具としての需用も高かったのかは疑問で、10 世紀以降は須恵器のない生活様式で事足りていた。東北地方に暮らした人々にとって須恵器は必須のものではなかったのである。逆に、5 世紀、そして 7～9 世紀のわずかな期間に須恵器を生産した背景とは何だったのだろうか。東北地方の須恵器研究の意義はここにある。

謝辞

本研究は公益財団法人髙梨学術奨励基金 2025（令和 7）年度若手研究助成および科研費若手研究（24K16193）の成果を含む。

会津若松市教育委員会 1998『会津大戸窯　大戸古窯跡群保存管理計画書』会津若松市文化財調査報告書第 59 号

飯村均 1995「東北諸窯」『概説　中世の土器・陶磁器』pp. 425-436　真陽社

石田明夫 1992「会津・大戸古窯跡群（大戸窯）」『東日本における古代・中世窯業の諸問題』pp. 1-37

石田明夫 1994『会津・大戸窯（遺物編）』　津若松市文化財調査報告書第 37 号

伊藤武士 1998「秋田城跡周辺須恵器窯の動向について」『秋田考古学』46　pp. 1-35

稲本悠一 2021「平安時代前期における須恵器生産の転換―丹波篠窯と畿内諸窯を中心に―」『古代文化』72-4　pp. 20-41

植野浩三 1991「初期須恵器窯の系譜について：大蓮寺窯跡を中心にして」『文化財学報』9　pp. 25-35

宇野隆夫 1984「後半期の須恵器：平安京・京都出土品にみる中世的様相の形成」『史林』　67-6　pp. 66-104

小口雅史 2003「律令時代の青森　考古学から見た平安時代の津軽　謎の 10・11 世紀」『新編弘前市史　通史編 1』pp. 75-168

北野博司 2007「律令国家転換期の須恵器窯業」『国立歴史民俗博物館研究報告』134　pp. 251-273

熊谷公男 1989「黒川以北十郡の成立」『東北文化研究所紀要』21　pp. 1-17

木本元治 1990「南東北地方における歴史時代の須恵器編年Ⅰ」『考古学古代史論攷』pp. 385-411

小山美紀 2022「東北諸窯」『新版　概説　中世の土器・陶磁器』pp. 279-288　真陽社

櫻井友梓 2025「古代東北の瓦窯」『瓦生産から見た地域社会―『瓦窯の構造研究』の成果を踏まえて―』pp. 3-12

佐藤智幸 2024「大浦 B 遺跡」『古代東北の城柵・官衙遺跡　第 3 分冊』pp. 239-244

島田祐悦 2005「横手盆地の奈良期における須恵器編年―末舘窯跡の再検討―」『秋田考古学』49　pp. 35-88

菅原祥夫 2010「東北」『古代窯業の基礎研究―須恵器窯の技術と系譜―』pp. 459-491

須原祥二 2011「八世紀の郡司制度と在地―その運用実態をめぐって―」『古代地方制度形成過程の研究』pp. 2-42　吉川弘文館

多賀城市教育委員会 2007『高崎遺跡』　多賀城市文化財調査報告書第 89 集

高橋照彦 2016「平安時代須恵器の研究現状」『考古学研究会関西例会 200 回記念シンポジウム土器編年研究の現在と各時代の特質　―須恵器生産の成立から終焉まで―』pp. 75-100

高橋学 2016「城柵と北東北の鉄」『北方世界と秋田城』pp. 255-268　六一書房

舘内魁生 2022「須恵器杯への新技術の導入とその背景―平安時代の東北地方における製作者間の交流―」『考古学研究』69-3　pp. 79-101

舘内魁生 2025「平安時代前期の須恵器生産」『第 51 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』pp. 75-96

辻秀人 2000「古墳の出現と謎の塩釜式　遠見塚古墳と雷神山古墳」『仙台市史　通史編 2　古代中世』pp. 20-32

椿野智之・舘内魁生 2025「宮城県村田町三本楢窯跡の研究」『東北文化研究室紀要』66　pp. 15-50

東北古代土器研究会 2008a『東北古代土器集成　―須恵器・窯跡編（陸奥）―』

東北古代土器研究会 2008b『東北古代土器集成　―須恵器・窯跡編（出羽）―』

中久保辰夫 2012「平安時代前半期における窯業生産の転換―篠窯出土供膳具を軸として―」『篠窯跡群大谷 3 号窯の研究』pp. 389-402　大阪大学文学研究科考古学研究報告第 5 冊

贄元洋 2024「須恵器における施釉技術の系譜」『日本考古学協会第 90 回総会　研究発表要旨』　p. 35

西弘海 1982「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』pp. 447-471　平凡社

菱田哲郎 2002「考古学からみた古代社会の変容」『日本の時代史 5　平安京』pp. 186-228　吉川弘文館

藤木海 2006「有蕊弁蓮華文鐙瓦の展開とその背景」『福島考古』47　pp. 3-22

藤木海 2015「善光寺遺跡」『相馬市史　第 4 巻資料編Ⅰ　原始・古代』　pp. 165-225

宮城県教育委員会 2024『彦右エ門橋窯跡・吹付窯跡・吹付 C 窯跡』宮城県文化財調査報告書第 258 集

村田晃一 2015「版図の拡大と城柵」『蝦夷と城柵の時代』pp. 87-118　吉川弘文館

村田晃一 2018「大戸産須恵器」『山王遺跡Ⅶ　第 3 分冊』pp. 291-302　宮城県文化財調査報告書第 246 集

望月精司 2008「須恵器窯専用焼台に関する考察―北陸の貯蔵具専用焼台の導入と展開、系譜を中心として―」『白門考古論叢』2　pp. 177-202

吉田恵二 1986「須恵器以降の窯業生産」『岩波講座　日本考古学 3　生産と流通』pp. 197-236　岩波書店

表 1-1　東北地方の主な須恵器生産遺跡

郡		遺跡名	分類	古墳時代	7世紀前半	7世紀後半	7末～8世紀前半	8世紀後半	8末～9世紀1/4	9世紀2/4	9世紀3/4	9世紀4/4	10世紀1/4	10世紀2/4	10世紀3/4	瓦	リング突帯	菊花	杯型焼台	鉄生産
		五所川原窯跡群	D									1	3	3	4		○	○		
		十二林遺跡	C									1	酸化炎焼成へ				×	○		○
		海老沢・西海老沢窯跡	C								4						○	?		
秋田		手形山窯跡	B				1	1												
		古城廻窯跡							3							○				
	新城窯跡群	**右馬之丞窯跡**						1												
		大沢窯跡	A					1	1	1						○				
		谷地Ⅱ遺跡						1	1			1				○	○			
雄勝		末舘窯跡					2													
平鹿	中山丘陵窯跡群	**上猪岡窯跡**	A						1								×			
		西ヶ沢窯跡						1												
		竹原窯跡					1	3	2								×	○?		
		郷士館窯跡							1								?			
		富ヶ沢窯跡							1	2	1						○			
		田久保下遺跡									3						○	○		
		大沼沢窯跡										1	酸化炎焼成へ				○			
山本		成沢窯跡群	C						1	2							×			
		十二牲遺跡	C							?			酸化炎焼成					△		
		物見窯跡	C									1								
雄勝		七窪窯跡群	C									2	酸化炎焼成へ				?			
河辺		葛法窯跡	C						2	1										
		弥勒山窯跡	C							1							?			
飽海	庄内東部丘陵窯跡群	**願瀬山窯跡**							2								×			
		泉谷地窯跡							2							○	?			
		泉森窯跡	A						1							○	?			
		泉森南窯跡							1							○	○			
		山海窯跡									14	2					○			○
出羽	庄内西部窯跡群	金山窯跡	B									?	酸化炎焼成へ							
		山口古窯跡						?		?							?	?		
		荒沢窯跡						?	?											
最上		二子沢窯跡	C									2								
		平野山窯跡群	A				※長岡山	2		2	1	2				○	○			
		藤田窯跡	C								1						×			
		三本木窯跡	C									1					×			
		玉虫沼窯跡	C									1								
	上山西部丘陵窯跡群	オサヤズ窯跡	B					2								○				
		小松原窯跡							3							○	×			
		久保手窯跡							2								?			
		三千刈窯跡								?						○	?			
		葉山窯跡								1							?			
置賜	置賜東部丘陵窯跡群	高安窯跡				5										○				
		木和田窯跡					1													
		壇山窯跡（第9地点）	B						3								×		○	
		大神窯跡						1									×		○	
	置賜西部丘陵窯跡群	蛇崩窯跡	C								1						○			
		加賀塚窯跡・今泉金谷遺跡									4						○			
		梨郷平野窯跡	?						1											
志波		木節遺跡	C								?						○	○		
		杉の上窯跡	C						?								○			
		星川窯跡	C									1					×			
和賀		成田窯跡群	C								?	?								
		相去窯跡・高前壇Ⅱ遺跡・葛西壇遺跡	C								5	酸化炎焼成へ					×			
		藤沢窯跡	C								?	?								
江刺		**瀬谷子窯跡群**	D							1	12	11	8	9	酸化炎焼成	○	○	○		
		外浦洗田窯跡	C									1					○	?		
胆沢		見分森窯跡	C						2											
栗原		三沢窯跡（金成窯）	C									7?				○	×			
玉造		合戦原窯跡	C						7							○				
新田？	（黒川以北十郡）	木戸窯跡					5									○				
		大森山	C								?						×			
小田		長根窯跡					5		?											
色麻		日の出山窯跡					18									○				
黒川		**大衡窯跡群**	A				3	2	2		3	酸化炎焼成				○	○	△	○?	
		鳥屋窯跡					5													
志太？		下伊場野窯跡					3									○				
		次橋窯跡						2												
牡鹿		**須江丘陵窯跡群**	A					1	3	2	5	4	2	1			○			

表 1-2　東北地方の主な須恵器生産遺跡

郡		遺跡名	分類	古墳時代	7世紀前半	7世紀後半	7末～8世紀前半	8世紀後半	8末～9世紀1/4	9世紀2/4	9世紀3/4	9世紀4/4	10世紀1/4	10世紀2/4	10世紀3/4	瓦	リング突帯	菊花	杯型焼台	鉄生産
宮城	台原窯跡群	**台原丘陵窯跡群西部**	A							3	5	瓦のみの生産				○	?			
		台原丘陵窯跡群東部	A				5	1	2		6					○	○			
	大沢・硯沢窯	大蓮寺窯跡		1			1									○				
		硯沢・大沢窯跡群	A				12	3	1		瓦窯					○	×			
		大貝窯跡							2							○	×			○
	西多賀窯跡群	高崎遺跡			1															
		土手内窯跡			3															
		金山窯跡		1																
		杉の入裏窯跡						3												
亘理		北名生東窯跡・合戦原窯跡	B					1	2								?			○
柴田		北日ノ崎窯跡				1	3													
		兎田窯跡					?									○				
		三本槍窯跡	C								2						?		○	
伊具		川前窯跡					3									○				
		峯瓦窯跡					2									○				
		田中窯跡	C						1							○	×			
		鹿野須恵器窯跡	C									2					?			
苅田		**八幡坂窯跡**	A				3	?		2	3	2					○			
		上ノ神明窯跡	C								1						○			
信夫・伊達		宮沢窯跡				5										○				
		赤埴窯跡	C								2					○	×			
		大鳥城跡	C									2				○	○			
		小倉寺高畑遺跡				2														
		台畑遺跡					1													
		城裏口遺跡				?										○				
		伊達窯跡・成田前窯跡	A					3	?			?					○		△	
		大木戸窯跡					4													
安達		赤井沢窯跡						1								○				
		広網遺跡	C						2											
安積		野中遺跡						1												
		麓山窯跡					5									○				
		開成山窯跡					?									○				
		針生瓦窯跡・原田窯跡	B				※花輪窯跡・愛宕台窯跡		6							○				
石背		関下窯跡	?						?	?						△				
		大久保A遺跡	C						1								×			
白河		泉崎窯跡		?																
		大岡窯跡					?									○				
宇多		武井地区製鉄遺跡群				1														○
	地蔵川流域窯跡群	新城下窯跡				?														
		山崎遺跡				?										○				
		高田遺跡			1															
		善光寺遺跡			1	7	2									○				
		猪倉B遺跡	C								1	5	酸化炎焼成へ				○			○
行方		玉貫古窯跡					1													
		大迫遺跡	C						2											○
		鳥打沢A遺跡				1														○
		入道迫窯跡	C							1						○	○		○	
		滝野原窯跡	C									3					○		○	
標葉郡		陳場沢窯跡群				4										○				
		仁田久保B遺跡	C														○		○	
磐城？		折木遺跡	C									1					?			
磐城	いわき北部丘陵窯跡	梅ノ作窯跡・五反田A遺跡	B				5		2							○				
		大猿田遺跡						2												
		タタラ山窯跡	C							2	1						?		○	○
		大久保F遺跡	C									2	1 酸化炎焼成へ				×			
		田代原窯跡	C							?							○			
		金山窯跡						?												
会津		新田山窯跡						?												
		村北窯跡（山口瓦窯跡）				?										○				
		大久保窯跡															○			
		大戸窯跡群	A														○		○	
耶麻		入大光寺窯跡						4?												
	会津盆地西部窯跡群	小田高原窯跡群	C								3						?			
		西新田遺跡	C							3	酸化炎焼成へ						○		○	
		萩ノ窪窯跡	C							1							×			
※佐渡		小泊窯跡群														○				

※窯の数は須恵器を焼成した窯をカウントしたもの。瓦専焼の窯はカウントしていない。

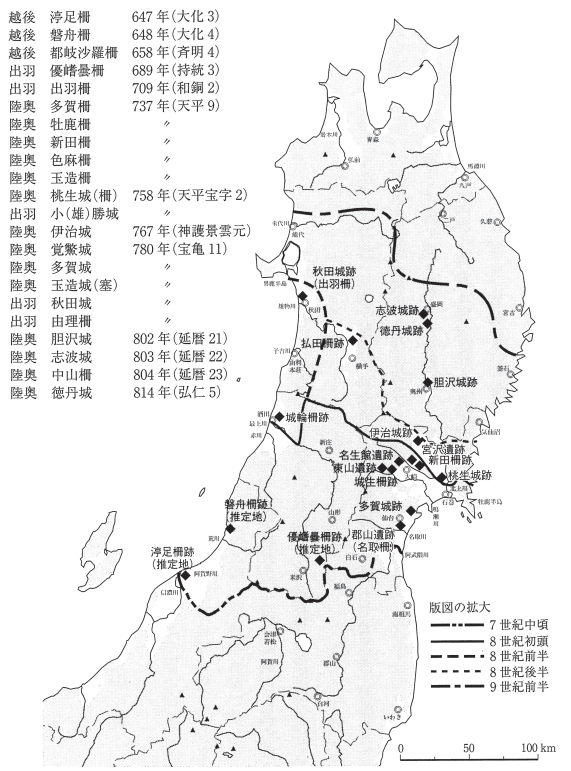


図1　城柵の設置と版図の拡大（村田 2015）

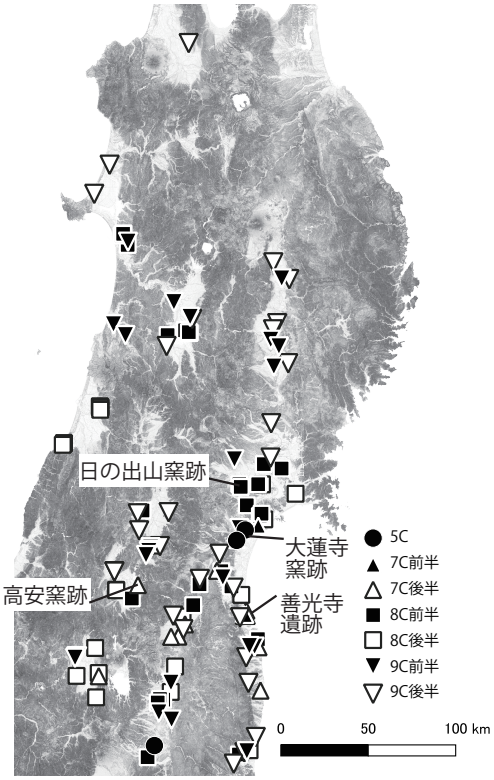


図2　主な生産遺跡の操業開始時期

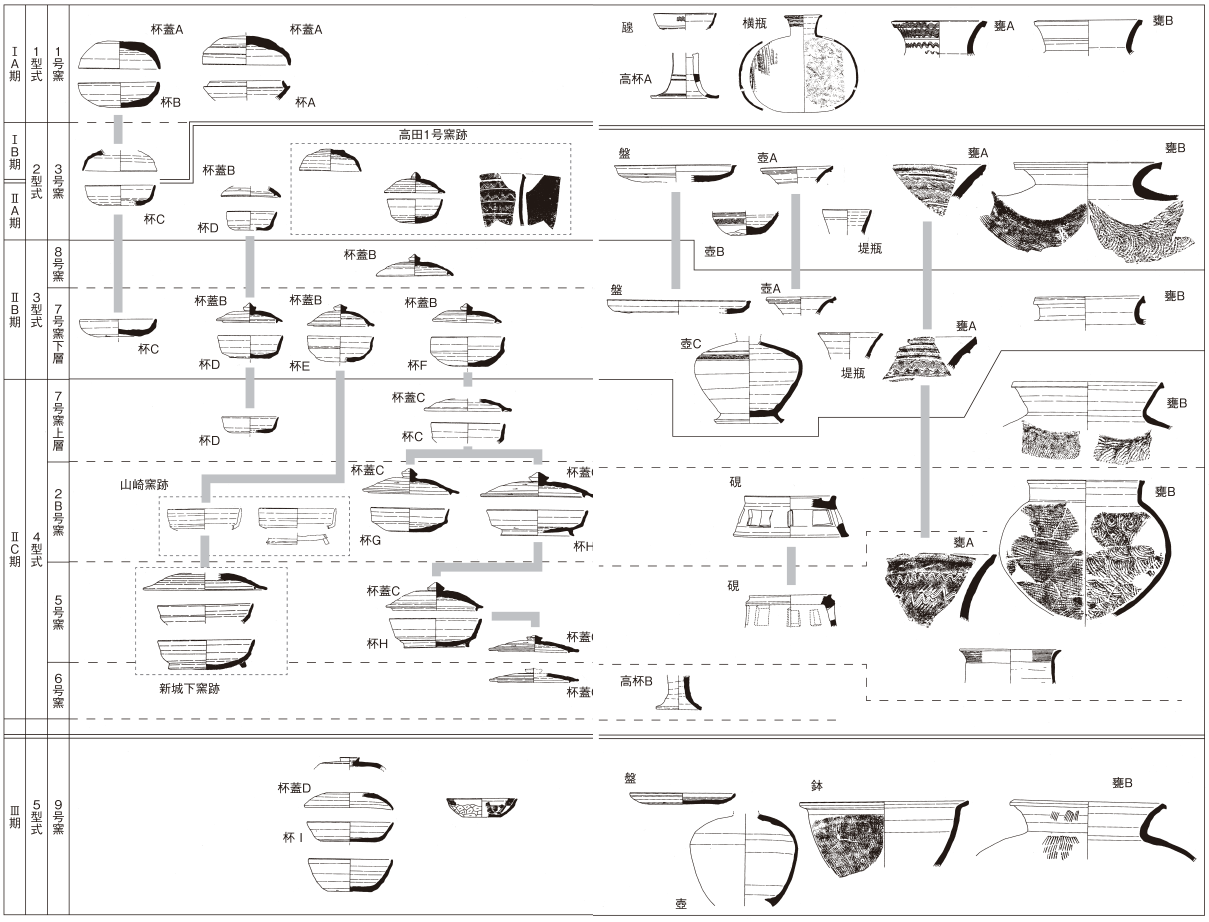
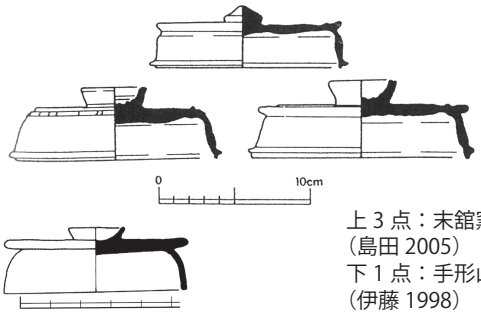


図3　善光寺遺跡における須恵器の変遷（藤木 2015）



上 3 点：末舘窯跡
（島田 2005）
下 1 点：手形山窯跡
（伊藤 1998）

図 4　鍔付須恵器蓋

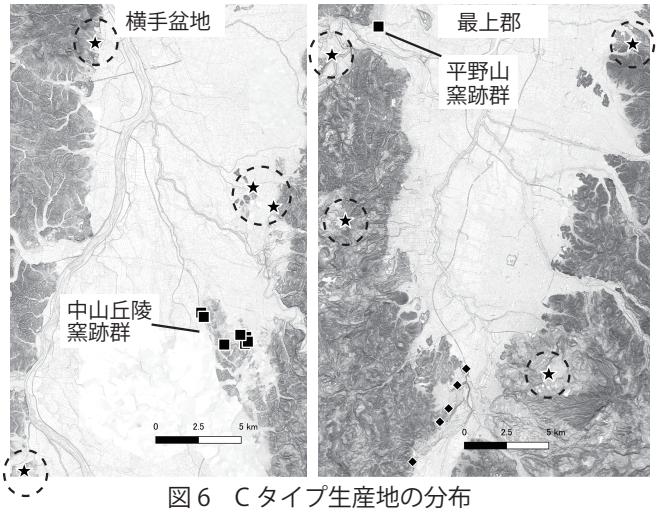


図 6　C タイプ生産地の分布

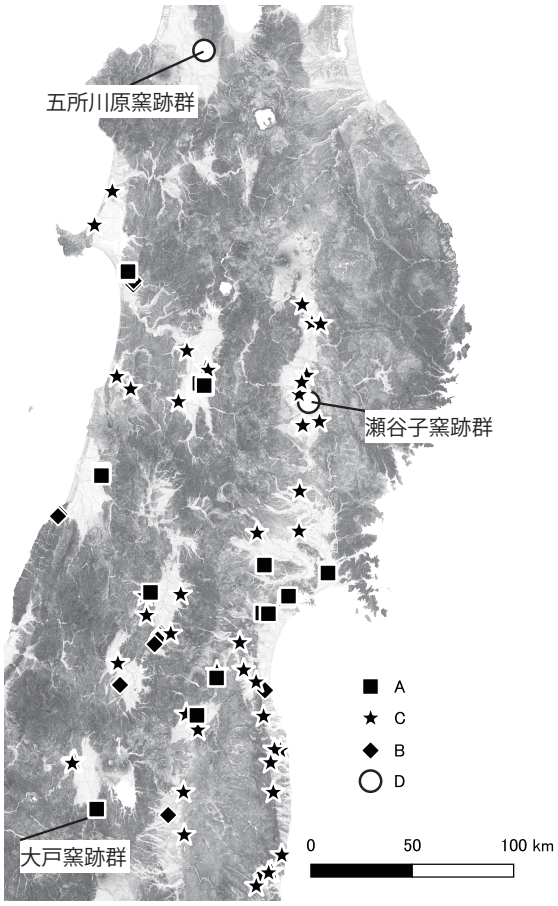


図 5　平安時代の須恵器生産遺跡の類型

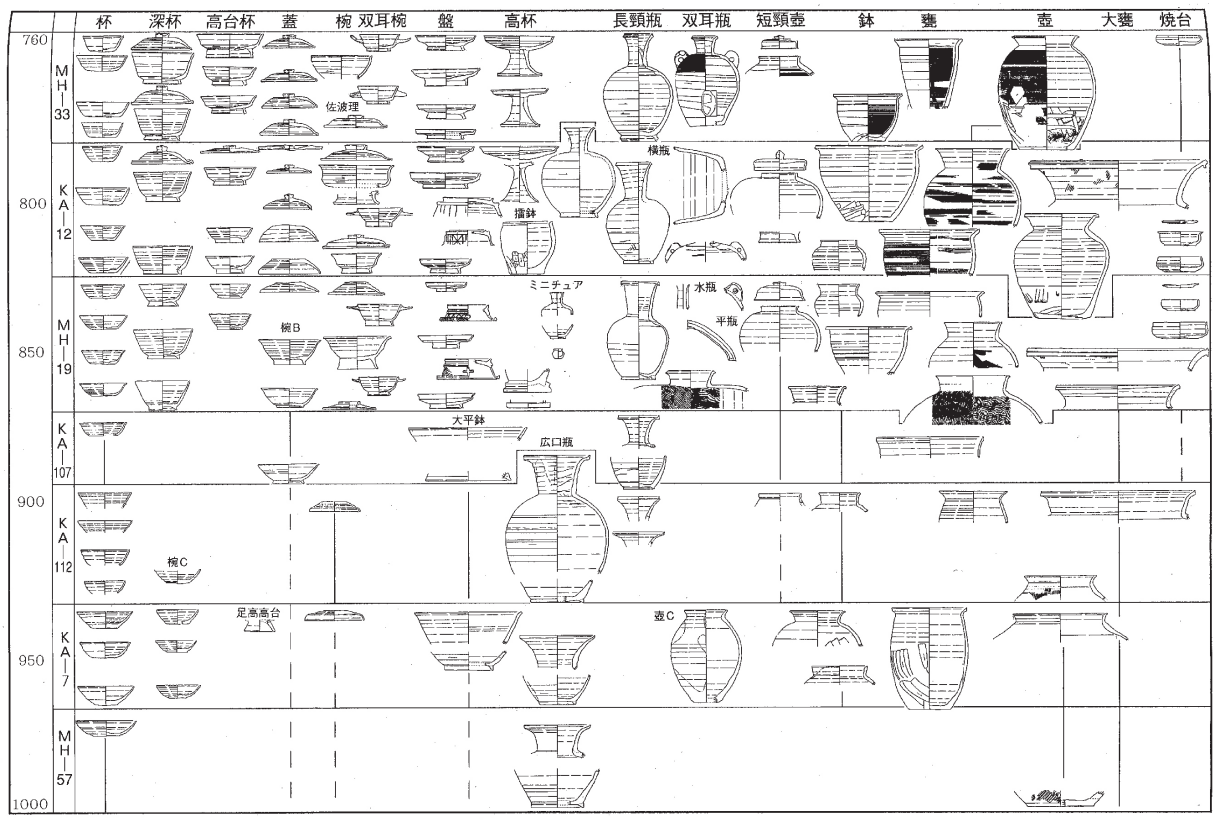
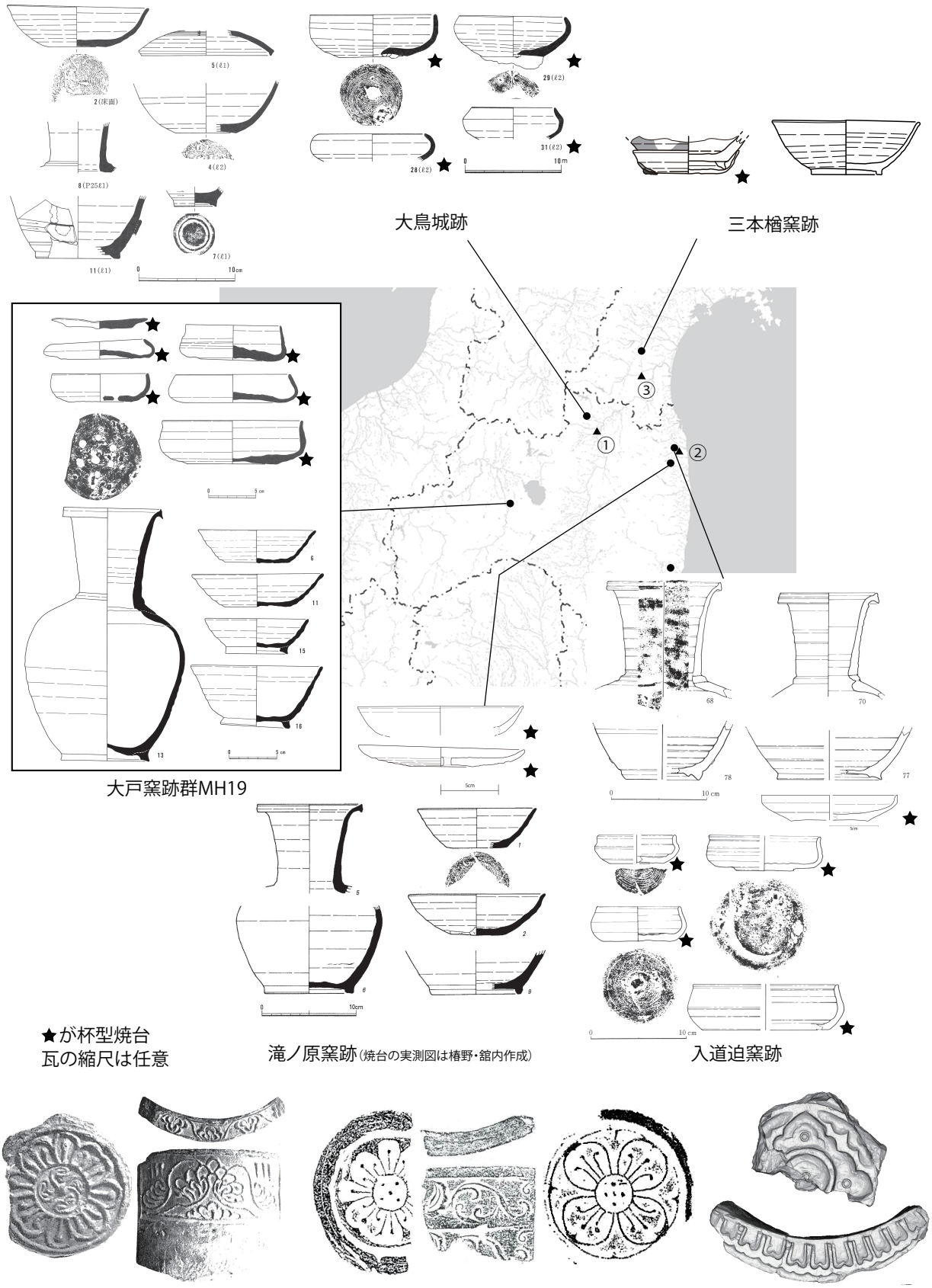


図 7　大戸窯跡群における須恵器の変遷（会津若松市教育委員会 1988）



①腰浜廃寺　②植松廃寺（左2点）と泉官衙遺跡（右）　③中屋敷前遺跡

図８　大戸系技術の拡散と瓦当文様（各遺跡の報告書より転載）

関東地方の須恵器窯について
–研究史の整理を中心に–

神奈川県教育委員会
立　原　遼　平

はじめに

本発表では、関東地方における須恵器窯の分布を提示し、その研究史を整理する。その後、編年を中心とした研究の概要をまとめ、窯構造と製作技術の広がりについて紹介する。紙幅の都合により、いずれも概略を提示するのみとなる点、ご寛恕願う。

１．須恵器窯の分布と研究史

関東地方における須恵器窯の分布を古墳時代と７世紀後半以降の須恵器窯に分けて概観し、次いで須恵器窯の研究史を整理する。研究史の整理では、酒井清治氏による研究史の整理（酒井 2002）をベースとし、以降の研究を追加してまとめる。

❑　古墳時代の須恵器窯

関東地方で発見される須恵器窯跡のうちで、最も古いと評価されるのは埼玉県南比企地域の桜山６・８号窯（６世紀前半）である。次いで、群馬県金山丘陵の菅ノ沢須恵器窯跡群（６世紀後半）がある。７世紀からは、茨城県北部の幡山窯跡や栃木県西部の馬坂窯跡などでも窯跡が確認されるようになり、東京都でも多摩地域で No.342-1 号窯などが見つかり、須恵器生産が開始される状況が認められ、以降は各地で須恵器生産が継続されていく。神奈川県においては、川崎市熊ヶ谷東遺跡は６世紀まで遡る可能性があるが、以降で県内における古墳時代のはっきりとした窯跡はみられず、須恵器生産は低調である。

❑　７世紀後半以降の須恵器窯

７世紀末葉から８世紀に至り、各地に須恵器窯が築かれるようになり、窯跡群単位では９世紀まで生産を継続するところが多い。また、南比企窯跡群や東金子窯跡群では、10 世紀まで生産が継続する。相模国を除いて、各国には須恵器窯が散見される。

２．須恵器窯の調査・研究史

❑　戦後の須恵器窯調査・研究（～１９６０年代）

1949 年	**三上次男らによる瀬戸市小長曽窯跡の発掘調査（画期）**
1950 年	内藤正恒・宇野信四郎らによる入間市谷津池窯跡の調査
1951 年	大森信英による木葉下窯跡の報告
1953 年	高井悌三郎による新治窯跡群小野窯跡の調査
1953-54 年	吉田章一郎による寄居町清見寺・大正寺・円良田窯跡の調査 武蔵国分寺の郡名瓦焼成/小前田古墳群に須恵器が供給されたことを指摘
1954 年	岡田茂弘による南多摩窯跡群の御殿山窯跡調査
1955 年	**楢崎彰一らによる猿投山西南麓窯跡群〔猿投窯〕の調査・研究（画期）**
1956～58 年	藤田清・高井悌三郎による茨城県岩間町堀ノ内窯跡群の調査 「新大領」・「新厨」刻書須恵器⇒新治郡家との関係を想定
1956 年	滝口宏・大川清による栃木県益子町滝ノ入窯跡の報告
1961 年	久保常晴・高島正人・坂詰秀一らによる南比企窯跡群の報告
1961 年～	**田辺昭三らによる大阪府陶邑窯跡群の調査・研究（画期）**
1963 年	大川清による「韮川・三通１号窯の報告」
1964 年	坂詰秀一「東国における須恵器研究の生産とその歴史的背景についての予察発表
1966 年～	群馬県太田市金山窯跡群の調査（６世紀後半代と評価）

1966 年　坂詰秀一「日本の古代窯業」『歴史考古学研究Ⅰ』
1967 年　**倉田芳郎・坂詰秀一による東北・関東地方の須恵器生産の地域的特質についての検討（当時の関東地方における須恵器研究の総括的内容）**
1969 年　坂詰秀一による埼玉県入間市新久窯跡の調査（出土瓦が武蔵国分僧寺塔跡にみられる⇒承和 12（845）年再建に際して使用されたと想定（年代の定点）

※この段階では、群馬県太田市金山窯跡群と千葉県君津郡練木を除き、関東地方の須恵器生産の開始は国分寺創建時と想定

❑　**編年研究の整備（1970～1980年代）**

国分寺に関係する窯跡が各地で確認されるとともに、出土須恵器の分析が進められた。また、大規模な集落遺跡の調査により出土土器の暦年代についての検討が求められ、以降、係るシンポジウムや個人研究が地域毎に進められていく。

1974 年　高橋一夫ほか『前内出窯址発掘調査報告書』
1977 年　神奈川考古同人会主催「神奈川県内における古墳時代後期から平安時代土器編年試論」（各地の編年案が示される）
1978 年　福田健司「南多摩における奈良時代の土器編年とその史的背景」
1979 年　大川清『多摩丘陵窯跡群調査報告』
1979 年　坂詰秀一「窯跡出土資料による関東地方須恵器の編年」
1979 年　服部敬史・福田健司「南多摩窯址群出土の須恵器とその編年」
1980 年　橋本澄朗・熊倉直子「那須地方の歴史時代の土器について」
1980 年　坂詰秀一「関東地方の須恵器編年」
1981 年　服部敬史・福田健司「南多摩窯址群における須恵器編年再考」
1981 年　服部敬史「関東地方の窯址出土須恵器編年と年代」
（全国の中で関東地方の須恵器について位置付け）
1981 年　東洋大学未来考古学研究会・相武古代研究会主催「盤状坏」シンポジウム
1982 年　立正大学考古学研究室主催「関東における 9 世紀代の須恵器と瓦」シンポジウム
1983 年　**神奈川考古同人会主催「奈良・平安時代土器の諸問題」シンポジウム**
市川考古博物館主催「房総における奈良・平安時代の土器」シンポジウム
1984 年　坂詰秀一らによる『武蔵八坂前窯跡』報告書の刊行
1984 年　山口辰一「武蔵国府関連遺跡における土器編年」
1985 年　山口辰一「武蔵国府と奈良時代の土器編年」
1985 年　服部敬史「関東地方における九・十世紀の須恵器生産」
1986 年　**神奈川考古同人会主催「古代末期～中世における在地系土器の諸問題」シンポジウム**
1986 年　酒井清治「北武蔵における 7・8 世紀の須恵器の系譜について」
1987 年　房総歴史考古学研究会主催「房総における歴史時代土器の研究」シンポジウム
埼玉考古学会主催「奈良時代前半の須恵器編年とその背景」シンポジウム
1987 年　竹花宏之ほか『多摩ニュータウン No.513 遺跡』（南多摩窯調査の進展）
1987 年　酒井清治「武蔵国における須恵器年代の再検討」「埼玉県の須恵器の変遷について」

1989 年　後藤健一「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」（画期）

※年代観については、楢崎彰一氏による猿投窯の灰釉陶器編年が使用されたが、灰釉陶器の年代観が修正されるに伴って関東地方の須恵器編年も修正され、陶邑編年や飛鳥編年の整備に伴ってアップデートが進む。以後、他地域出土土器との共伴関係や漆紙文書、国分寺瓦、紀年銘墨書土器、銭貨、木簡などの共伴遺物が年代の定点となり、群馬県など特定の地域では火山灰による年代比定がなされてきた。

❑　**編年・窯跡研究の精緻化（1990年代～）**

地域毎、窯跡毎に編年研究を中心に深化が進む。歴史時代の須恵器については、川井正一・佐々木義則・赤井博之・吉澤悟（茨城）、田熊清彦・津野仁・内山敏行・山口耕一・池田俊宏

（栃木県）、田所真・松本太郎（千葉県）、高橋一夫・浅野晴樹・酒井清治・赤熊浩一・富田和夫・渡辺一・田中広明・加藤恭朗・根本靖（埼玉県）、綿貫邦男・神谷佳明・桜岡正信（群馬県）、服部敬史・鶴間正昭・福田健司・江口桂・山口辰一・荒井健治（東京都）、國平健三・河野喜映・服部実喜・長谷川厚（神奈川県）らによって研究がリードされ、現在に至る。

1988～92 年　渡辺一ほか『鳩山窯跡群Ⅰ～Ⅳ』
1990 年　渡辺一「南比企窯跡群の須恵器の年代」
1990 年　大川清ほか『栃木県益子町古代窯業遺跡群Ⅰ』
1991 年　窯跡研究会『須恵器窯構造資料集１』
1991 年　長谷川厚「東国における「律令的土器様式」の成立と展開について」
1992 年　坂詰秀一ほか『南多摩窯跡群』
1992 年　綿貫邦男「群馬県における歴史時代の土器について」
1992～93 年　浅井哲也「茨城県内における奈良・平安時代の土器（Ⅰ・Ⅱ）」
1993 年　酒井清治「生産地の様相と編年−多摩・比企−」
1993 年　**古代の土器研究会主催「古代の土器研究−律令的土器様式の西・東２　須恵器−」シンポジウム**
1995 年　服部敬史「窯業生産からみた多摩丘陵の開発」
1995 年　渡辺一「武蔵国の須恵器生産の各段階」
1995 年　津野仁「栃木県における６・７世紀の土器編年と地域的特徴」
1997 年　**古代生産史研究会による『東国の須恵器』シンポジウム（97 年時点での関東地方における飛鳥～平安時代の須恵器編年の整理とその系統について整理）**
1997 年　赤井博之「新治窯跡群の基礎的研究−奈良・平安時代の須恵器編年について−」
1997 年　佐々木義則「木葉下窯跡群の須恵器生産−奈良時代前半を中心に−」
1998 年　常陸古代窯業史研究会『水戸市山田窯跡群確認調査報告』
1998 年　赤井博之「古代常陸国新治窯跡群の基礎的研究（一）（奈良・平安時代の須恵器編年を中心に）」
1999 年　赤熊浩一『末野窯跡Ⅱ』
1999 年　窯跡研究会主催「須恵器窯の技術と系譜２」シンポジウム
1999 年　渡辺一「関東の須恵器窯」
2000 年　渥美賢吾『常陸の須恵器窯』
2000 年　鶴間正昭「南多摩窯跡群における国分寺創建期前以前の須恵器生産」
2000 年　坂詰秀一・上野恵司ほか『南多摩窯跡群　大法寺裏遺跡Ⅱ』
2001 年　田中広明「古代秩父の形成と土器の流通」
2002 年　埼玉県考古学会主催「坂東の古代官衙と人々の交流」シンポジウム
2003 年　鶴間正昭「武蔵国分寺の造営と須恵器」
2004 年　窯跡研究会『須恵器窯構造資料集２』
2006 年　渡辺一『古代東国の窯業生産の研究』
2007～11 年　藤野一之による埼玉・群馬県域の古墳時代須恵器の研究
2006 年　埼玉考古学会主催「古代武蔵国の須恵器流通と地域社会」シンポジウム
2010 年　窯跡研究会主催『古代窯業の基礎研究−須恵器窯の技術と系譜−』
2012 年　中三川昇『乗越遺跡』
2012 年　古代の入間を考える会『古代入間の土器と遺跡１須恵器坏の編年と遺跡動態を考える』
2013 年　古代の入間を考える会『古代入間の土器と遺跡２　須恵器坏の編年（９・10 世紀）』
2014 年　国士舘大学考古学研究室による『金沢窯跡』報告書刊行
2014 年　古代の入間を考える会『南比企窯と東金子窯（Ⅰ）８世紀の東金子窯の編年

と土器の分布』
2015 年　古代の入間を考える会『南比企窯と東金子窯（Ⅱ）東金子窯の開窯と 9 世紀の編年』
2019 年　鶴間正昭『律令国家形成期の土器様相』
2022 年　渡辺一『須恵器研究の新視角』
2022 年　手島芙実子『南比企窯跡群総括報告書Ⅰ』
2024 年　眞保昌弘・田中広明ほか『東国古代遺跡の定点』
※上記した研究は、研究史上重要なものを管見の限り挙げており、他にも多くの研究が行われている。

3. 主要窯跡の編年研究

埼玉県内の南比企・東金子・南多摩窯跡群は、関東一円で製品が確認される大規模な窯跡群である。各国の須恵器窯の編年・窯跡研究に強い影響を与えてきた上記窯跡群について簡単に整理するとともに、常陸・下野・下総国などを中心に製品が広域に流通する新治郡の様相についても触れる。

❑ 南比企窯跡群

渡辺一による通称「鳩山編年」（渡辺 1987）と酒井清治による編年（酒井 1993）がある。鳩山窯跡群では H0 期～HIX期が設定されており、渡辺は 7 世紀末から 8 世紀初頭に開窯したと考えており、酒井は 8 世紀に入って生産が開始されたと考えている。また、酒井は生産の終焉期である HIX期の年代を 10 世紀第 2 四半期として、渡辺より四半期終焉が遅れると想定している。2013 年の古代の入間を考える会による入間郡内の集落遺跡出土須恵器の検討で、鳩山Ⅹ期が設定され、10 世紀前葉という年代が与えられており、南比企窯跡群の最終期と判断されている。

胎土に海綿状骨子が含まれる点が特徴で、消費遺跡で須恵器の器種は、坏・椀・蓋．盤・高盤・鉢・鉄鉢形・すり鉢・長頸瓶・平瓶・横瓶・水瓶・短頸壺・壺・甑・甕などのほか、陶硯や瓦塔も生産している。

❑ 東金子窯跡群

各窯の報告でそれぞれ年代的評価を受けてきたが、発掘件数が少ないことから窯跡群単体での編年は行われていない。年代は、8 世紀中葉に前内出 1・2 号窯が出現し、9 世紀に至ると八坂前 4 号窯、次いで八坂前 6 号窯が現れるという前後関係で整理されている。同窯跡群の新久窯跡と八坂前窯跡は武蔵国分寺再建塔に葺かれた瓦の生産窯であり、承和 12（845）年の年代が与えられる。

最近では、2012～15 年にかけて古代の入間を考える会により『古代入間の土器と遺跡（Ⅰ・Ⅱ）』及び『南比企窯と東金子窯（Ⅰ・Ⅱ）』が刊行され、Ⅰでは 8 世紀代、Ⅱでは 9 世紀以降の編年が組まれた。後者は集落出土の東金子窯産製品を検討したもので、南比企窯跡との共伴関係などから年代を整理したものである。同書によると、東金子窯の開窯は 8 世紀第 2 四半期頃の鳩山Ⅱ期からであり、10 世紀前葉の鳩山Ⅹ期まで製品が確認されるとのことである。

❑ 南多摩窯跡群

南多摩窯跡群の編年については、服部敬史や福田健司による編年研究が 1980 年代に進められ、2001 年には『南多摩窯跡群Ⅳ』が刊行され整理される。各段階に与えられた年代観は、1985 年に発表された山口辰一の武蔵国府跡出土土器編年と齟齬があることが指摘され、2011 年に服部敬史・河合英夫らによって南多摩窯跡群の須恵器編年の暦年代が修正されている。服部氏らの最新の編年では、8 世紀第 1 四半期に御殿山（以下、「G」と略す。）68 号窯式が位置付けられ、G37 号窯式⇒G59 号窯式⇒G25 号窯式⇒G５号窯式（古）⇒G５号窯式（新）へと変遷することが提示されている。厚木市宮の里遺跡出土「甲午」墨書須恵器坏が G５号窯式（新）と判断され、干支記号として「甲午」を捉え、承平４（934）年の年代が与えられている。したがって、G５号窯式（新）10 世紀第 2 四半期までの年代が与えら、同時期が現時点での南多摩窯跡群の最終操業時期と想定される。

❑　新治窯跡群

新治窯跡群の本格的な発掘調査は少ないため、消費遺跡での新治窯跡群産須恵器から、研究の進展が図られてきた。これは、新治窯跡群産が胎土に雲母を含み、他の産地との峻別が可能であったことが大きい。同窯跡群の編年研究は、赤井博之と佐々木義則によって牽引され、1990 年代以降窯跡の調査も進み、編年研究が整理されてきた。開窯は 7 世紀第 4 四半期からで、9 世紀第 3 四半期まで生産をしていることが判明している。

4．窯構造の研究

渡辺一による関東地方の主要窯跡群を対照とした窯構造についての研究により、まとめられる（渡辺 2006・2022)。そのなかで、関東地方における須恵器窯の変遷について、3 つの画期を設定する。すなわち、①6 世紀後半における半直立窯の成立、②7 世紀末から 8 世紀初頭における直立窯の成立、③8 世紀後半における半地下式窯の成立である。①は関東地方の古墳時代窯の開窯期で、上野に限定的な様相である。②は房総を除く関東一円で同じ傾向であるが、地域性も散見される。③は東関東で比較的早く成立し、西関東の半地下式窯と平面形態が異なるため、地域性が認められる。

【参考文献】※発行年順

山口辰一 1984「第六章　付論−武蔵国府遺跡における土器編年試論」『武蔵国府関連遺跡調査報告Ⅴ』府中市教育委員会・府中市遺跡調査会

渡辺一 1993「武蔵とその周辺の須恵器」『第 2 回シンポジウム　古代の土器研究−律令的土器様式の西・東 2　須恵器−』古代の土器研究会

古代生産史研究会 1997『'97 シンポジウム　東国の須恵器−関東地方における歴史時代須恵器の系譜−』

赤井博之 1998「古代常陸国新治窯跡群の基礎的研究（1）〜奈良・平安時代の須恵器編年を中心に〜」『婆良岐考古』第 20 号　婆良岐考古同人会

酒井清治 2002『古代関東の須恵器と瓦』同成社

渡辺一 2004「関東地域の古代後半期須恵器窯構造」『須恵器窯の技術と系譜 2』窯跡研究会

渡辺一 2006『古代東国の窯業生産の研究』青木書店

服部敬史・河合英夫ほか 2011「南多摩窯跡群須恵器編年の暦年代検討」『八王子市史研究　創刊号』八王子市

中三川昇 2012「乗越遺跡−相模国分寺創建期瓦生産窯跡の発掘調査報告−」『横須賀市文化財調査報告書』第 49 集　横須賀市教育委員会

松本太郎 2013『東国の土器と官衙遺跡』株式会社六一書房

古代の入間を考える会 2014『南比企窯と東金子窯（Ⅰ)』

古代の入間を考える会 2015『南比企窯と東金子窯（Ⅱ)』

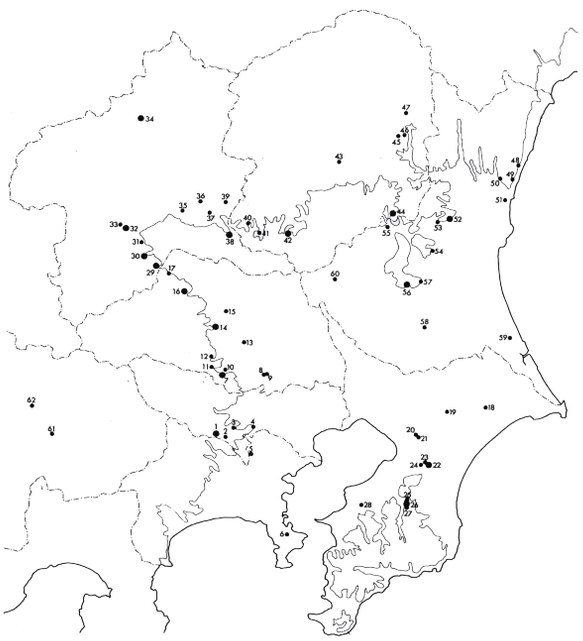
八王子市 2015『新八王子市史　通史編 1　原始・古代』

依田亮一 2015「東国の官衙と土器−相模国の事例を中心として−」『官衙・集落と土器Ⅰ−宮都・官衙と土器−』独立行政法人 国立文化財機構奈良文化財研究所

鶴間正昭 2019『律令国家形成期の土器様相』株式会社六一書房

手島芙実子 2022『南比企窯跡群総括報告書Ⅰ』鳩山町埋蔵文化財調査報告第 47 集 鳩山町教育委員会

渡辺一 2022『須恵器研究の新視角』八木書店



第34図　須恵器窯跡分布図

東京=1:南多摩窯址群御殿山地区　2:同瓦尾根地区No342-1号窯　3:同百草・和田地区百草・和田1・2号窯　No446-1・2号窯跡　4:同大丸地区No513-1・2号窯跡　神奈川=5:熊ヶ谷東窯跡　6:小矢部窯跡　埼玉=7:東金子窯跡群　8:新開窯跡群　9:栗谷ツ窯跡　10:東八木窯跡群　11:川原毛久保窯跡群　12:高岡窯跡群　13:西谷ツ窯跡　14:南比企窯跡群　15:羽尾窯跡群　16:末野窯跡群　17:児玉窯跡群　千葉=18:八辺窯跡　19:吉川窯跡　20:中原窯跡群　21:宇津志野窯跡群　22:南河原坂窯跡群　23:坂ノ越窯跡群　24:下片岡窯跡　25:石川窯跡群　26:永田・不入窯跡群　27:大和田窯跡　28:上名主ヶ谷窯跡　群馬=29:藤岡窯跡群　30:吉川窯跡群　31:乗附窯跡群　32:秋間窯跡群　33:里見窯跡群　34:月夜野窯跡群　35:八ツ峰窯跡　36:雷電山窯跡群　37:笠懸窯跡群　38:金山窯跡群　39:桐生窯跡群　栃木=40:岡窯跡　41:馬坂窯跡　42:三毳山窯跡群　43:宇都宮窯跡群　44:益子窯跡群　45:銭神窯跡群　46:中山窯跡　47:小砂窯跡群　茨城=48:成沢窯跡　49:大沼窯跡　50:幡山窯跡群　51:馬頭根窯跡群　52:木葉下窯跡群　53:大満窯跡群　54:岩間窯跡群　55:堀ノ内窯跡群　56:新治窯跡群　57:一丁田窯跡群　58:道原烏瓜窯跡　59:入田窯跡　60:三和窯跡群　山梨=61:境川窯跡群　62:天狗沢窯跡群

第１図　関東地方の須恵器窯分布

（酒井 1995, 第 34 図を縮小して引用）

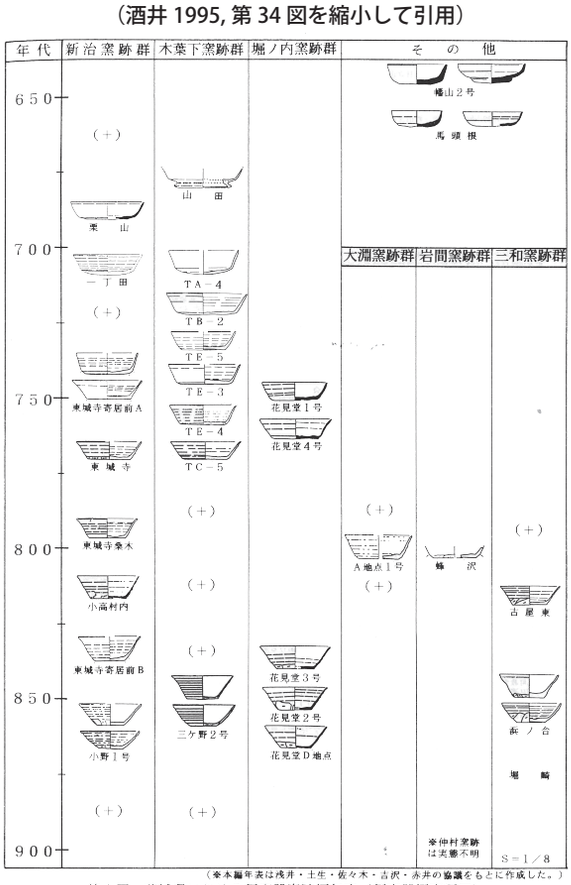
第２表　関東の主要窯跡編年表

	東京	埼玉 南比企	埼玉 東金子周辺	千葉 上総	千葉 下総	栃木 西部	栃木 東部	茨城 北部	茨城 南部	群馬
550		桜山6 桜山8								菅ノ沢
600		羽尾 根平				馬坂	南高岡	幡山		
650		舞台C-1・2						馬頭根1		
700	No.342-1 No.446-1・2	0期				八幡，北山		木葉下A-4 一町田		
	No.513-1・2 百草・和田1	I期					原東4 原東1・3	〃 B-1・2		末沢1
		II期		I期						八ツ峰
		III期	前内出1・2	II期		水道山1・2		木葉下C-1・2 木葉下C-4		
				III期	八辺	〃 3		木葉下E-7 花見堂1		沢入A
		IV期					原東2			
					吉川	三通，広袤	中山・八津入	木葉下C-5 花見堂4		
800		V期		IV期				〃 E-3		上小坂
		VI期				日陰沢A，岡		大洲		
							銭神	花見堂3		
	G37窯式	VII期	八坂前4		中原	大芝原		花見堂2		
850	G59窯式		新久A-1・2				滝ノ入			洞
		VIII期			宇津志野		倉見沢			
		IX期							小野，浜ノ台	
900	G25窯式		新久D-1・3				脇屋1・2			下五反田 深沢C
	G5窯式古									須磨野A
	G5窯式中		新開1							
950	G5窯式新		栗谷ツ1							
	G14窯式									
1000										

† 各報告などより

第２図　関東地方における須恵器窯跡の編年

（酒井 1995, 第２表を縮小して引用）



（※本編年表は浅井・土生・荻々木・古沢・赤井の協議をもとに作成した。）

第１図　茨城県における須恵器窯跡編年表（須恵器坏変遷図）

「３大窯跡群」　１）新治窯跡群　－県南部（新治郡新治村ほか所在）
２）木葉下窯跡群－県北部（水戸市所在）
３）堀ノ内窯跡群－県西北部（西茨城郡岩瀬町所在）

＜検討対象窯跡と３大窯跡群の併行関係＞

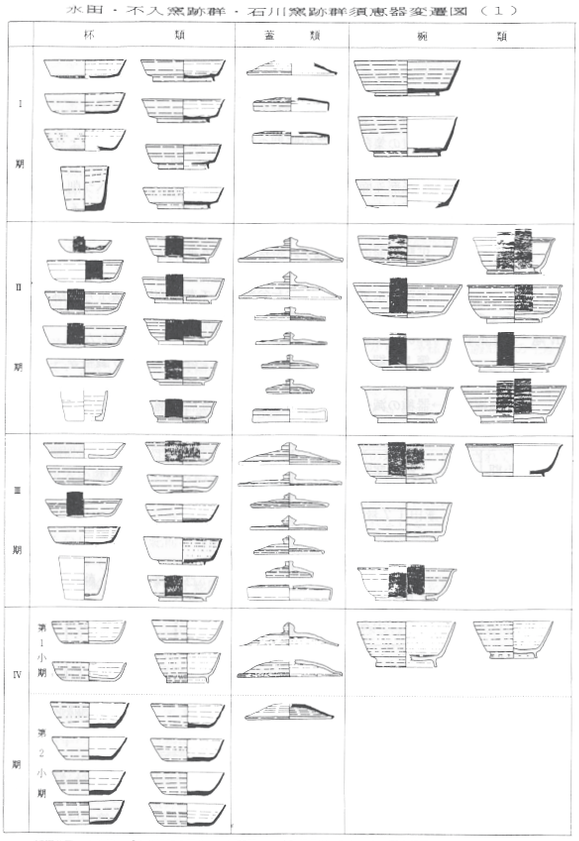
	新治窯跡群	木葉下窯跡群	堀ノ内窯跡群
８C中	東城寺	ＴＥ－３	花見堂１号
	寄居前Ａ	ＴＥ－４	花見堂４号
後	東城寺	ＴＣ－５	
	東城寺桑木		
９C前	小高村内		
	東城寺		
中	寄居前Ｂ		花見堂３号・
	小野１号	三ケ野２号	２号・Ｄ地点

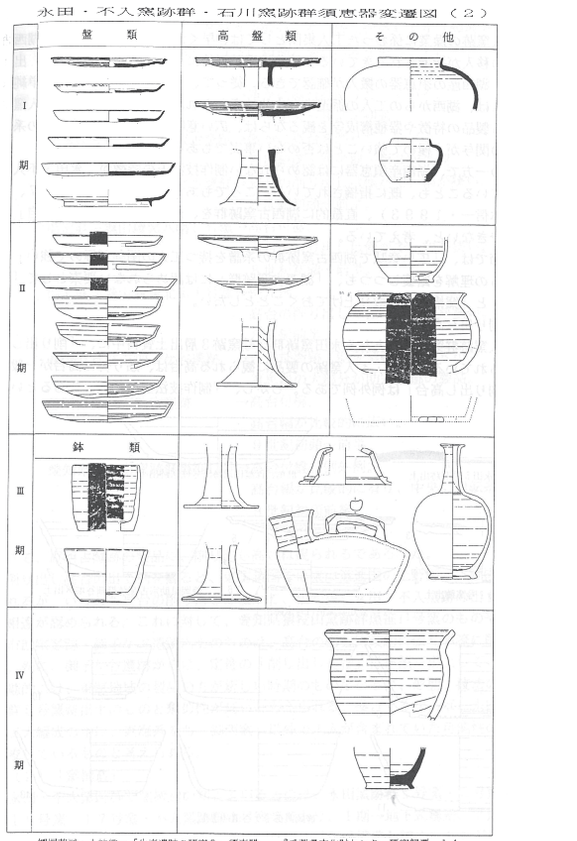
開窯期と分布の様相比較

	新治窯跡群（新治郡）	木葉下窯跡群（那珂郡）
開窯時期	栗山窯が７世紀末 一町田窯が８世紀第１四半期頃	山田窯が７世紀第４四半期 ＴＡ－４が７世紀末～８世紀第１四半期
分　布	初期の栗山・一町田窯は茨城郡衙、茨城廃寺に近い丘陵地。８世紀中葉頃から西方の流域山東南縁の丘陵地に移動し、集中的に経営される。	初期の山田窯は、那珂郡衙比定地、台渡里廃寺に比較的近い丘陵地。ＴＡ－４以降はさらに西方の高取山周辺の丘陵地に集中して営まれる。
瓦生産との関係	一町田窯は瓦陶兼業窯である。茨城廃寺の創建期の瓦を生産しており、須恵窯と同じ叩き目をもつ平瓦などが発見されている。一町田窯周辺は瓦専用窯も分布している。	瓦生産を行った窯は未発見である。ＴＥ－３やＴＥ－６などの窯では台渡里廃寺の瓦が焼台として発見されており、８世紀中葉頃には付近で瓦生産をしていた可能性がある。

第３図　茨城県における須恵器の変遷と各窯の関係

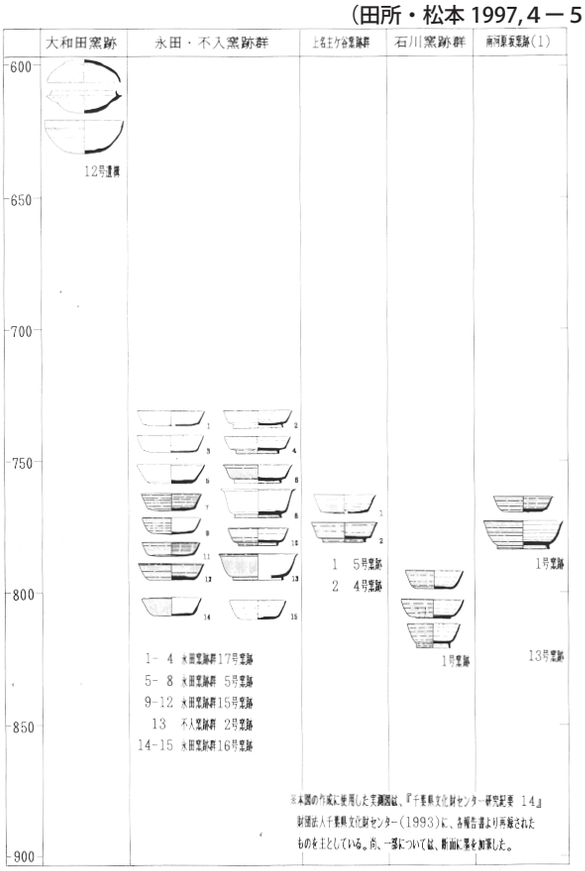
（左図：赤井 1997, 第１図を縮小して引用 / 右上図：赤井 1997,60 頁より引用 / 右下図：吉澤悟 1997, 第 47 頁より引用）



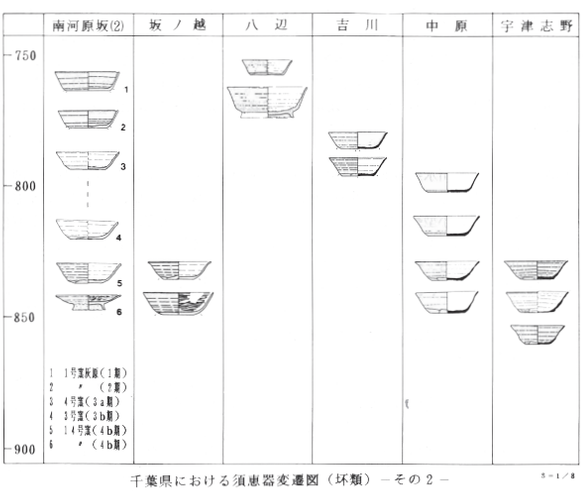


第４図　千葉県永田・不入窯跡群石川窯跡群出土須恵器の変遷

（田所・松本 1997,４－５頁を 50% 縮小して引用）



千葉県における須恵器変遷図（杯類）－その１－　　S＝1/8



千葉県における須恵器変遷図（坏類）－その２－　　S=1/8

第５図　千葉県における須恵器の変遷

（左・右図：田所 1997,12 ー 13 頁を 50% 縮小して引用）

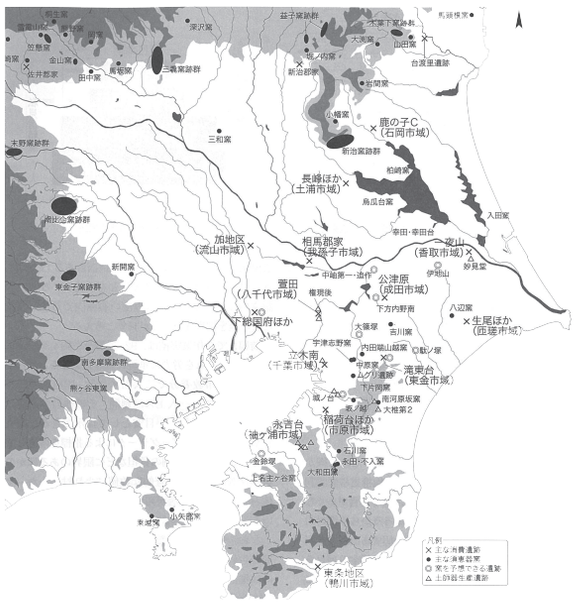
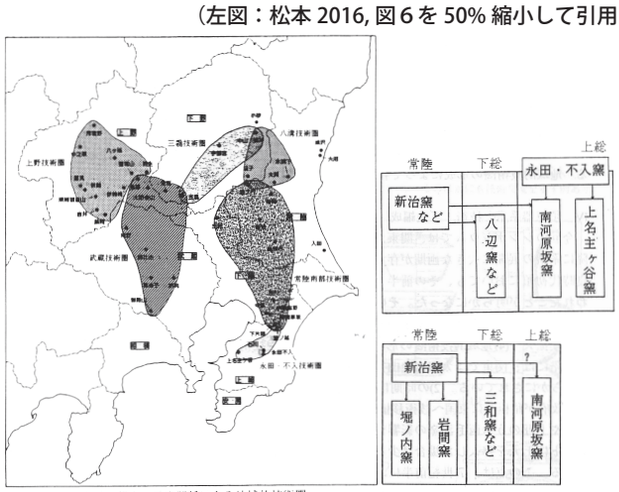


表3　房総地域で出土する、もしくは出土が推測できる須恵器や施釉陶器の主な生産地

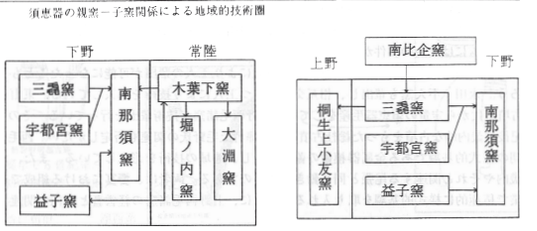
地域	窯・類型	場所・時期	資料の特徴
下総	下総	千葉県千葉市・佐倉市など鹿島川流域中心、一部上総国域に広がる。８Ｃ後半～９Ｃが中心。	千葉市域産とも称す。酸化焔焼成の個体が多く、器面に貝入状のクラックがはいるなど耐火度が低い。素地は粗く、白・黒・赤色粒のほか針状物やガラス質透明粒を含む。蛍光Ｘ線分析では Fe の多さが目立つ。新治窯の系譜をひく。
	竺和	茨城県古河市（旧三和町）。９Ｃ中心。	体部下半や底部に幅広のヘラ削りを施す。口縁部が内湾してロクロ目が密に残るものもある。素地は緻密、青灰～灰色、黄みがかった極小の白色粒を多く含む。Fe・Na が少なめで新治産に近い元素比。系譜も新治窯か。
上総	上総	千葉県市原市永田・不入窯ほか近隣にもある。８Ｃ2/4 後半～９Ｃ初頭。	杯類底部はヘラ切りから糸切りへと変化、回転ヘラ削りを多用。素地は緻密だが粘性が乏しく新相ほど粗くざらつく。青灰～灰～白色などの色調で、白色粒（～極小）や針状物を含むことがある。Sr や Ca、Fe が卓越。南比企窯と類似する元素比。
常陸	新治	茨城県土浦市など筑波山南東麓に広がる。７Ｃ中頃～９Ｃ。	杯類底部はヘラ切り、回転ヘラ削りを多用。暗座と共に手持ちヘラ削りへ移行。素地は粗く還元焼成でも軟質が多い。白雲母、大型の白色粒、半透明粒など含む。しかし窯調査例が少なく、蛍光Ｘ線分析値、胎土傾向にはばらつきがある。
	未葉下	茨城県水戸市。７Ｃ2/2～	杯類底部はヘラ切り、回転ヘラ削りから、手持ちヘラ削り、未調整、ナデへと変化。体部下端ヘラ削りは稀。素地は灰色～濃灰色、緑がかるものもある。優品は東海産のように灰白色で自然釉をかぶる。胎土に丸みのある灰色のチャートや針状物を含むことあり。笠間市大淵窯も胎土や製作技法が共通し区別は困難。
	堀ノ内	茨城県桜川市。８～９Ｃ1/2。	「新大窯」などの焼成前刻書が著名で、高台器種、蓋、盤類を生産するなど、郡司層の関与を示す好例。杯類底部はヘラ切り。主に茨城県西部に流通するが、千葉県北部にも少量有り。
	常陸Ａ類	筑波山南東麓？８Ｃ3/3 中心？	器形や技法、胎土は基本的に新治産に類似。堅緻な焼成と白雲母を含まない点は相違点で、高温焼成によって白雲母が融解したか。近年発見の小幡窯と共通点が多い。
	常陸Ｂ1 類	常陸国域南部？８Ｃ2/4 中心。	高台杯、高台盤、蓋が多く、双耳杯やコップ形杯も少量。底部外面は丁寧な回転ヘラ削り、爪形痕が遺る。素地は緻密で含有物が少なく、表面は灰、青灰、暗青灰、灰オリーブ色で、断面は暗赤褐色の場合あり。Fe 以外は 0.5 前後以上で、蛍光Ｘ線分析個体の数値はほぼ一致し、窯や焼成機会を限定できるか。
	常陸Ｂ2 類	常陸国域南部？（信太郡域？）。８Ｃ2/3～９Ｃ前が多い。	杯類、盤類、蓋、甕などがある。常陸Ｂ1 類はどではないが緻密で、白色粒、半透明粒、ガラス状の透明粒のほか、極小の黄白色粒を含むものがある。色調は青灰色だけでなく、淡黄、灰白、にぶい黄灰色など焼成不良気味もあり。茨城県稲敷市周辺？
	常陸Ｂ類	常陸国域南部？８Ｃ2/4 中心。	常陸国域南部？Ｂ1・Ｂ2 類のいずれか判別できないもの。器形、製作技法、器種構成が類似しながら胎土が異なるものを含める。
武蔵	末野	埼玉県寄居町。古墳時代～10Ｃ。	畔・郡家成立期の杯類、蓋、盤類生産が目立つ。暗灰・青灰～緑灰色の素地で、白色粒・半透明粒のほか片岩系の雲が特徴的。
	南比企	埼玉県嵐山町・東松山市ほか。７Ｃ末に生産本格化、10Ｃ代まで。	主要食器の杯・椀とも無台がほとんど。底部調整は全面手持ちないし回転ヘラ削りから周縁部回転ヘラ削り、９Ｃ前後からは回転糸切り未調整と変化。素地は緻密なものから、粗く白色粒を多く含むものへ変化。針状物の多量含有で有名。
	東金子	埼玉県入間市。８～９Ｃ。	底部調整は南比企窯に類似。見込み部は角をつくるように屈曲し、底部が厚く重量感あり。素地８Ｃ2/2 はきわめて緻密で粘性があり、灰色～あざやかな青灰色。時期が降ると灰色～暗灰色、白色粒等微粒子含有、ざらついた粗い質感。
	南多摩	東京都八王子市・多摩市ほか。７Ｃ3/4～10Ｃ。	常陸国伊豆の国市。８Ｃ2/2 中心。
東海	花坂	静岡県島田市。10～11Ｃ。	杯や杯蓋のほか小型瓶（壺Ｇ）の出土が広く知られる。
	旗指	静岡県島田市。10～11Ｃ。	灰釉陶器を生産。素地は粘性が弱く胎土は粗め。大粒の礫が混入することがある。
	清ヶ谷	静岡県掛川市。８～11Ｃ。	須恵器は湖西窯の系譜を引いて胎土も類似する。灰釉陶器も生産。
	宮口	静岡県浜松市。９～11Ｃ。	猿投窯Ｋ-14 段階と早くに成立する灰釉陶器窯。
	湖西	静岡県湖西市、愛知県豊橋市ほか。５～９Ｃ。	７～８Ｃ 1/2 の須恵器は関東・東北に広く流通。杯Ｈ・Ｂおよび蓋だけでなく、袋物が多い、素地は極めて緻密で含有物が少なく、器面に「ノタ目」がみられることがある。色調は器面が白灰～明灰色、断面は白灰～明赤褐色である。
	二川	愛知県豊橋市ほか。９Ｃ～11Ｃ。	須恵器だけでなく灰釉・緑釉も生産。灰釉は生産最盛期が猿投窯より遅れる。高台が猿投ほど先鋭でなく器種構成も一部相違。また、素地も猿投ほど緻密でなく極小白色粒を含むことが多い。
	猿投・瀬戸	愛知県名古屋市・瀬戸市・三好町ほか。５～11Ｃ。	須恵器・緑釉・灰釉を生産。関東で出土する須恵器のほとんどが袋物や甕類。緻密で含有物が少ない素地だが黒色粒（就分の鳴き出し）がみられる。色調は須恵器が黄灰、赤黒、赤褐。暗灰色灰釉陶器は灰白色が一般的。須恵器袋物には自然釉が顕著で、褒には黄土を塗るものがみられる。
	東濃	岐阜県多治見市ほか。９～11Ｃ。	７～９Ｃに須恵器も生産するがごくわずか。灰釉・緑釉陶器の生産が中心。灰釉は生産最盛期が猿投窯より遅れる。器種構成が一部相違。素地は猿投より緻密で割れ口が塩ビ管状になる場合がある。流通は主に東山道ルート。
	美濃須衛	岐阜県各務原市ほか。６～11Ｃ。	須恵器・灰釉・緑釉などを生産。国名刻印で著名。関東ではほとんど出土しない。胎土は緻密だが湖西・猿投窯に比べて粗く粘性がない印象で灰色がかっている。
	尾北	愛知県小牧市ほか。６～11Ｃ。	猿投窯と河川で隔たるものの胎土、製作技術、軸調など共通点が多い。
畿内	京都	京都府京都市・亀岡市ほか。８～11Ｃ。	関東へは緑釉が少量搬入される。猿投窯に比べて品質のばらつき幅がある。椀・皿で削り出し高台にしたり、素地が粉っぽく軸が薄い場合は京都産の可能性が高い。
	陶邑	大阪府堺市・和泉市ほか。４Ｃ末～９Ｃ。	６Ｃ前半位までは全国的に供給し、初期の須恵器生産で中核的な役割を担った。本稿に関わる時期ではあまり出土しない。

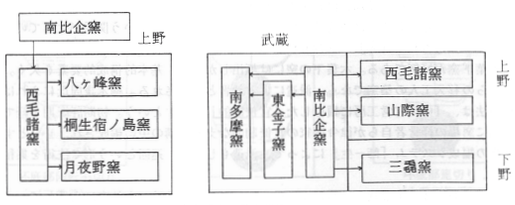
第６図　千葉県内の須恵器窯跡群分布と県内出土須恵器の産地

（左図：松本 2016, 図６を 50% 縮小して引用 / 右図：松本 2016, 表３を縮小して引用）

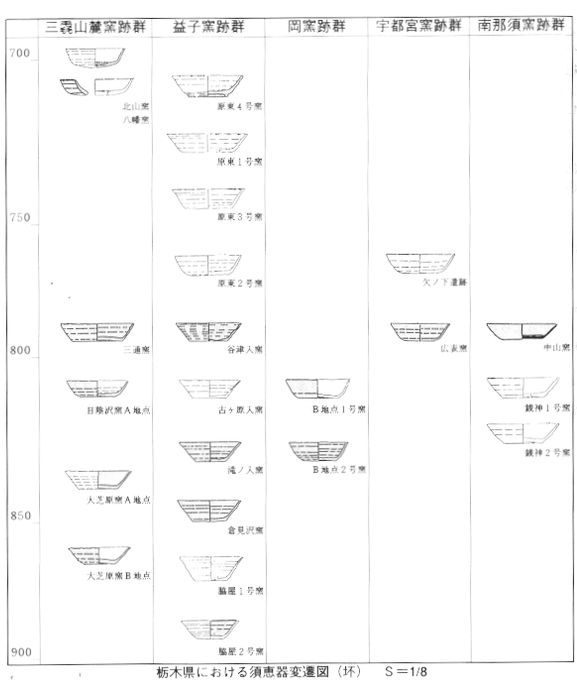


須恵器の窯窯－子窯関係による地域的技術圏





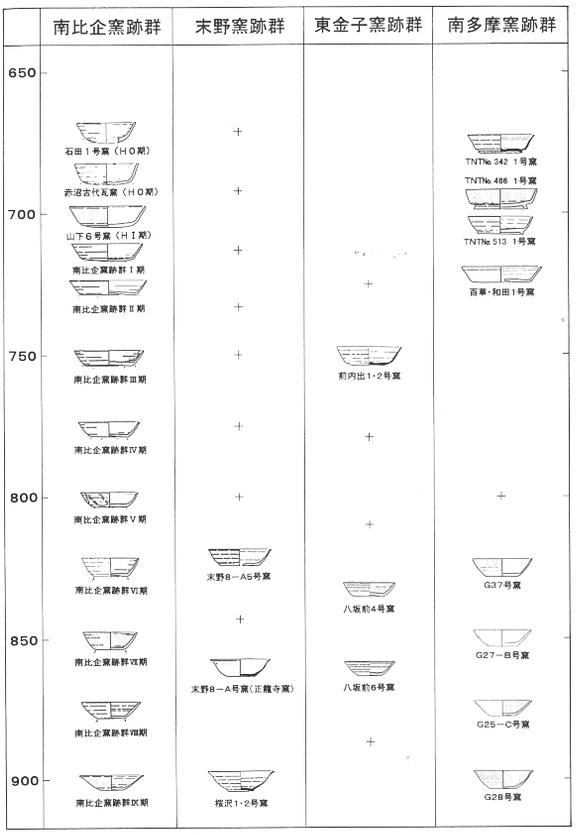
主な窯窯－子窯関係



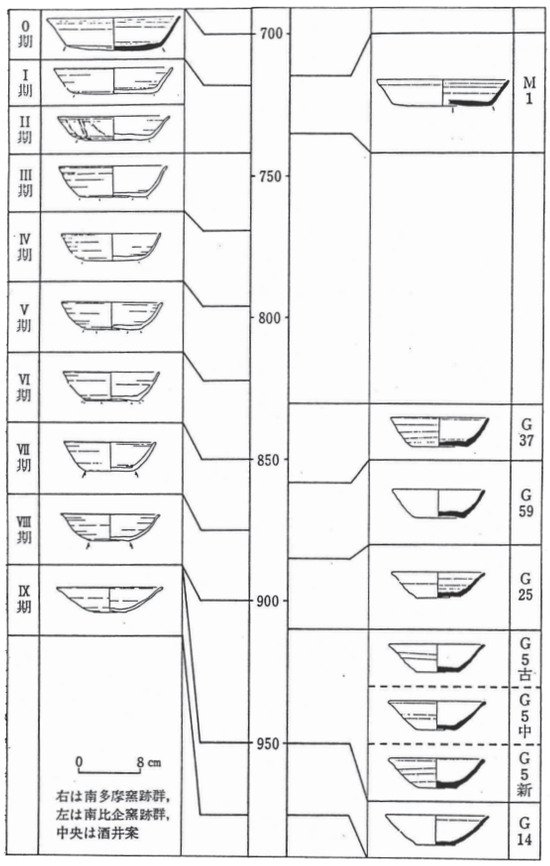
栃木県における須恵器変遷図（坏）　Ｓ＝1/8

第７図　栃木県における須恵器の変遷と主要窯跡の関係

（左図：津野 1997,247 頁を 50% 縮小して引用 / 右図：津野 1997,86 頁を 50% 縮小して引用）



第２図　武蔵国における須恵器変遷図（坏）S＝1/8



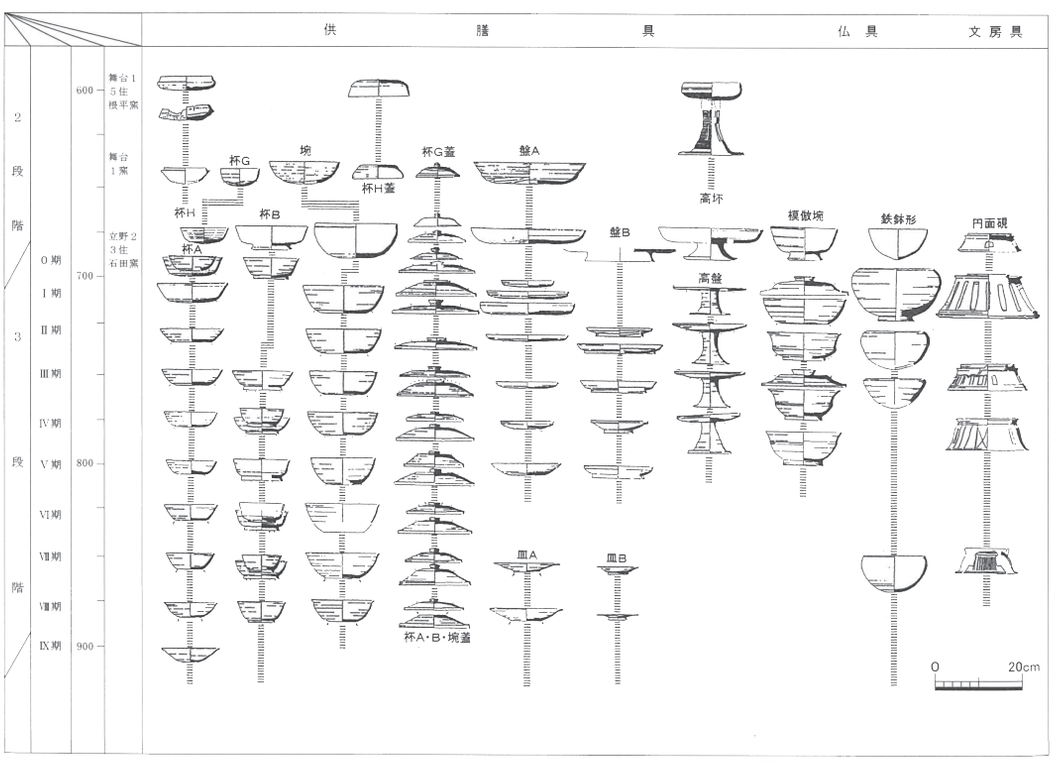
第88図　南比企窯跡群・南多摩窯跡群須恵器編年対照図
（渡辺一1990,福田健司1986を引用改編）

第８図　武蔵国における須恵器坏の変遷

（鶴間・宍野 1997, 第２図を 50% 縮小して引用）

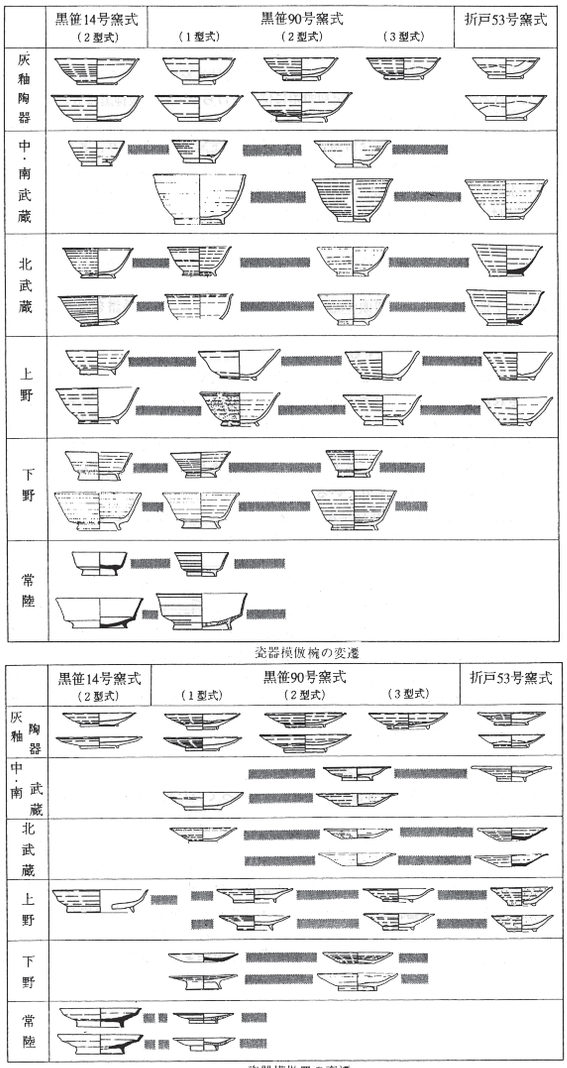
第９図　南比企窯跡群と南多摩窯跡群の編年対照図

（酒井 2001,112 頁を縮小して引用）



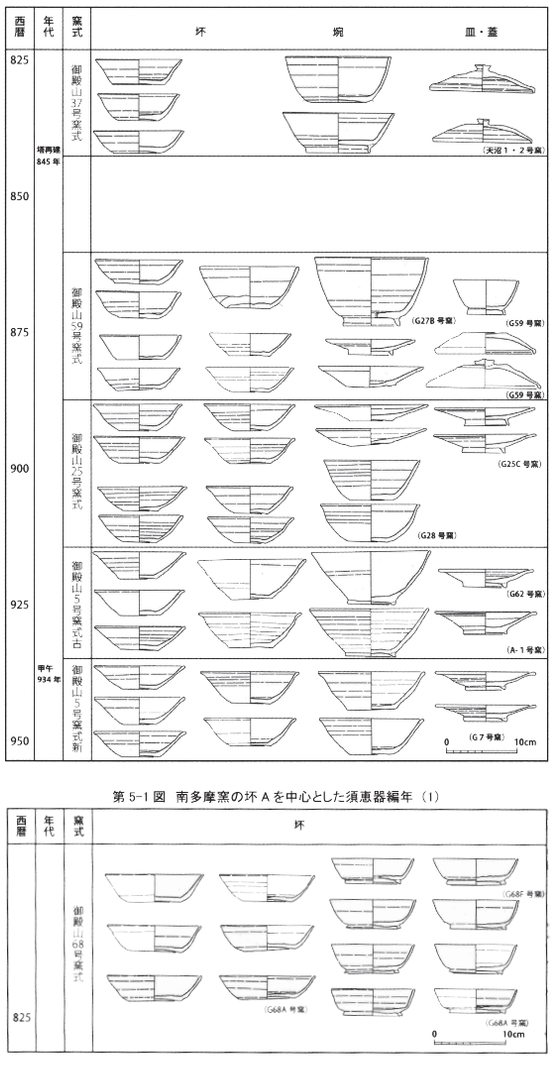
第 10 図　南比企窯跡群出土須恵器の変遷

（渡辺 1993 挿図を縮小して引用）



第 11 図　灰釉陶器模倣椀・皿の変遷

（津野 1997,244 頁を 50% 縮小して引用）

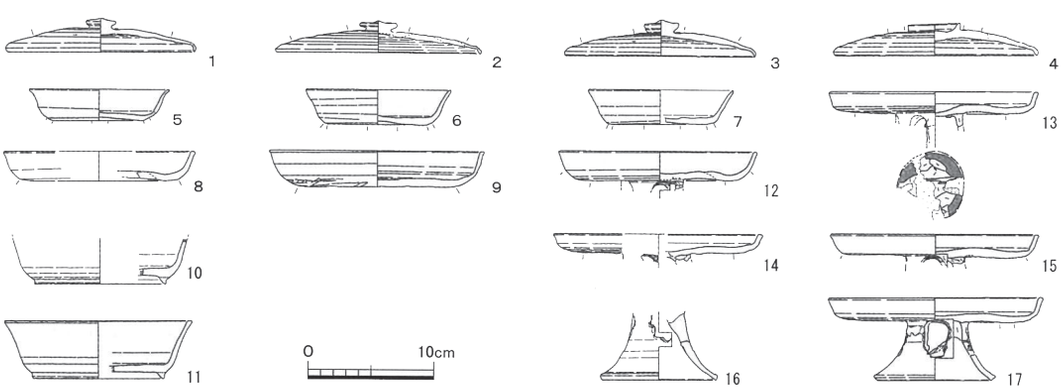


第 5-1 図　南多摩窯の坏 A を中心とした須恵器編年（1）

第 5-2 図　南多摩窯の坏 A を中心とした須恵器編年（2）

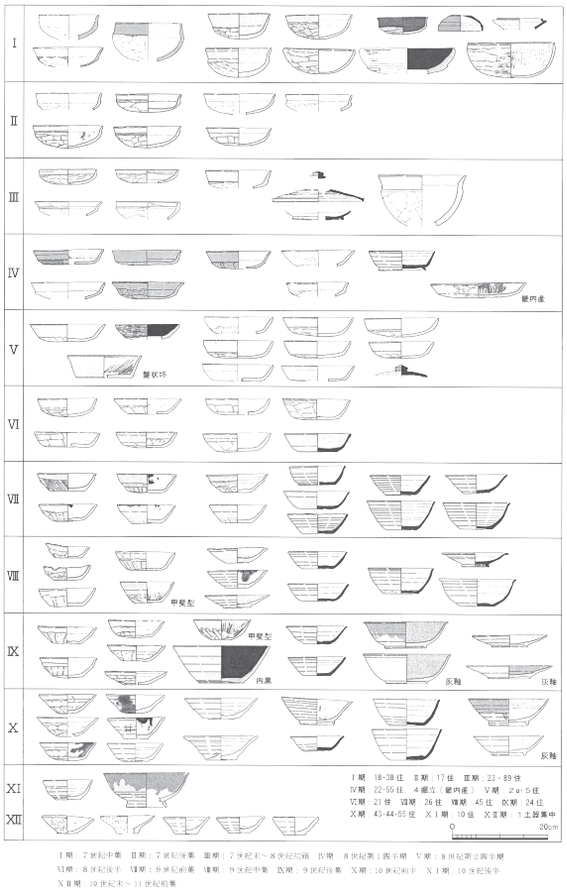
第 12 図　南多摩窯跡群出土須恵器坏の変遷

（服部・河合ほか 2011, 第５－１・２図を 50% 縮小して引用）

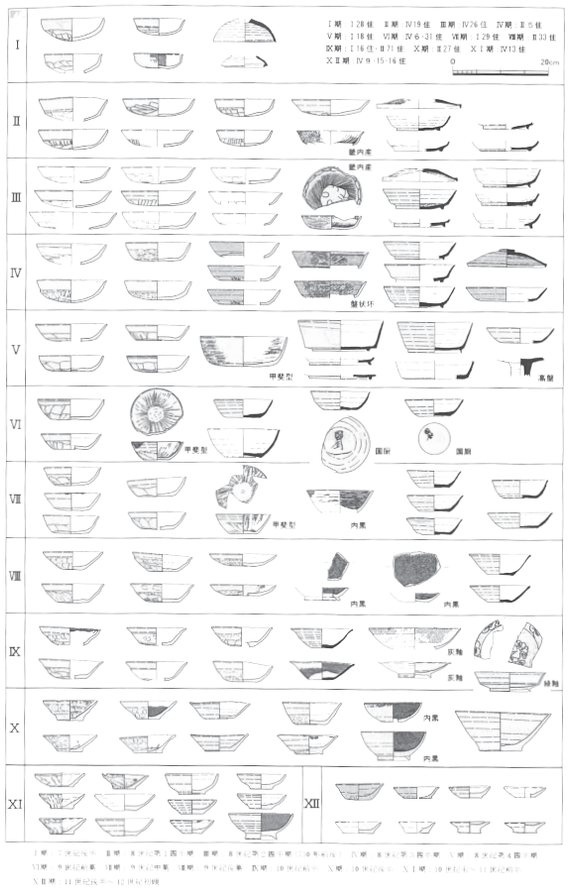


第 13 図　乗越遺跡出土須恵器

（中三川 2011 より引用）



第 14 図　相模国府域出土土器の変遷
（依田 2015, 図 11 を縮小して引用）



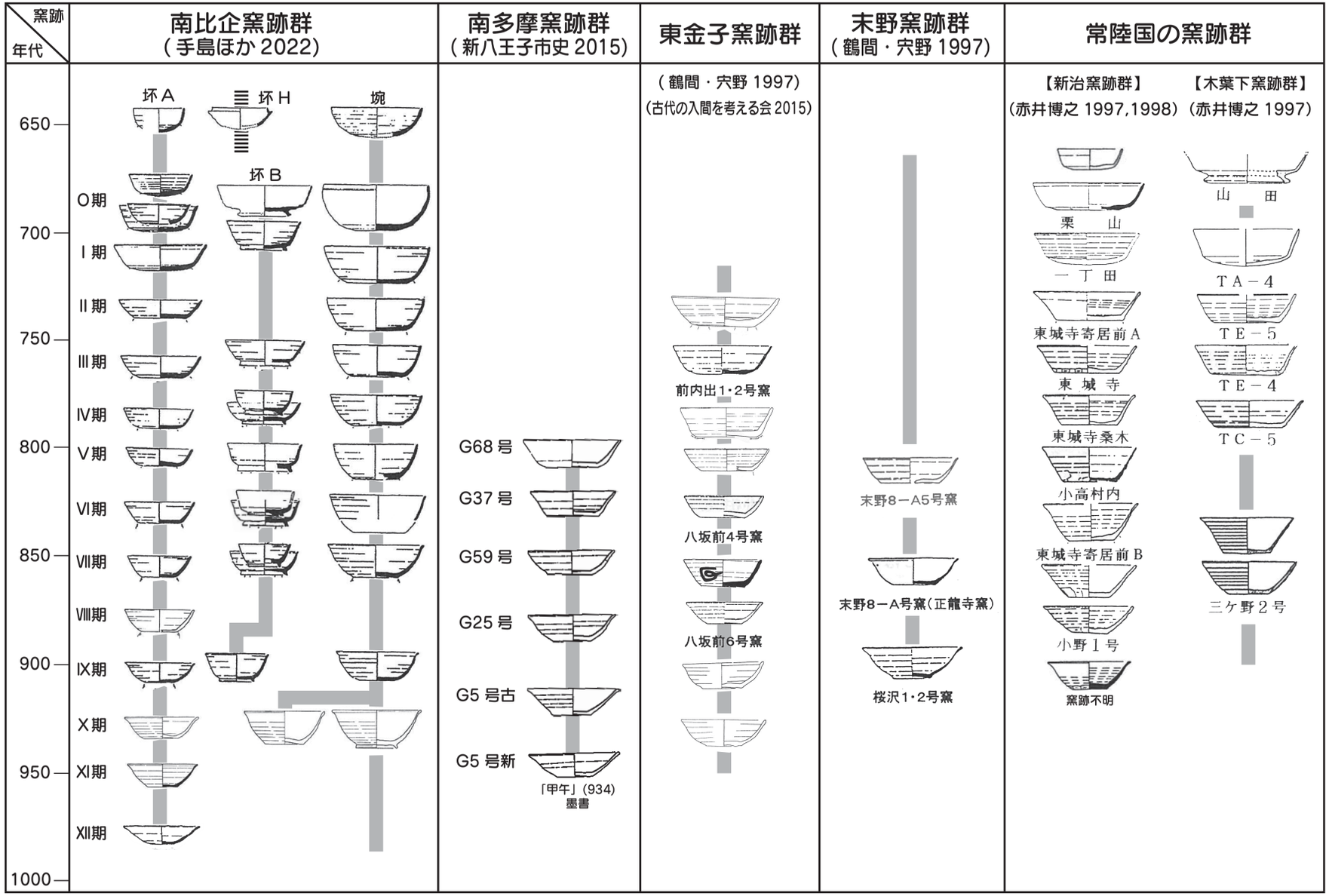
第 15 図　高座郡家周辺集落出土土器の変遷
（依田 2015, 図 17 を縮小して引用）

西暦	7C 8C 9C 10C 11C
年代	700 750 800 850 900 950 1000
	前葉 中葉 後葉 前葉 中葉 後葉 前葉 中葉 後葉
	第1四半期 第2四半期 第3四半期 第4四半期 第1四半期 第2四半期 第3四半期 第4四半期 第1四半期 第2四半期 第3四半期 第4四半期
歴史事項・共伴関係資料	694 701 この頃 藤原京 大宝令 国衙 遷都 制定 整備 741 757 758 769 771 国分寺 国分寺 新羅郡 入間郡 武蔵国東海道 建立詔 具注暦 設置 正倉焼失 ヘ所属変更 833 845 悲田処 武蔵国分寺 を置く 七重塔再建 934 宮の里遺跡須恵器 墨書「甲午」
南比企窯跡群旭山編年（1987 渡辺）	H0 期 H Ⅰ期 H Ⅱ期 H Ⅲ期 H Ⅳ期 H Ⅴ期 H Ⅵ期 H Ⅶ期 H Ⅷ期 H Ⅸ期（境田窯）
南比企窯跡群編年（1993 酒井）	H0 期 H Ⅰ期 H Ⅱ期 H Ⅲ期 H Ⅳ期 H Ⅴ期 H Ⅵ期 H Ⅶ期 H Ⅷ期 ＋ H Ⅸ期
南比企窯跡群編年（2021 酒井）	H Ⅰ期 H Ⅱ期 H Ⅲ期 H Ⅳ期 H Ⅴ期 H Ⅵ期 H Ⅶ期 H Ⅷ期 H Ⅸ期 H Ⅹ期 H Ⅺ期 H Ⅻ期
東金子窯跡群編年	前内出 1 前内出 2 ＋ ＋ ＋ 八坂前 4 新久 A-1 八坂前 6 新久 D-1 新開 1 栗谷ツ 1
参考：若葉台遺跡編年（2006 加藤）	705～720 Ⅰ期 725～745 Ⅱ期 745～770 Ⅲ期（武蔵台） 770～795 Ⅳ期 795～815 Ⅴ期 815～835 Ⅵ期 835～860 Ⅶ期 860～885 Ⅷ期 885～910 Ⅸ期 10C 第 1 四半 Ⅹ期
南多摩窯跡群編年（1981 服部・福田まで）	M-1 窯式 G9 窯式（古）G9 窯式 ＋ ＋ G37 窯式 G59 窯式 G25 窯式 G5 窯式 G14 窯式
南多摩窯跡群編年（1982 服部）	～850 G37 窯式 ＋ 870～900 G59 窯式 900～930 G25 窯式 930～980 G5 窯式 980～1010 G14 窯式
南多摩窯跡群編年（1986 福田）	～850 G37 窯式 850～875 G59 窯式 875～910 G25 窯式 910 G5 窯式古 930～950 G5 窯式中 950～970 G5 窯式新 970～990 G14 窯式
南多摩窯跡群編年（南多摩窯跡群 2001）ほか	№342 446 T N T №513 G68A・F 窯式 G37 窯式（大田 1・2 号窯） G27B（G59）窯式 G25C 窯式 G28G62・G1A 窯式
南多摩窯跡群編年（2017 福田）	老洞 1 M1 Ma2 前 Ma2 Ma1 G37 窯式前 G37 窯式 G59 窯式 G25 窯式 G5 窯式古 G5 窯式中 G5 窯式新 G14 窯式
武蔵国府編年（1985 山口）	K 期 N1 期（7C 末～8C 第 1 四半期） N2 期（N1 後～740 年頃） N3 期（740～760 年頃） N4 期（8C 後葉） H1 期（8C 末） H2 期（G37 併行） H3 期（新久 A-1 併行） H4 期（G59 併行） H5 期（G25 併行） H6 期古（G5 古併行） H6 期新（G5 新併行） H7 期（G14 併行）
武蔵国府編年（江口試案）	K 期 N1 期 N2 期 N3 期 N4 期 H1 期 H2 期 H3 期 H4 期 H5 期 H6 期古 H6 期中 H6 期新 H7 期
灰釉陶器編年（尾野 2000 東海土器研）	680～710 Ⅳ期中段階 710～740 Ⅳ期新段階 740～770 Ⅴ期古段階 770～800 Ⅴ期中段階 800～830 Ⅴ期新段階（O10） 830～860 Ⅵ期古段階（IG78～K14） 860～890 Ⅵ期中段階（K90 古） 890～920 Ⅵ期新段階（K90 新） 920～950 Ⅶ期古段階（O53） 950～980 Ⅶ期中段階（H72） 980～1010 Ⅶ期新段階

服部敬史ほか 2011「南多摩窯跡群 須恵器の暦年代検討」の表 1 を一部加筆修正し、2021 酒井および 2017 福田の編年表を加筆した。

第 16 図　武蔵国府編年と武蔵国の須恵器編年および灰釉陶器編年の対比表
（手島2022,第45表を縮小して引用）

縮尺不同



第 17 図　関東地方の須恵器窯編年比較表

（各窯の編年資料を引用）

遠江湖西窯跡群について

湖西市産業部文化観光課　大須賀　広夢

1. はじめに

湖西窯跡群（以下、湖西窯）とは、静岡県湖西市から愛知県豊橋市にかけて分布する、５世紀末から 14 世紀初頭にかけて須恵器及び中世陶器を生産した窯跡の総称である。湖西市内ではこれまでに約 200 地点の窯跡が確認され､総基数は 600 基近くに上ると考えられる。湖西市内に存在する窯跡の８割近くは須恵器窯であり、湖西窯の最盛期である７世紀初頭から８世紀前半にかけてのものが最も多く存在する。また、この時期の製品は東日本の太平洋岸の広範囲に流通する（図１）。最も遠い出土地は青森県八戸市周辺であり、７世紀中頃から８世紀前半の平瓶や長頸瓶、甕などが出土している。

近年､湖西窯の大規模調査が相次いで行われた。令和元年(2019)から令和３年にかけて、湖西市は古見古窯群の大規模な発掘調査を行い、計 18 基の窯跡を確認した。このうち、17 基が７世紀前半から８世紀後半にかけての須恵器窯であった。また、豊橋市でも令和元年から令和４年にかけて深田古窯の発掘調査が実施され、７世紀末から８世紀後半の窯跡が計 24 基確認された。これら２つの調査により、窯体構造や湖西窯内部における地域差などが明らかとなった。

本稿は、初めに湖西窯の須恵器生産の概要を述べた後、近年の湖西市の調査成果と、それを踏まえた今後の課題について述べる。なお、湖西窯の時期区分は後藤建一による編年に基づき記載する（後藤 2015a)。

2. 湖西窯跡群の概要

① 編年及び器種の消長

前述した後藤編年は坏類の変遷を基軸とし、坏類の編年に他器種を位置づけることで湖西窯産須恵器全体の編年が構成されるという特徴を持つ。また、編年上の画期は坏類の消長及び湖西窯の動態に基づき設定される。大まかな各期の特徴は以下の通りである（図２・表３)。

Ⅰ期（５世紀末～６世紀初頭） 埴輪併焼期。本格的な須恵器生産の開始前で、明け通り窯で遺物の散布が確認されているのみである。

Ⅱ期（６世紀初頭～６世紀中頃） 埴輪併焼期かつ本格的な須恵器生産が開始する。

Ⅲ期（６世紀中頃～６世紀末） 埴輪生産が停止し、須恵器専用窯となる。

Ⅳ期（６世紀末～７世紀末） 坏Ｇなど金属器模倣の器種やフラスコ型長頸瓶、陶錘などが出現する。

Ⅴ期（７世紀末～８世紀中頃） 坏Ａ・坏Ｂ・皿・長頸瓶・陶馬などが出現する。

Ⅵ期（８世紀中頃～８世紀末） 有蓋平底坏（箱坏）が出現する。

Ⅶ期（８世紀末～９世紀初頭） 碗や有台皿など時期指向の器種が出現する

② 分布の変遷

湖西窯の多くは、浜名湖から渥美半島にかけて広がる天伯原台地に分布する。天伯原台地は礫層や砂層、シルト層、粘土層から成り、南の太平洋沿岸部の標高が最も高く、北に向かって低くなる「南高北低」の地形を有する。台地を流れる河川は、南の海抜約 80mの地点から北の浜名湖へ注いでおり、台地上にはこれらの河川により形成された、南北方向に延びる丘陵が複数存在する。湖西窯はこの丘陵の標高 30m～40m付近にかけて分布する。比較的高い標高に位置するため、各窯場への移動には尾根筋の道が用いられたと考えられる。このことから、湖西市内の窯は谷ごとではなく丘陵ごとに支群が設定されている。

湖西窯分布の変遷を示したものが図４である。Ⅰ期に笠子川近くの明け通り窯で生産が始まった後、Ⅱ期も笠子川沿いの丘陵で小規模な操業が続く。Ⅲ期は須恵器専用窯に転化し、隣接する丘陵でも生産が開始される。このように、Ⅲ期に窯の分布が広がりはするものの、Ⅰ～Ⅲ期を通じて、湖西窯の中枢部である笠子川周辺で比較的小規模な生産を行うに過ぎない状況であると言える。Ⅳ期に入るとこの状況は一変し、湖西窯の分布が急拡大する。この段階で、西の三河地域や、古見川以東、笠子川以北に分布が広がる。Ⅴ期は湖西窯全体でさらに窯の数が増加する。しかし、Ⅵ期に窯数は急激に減少し、笠子川周辺以外では散発的な生産が行われるのみとなり、Ⅶ期に須恵器生産の終末を迎える（湖西市教育委員会 2024）。

③ 窯構造とその変遷

湖西窯は煙道に階段構造を有することで広く知られる。この構造は、階段の幅が置台として機能するには狭すぎることや、製品を置いた痕跡がないことから、窯詰めや窯出しの際の足場として機能したと考えられる。また、多くの階段構造窯は１段目が高く造られ、焼成部の奥壁を成している。高さは概ね 50㎝前後を測るが、時には１ｍに及ぶものも確認される。

湖西窯の窯構造は、図５の通り後藤によりＡ～Ｇの７種に大別されている。このうち階段構造を有するのはＣ型式（以下、階段構造窯）であり、階段や前庭部の形状からさらに７種に細分される。Ｃ型式の階段構造は湖西窯で須恵器生産が始まった当初から採用されていたわけではなく、生産規模が拡大するⅣ期になって創出される。その後、生産規模が縮小するⅥ期になると階段構造を付さない窯や、隔壁を持つ複室構造の窯が出現する（後藤 2015b）。

3. 古見古窯群の調査とその成果

浜名湖に注ぐ古見川の東岸に鷲津丘陵が、西岸に古見丘陵が位置する。それぞれの主尾根は南北に延び、そこから東西方向へいくつもの支尾根が派生する。古見丘陵には古見古窯群が、鷲津丘陵には谷上古窯群がそれぞれ分布している。

古見古窯群では、令和元年～令和３年（2019～2021）にかけて、工場用地の造成に伴う大規模な発掘調査を実施した（図６）。この調査により、調査対象地約 50ha で後藤編年Ⅳ～Ⅵ期（７世紀初頭～８世紀後半）に位置付けられる窯跡を 16 基確認した。時期別の基数は、Ⅳ期が３基、Ⅴ期が 12 基、Ⅵ期が１基であった[1]。昭和 55 年（1980）に調査され、未報告

となっていた谷上第２地点窯の調査成果も併せると、湖西窯の拡大期から衰退期にあたる窯が連綿と確認されたことになり、須恵器や窯分布の変遷を考えるうえで重要な調査となった（図７）。

また、この時の調査で見つかった窯は土地の改変による影響が比較的少なく、良好な状態で残存しているものが多かったため、湖西窯の窯構造について新たな知見を得ることができた。湖西窯の窯体構造の観点から、主な調査成果を紹介する。

①　天井構造について

古見第 35 地点窯２号窯、古見第　44 地点窯３号窯、及び　46 地点窯２号窯で燃焼部の天井を確認した。過去に実施してきた調査では燃焼部天井が残存する窯がなく、その構造が判然としていなかったが、これにより湖西窯における燃焼部の天井構造の一端が明らかとなった。上記の３基の窯は、燃焼部で天井を低くし、焼成部との境界で急激に天井が立ち上がる構造をしている（図８）。この天井構造は、Ⅳ～Ⅴ期の湖西窯の特徴である奥壁や６～７ｍ程度の比較的小規模な窯体と併せ、内部の蓄熱性能と燃焼効率の上昇の面で有効に働いたと考えられる。燃焼部の天井構造が確認できる窯は、湖西窯ではこの３基だけであるため、他の支群においても発見が待たれる。

②　階段構造について

Ⅳ期に属する３基の窯の奥壁高は、古見第 35 地点窯２号窯で１ｍ、古見第 36 地点１号窯で 1.2m、古見第 38 地点窯で 80㎝であり、非常に高く構築する点が特徴として挙げられる。特に第 36 地点窯は奥壁の中央付近に足掛けが設けられており、さらにこの箇所が還元炎焼成による比熱を受けていたことから、窯の築造時から奥壁を高く構築することを意識していたと考えられる。

調査で見つかったⅤ期に位置付けられる窯 13 基のうち、12 基がⅤ－２期（８世紀前半）に属する。この段階は煙道の階段構造が不明瞭となる例（古見第 44 地点２号窯や古見第 46 地点窯２号窯など）が多く、古見第 44 地点窯１号窯のように窯の主軸から外れる形で煙道を取り付ける窯も現れる。一方で、同地点３号窯のように、前段階から続く明瞭な階段構造の窯も存在する。また、古見第 44 地点窯では、同一地点内の操業にもかかわらず多様な窯構造を有する状況が確認された（図９）。

4.　近年の調査成果と今後の課題

古見古窯群の調査や、同時期に行われた豊橋市での深田古窯の調査を経て、新たな事実や課題が明らかとなった。本稿のまとめに変え、近年の調査成果を踏まえた湖西窯研究の今後の課題について述べる。

①　Ⅴ−２期の様相

Ⅴ−２期は湖西窯全体で基数が増大し、多様な階段構造が採用される時期である。古見古窯群でも同様の状況を確認することができた。一方で製品に着目すると、底部が高台より著しく突出する坏Ｂの出現や、前後の段階で生産されていた皿の生産が停止するなど、それまでの型式や器種組成の変化の方向と異なる、この段階特有の状況が伺える（図 10)。このようなⅤ−２期特有の様相について、他地域の須恵器窯の生産動態や当時の社会制度など、多角的な視点から検討を行う必要がある。

②　製品の流通

かつては、湖西窯製品は東日本の太平洋沿岸部への流通が主であり、畿内では７世紀中頃～後半に、漆の外容器として瓶類や小壺、フラスコ瓶が少量出土するのみとされていた（後藤 2015d)。しかし近年、飛鳥地域で出土する７世紀の土器群に、湖西窯産の供膳具が一定数含まれることが報告されている（尾野・森川・大澤 2017)。また、信濃地域など内陸部での出土例も報告されている（高橋 2015)。このような状況を踏まえると、各地域での出土須恵器の産地同定を通じ、湖西窯製品の流通実態の把握や、生産地・消費地の双方から須恵器の変遷や年代観について改めて検討する必要があると言える。

③　深田古窯との比較

豊橋市の深田古窯では、令和元年（2019）から令和４年（2022）にかけて総数 24 基の須恵器窯が調査された。このうち 15 基は、坏Ｂの形態や、かえり付きの坏Ｂ蓋を持たない点などから後藤編年Ⅴ－２期に位置付けられる。

深田古窯の報告書では、見つかった窯を排煙部の形状から、「奥壁を持ち明確な階段を取り付けるグループ（Ａ型)」、「奥壁は持つものの階段を付さずに斜面とするグループ（Ｂ型)」、「奥壁を持たないグループ（Ｃ型)」の３つの型に分類している。これらのうち、Ⅴ－２期にはＡ型とＢ型の２つの型が併存している（豊橋市教育委員会 2023)。また、出土遺物では深田Ｃ11 号窯から皿と考えられる遺物が２点出土しているものの、同時期の他の窯では確認されていない。このような、煙道の多様化や皿の欠如といった点は、同時期の遠江側の窯と共通している。

一方で、Ⅴ－２期における深田古窯は、比較的まとまった範囲に大量の窯が築かれていることから、複数の窯が同時に操業していた可能性が報告書内で指摘されている（豊橋市教育委員会 2023)。同時期かつ同一地点内では、基本的に１基しか操業しない遠江側と異なった様相を呈する。また、深田Ｄ古窯では猿投窯と類似した瓦塔が出土しているが、遠江側では確認されていない。窯構造の面でも、深田古窯群は置台の使用や、須恵器片を用いた床敷や暗渠の構築など、これまで遠江側で確認されていない構造も確認されている[2]。前述のⅤ－２基が特有の様相を示すことも含めて、これらの独自性がもたらされた背景等を分析する必要があると考える。

註

[1] 古見第 36 地点窯はⅣ期の古段階、Ⅴ期の新段階があり、それぞれ１基として数える。

[2] これらの他に、閉塞に伴うピット群や施釉された須恵器など、遠江側でこれまでに確認されていない構造や製品が報告されている（豊橋教育委員会 2023）。

参考文献

1. 尾野善裕・森川実・大澤正吾 2017「飛鳥地域出土の湖西窯産須恵器」『奈良文化財研究所紀要 17』独立行政法人奈良文化財研究所
2. 湖西市教育委員会 2024『古見古窯群と谷上古窯群』
3. 後藤建一 2015a「第２章　出土遺物の分類と編年」『遠江湖西窯跡群の研究』六一書房
4. 後藤建一 2015b「第３章　製造の技術　窯構造、窯場」『遠江湖西窯跡群の研究』六一書房
5. 後藤建一 2015c「第５章　生産の構造」『遠江湖西窯跡群の研究』六一書房
6. 後藤建一 2015d「第７章　７，８世紀の流通構造」『遠江湖西窯跡群の研究』六一書房
7. 髙橋透 2015「６～７世紀のシナノにおける東海産須恵器の流通」『信濃大室積石塚古墳群の研究Ⅳ－大室谷支郡ムジナゴーロ単位支群の調査－　考察編』明治大学文学部考古学研究室
8. 豊橋市教育委員会 2023『深田古窯（本文編）』

図版出典

図 1　後藤 2015c　図 178 を再トレース及び一部改変。
表 2　後藤 2015a　表 14 を一部改変。
図 3　湖西市教育委員会 2024 を基に作成。
図 4　後藤 2015c 図 134 を再トレース及び一部改変
図 5　後藤 2015b 図 108 を転載。
図 6　筆者作成。
図 7　湖西市教育委員会 2024 を基に作成。
図 8　湖西市教育委員会 2024 から転載。
図 9　湖西市教育委員会 2024 を基に作成。
図 10 湖西市教育委員会 2024 を基に作成。

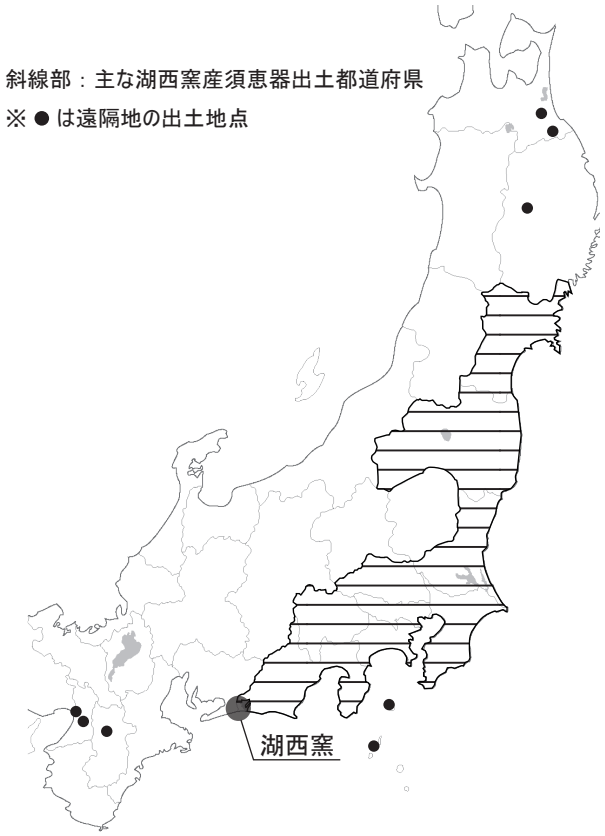


図１　湖西窯製品の流通範囲

表２　湖西窯における主要器種の消長

年代	500						600								700									800		
編年	Ⅰ期	Ⅱ期		Ⅲ期			Ⅳ期								Ⅴ期						Ⅵ期			Ⅶ期		
					2		1			2		3			1		2			3	1	2		1	2	
器種		前	後	1	前	後	前	中	後	前	後	前	中	後	前	後	前	中	後			前	後		前	後
埴輪	■	■	■																							
蓋坏H	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■																
蓋坏G							■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■									
坏A																■	■	■	■	■	■	■	■			
坏B															■	■	■	■	■	■						
箱坏																					■	■	■	■	■	■
宝珠付坏蓋																■	■	■	■	■	■	■	■	■		
平頂坏蓋																									■	■
有蓋高坏		■	■	■	■	■																				
無蓋高坏							■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
皿・大皿類															■	■				■	■	■	■	■	■	■
大皿・有蓋大皿															■	■				■	■	■	■	■	■	■
鋺							■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■				
碗																										■
有台皿																								■	■	■
ハソウ		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■									
短頸壷								■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■					
甕		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■					
提瓶		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■															
フラスコ形長頸瓶							■	■	■	■	■	■	■	■	■											
長頸瓶															■	■	■	■	■	■	■	■	■			
平瓶								■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■								
陶錘							■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■			
陶馬															■	■	■	■	■	■	■	■	■			
陶硯															■	■	■	■	■	■	■					

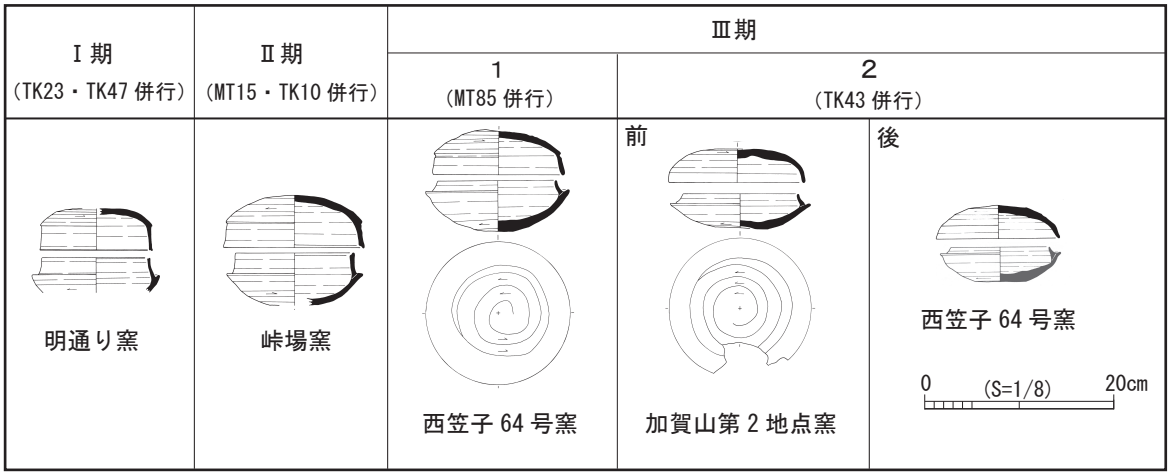


図３　Ⅰ～Ⅲ期における蓋坏の変遷

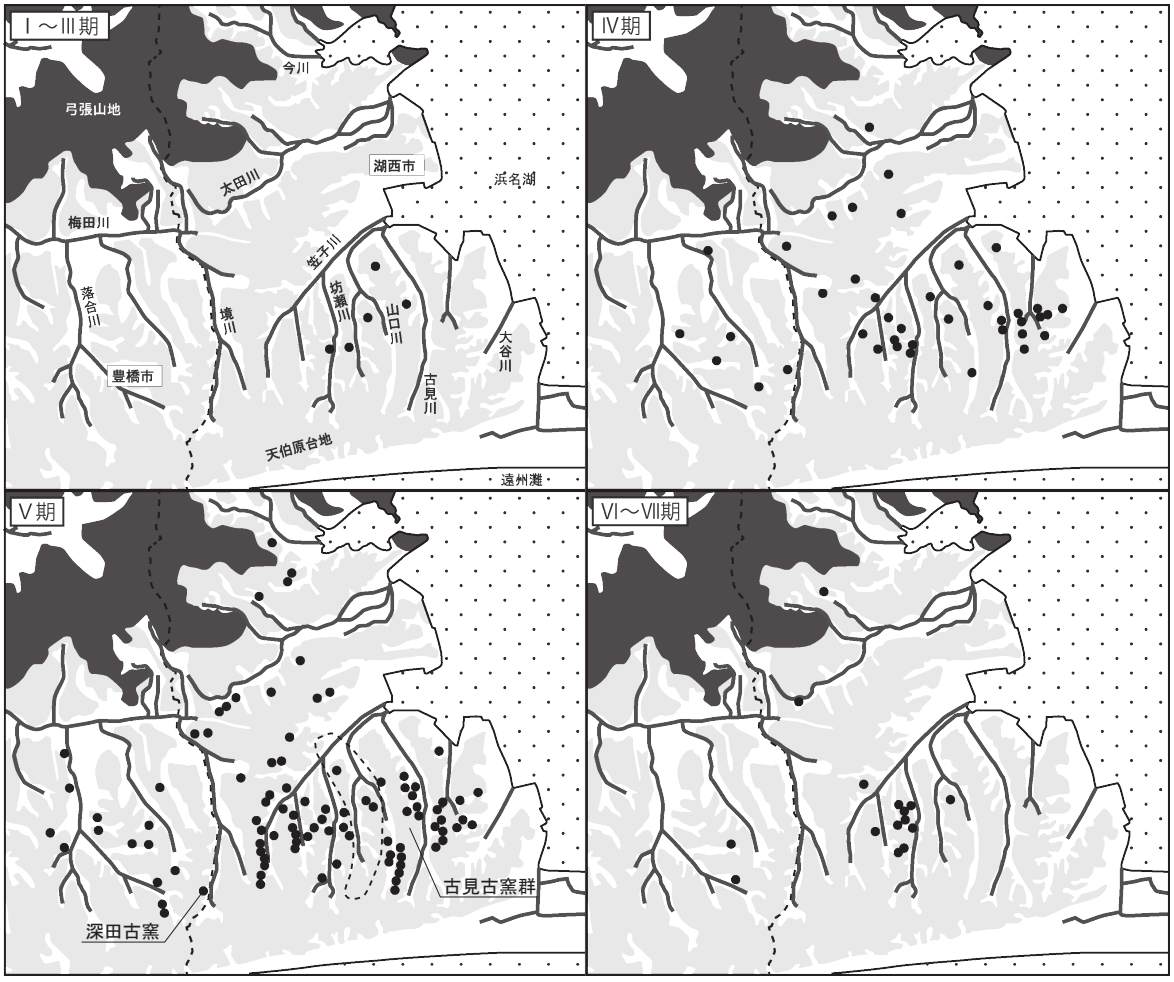


図４　窯分布の変遷

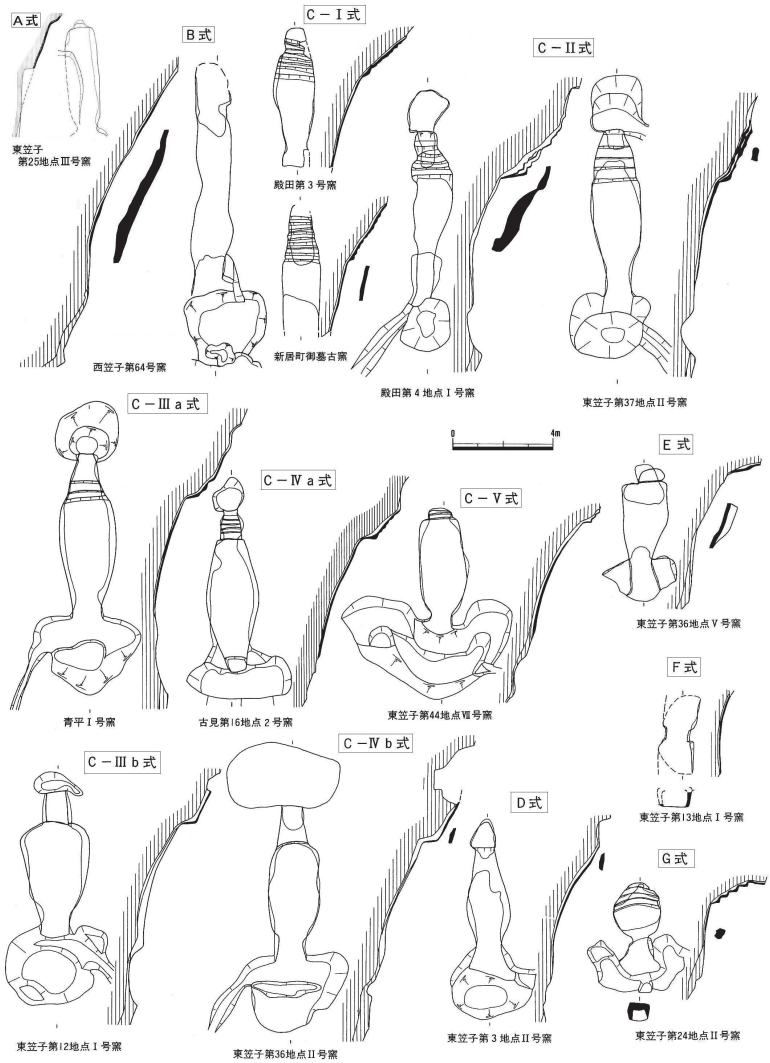


図５
後藤建一による窯構造の分類

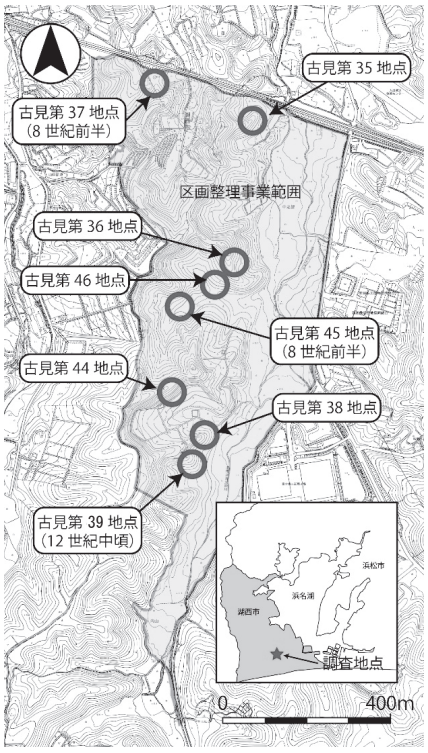


図６　古見古窯群の調査地点位置図

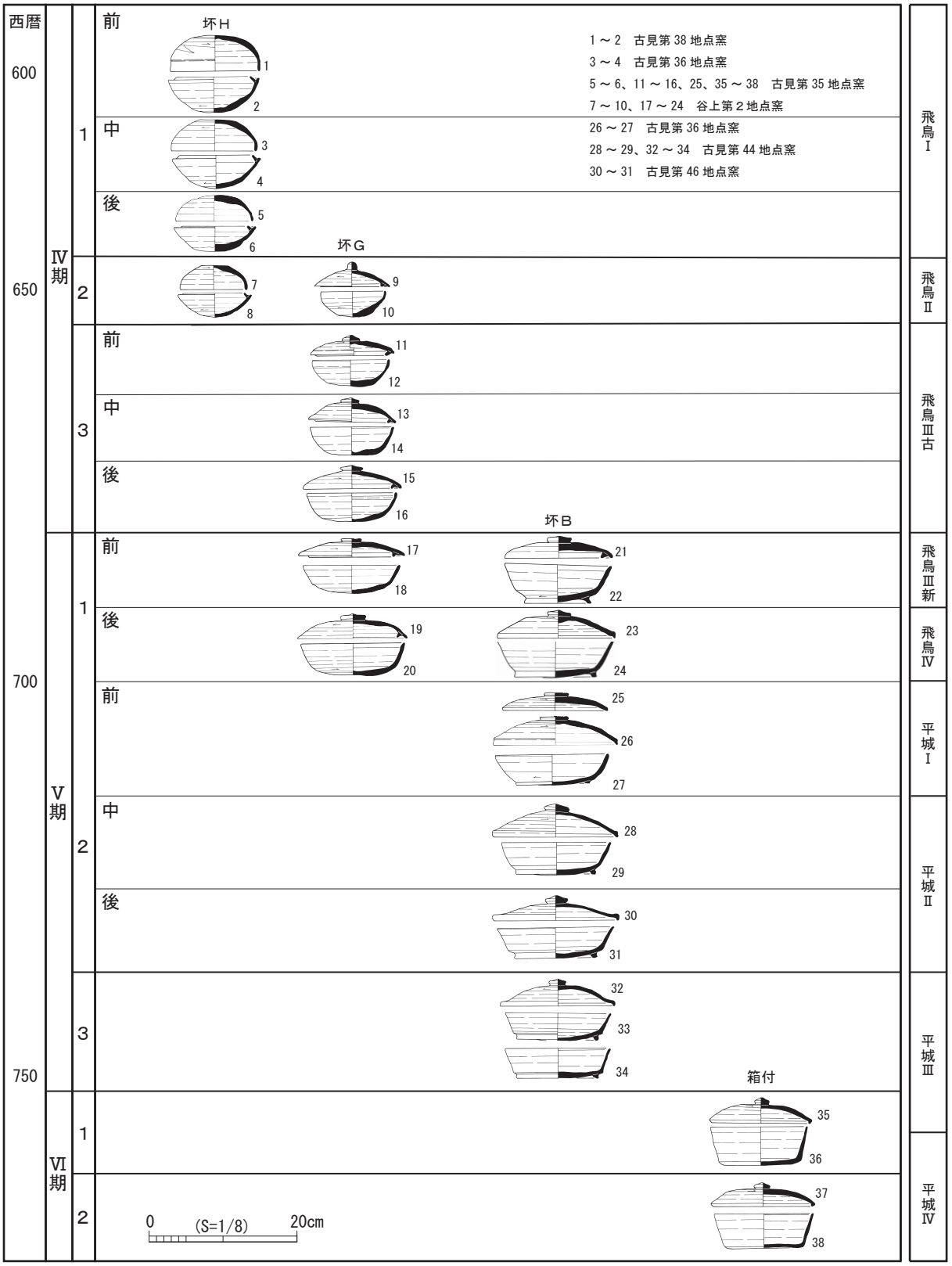


図７　古見古窯群及び谷上第２地点窯出土蓋付の変遷

※各期のすべての型式を網羅していない。また、平城・飛鳥編年との対比は後藤 2015a を参考とした。

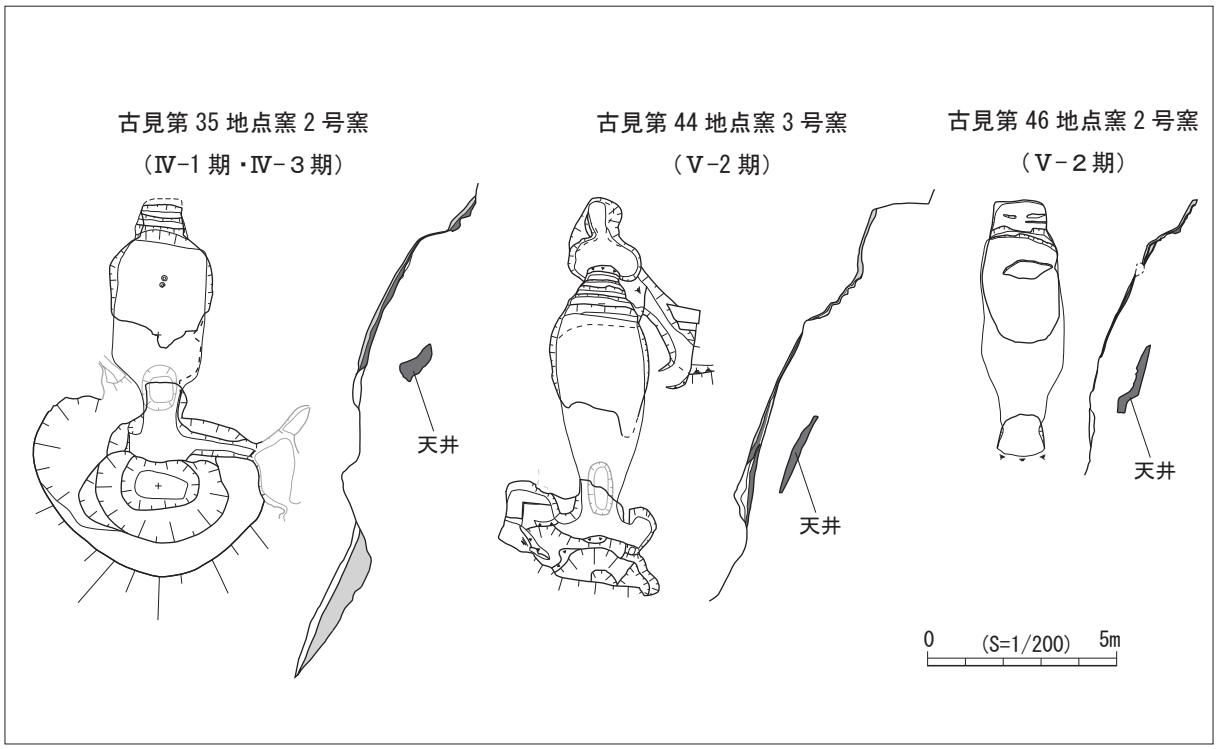


図８　古見古窯群天井残存窯の平断面図

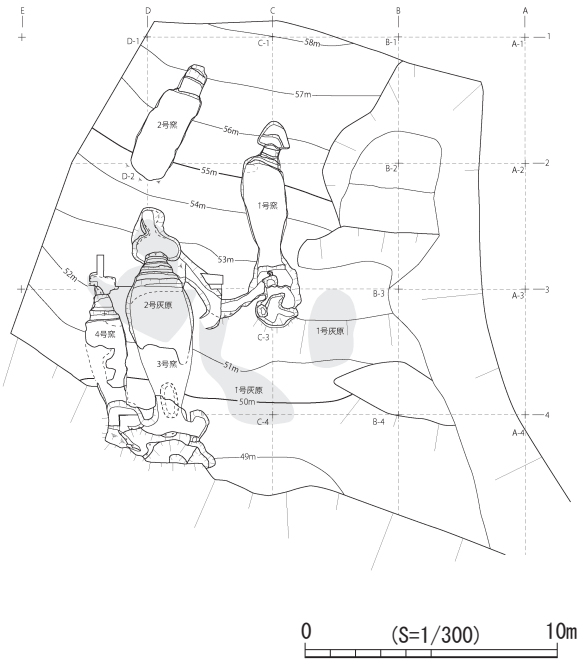


図９　古見第 44 地点窯全体図

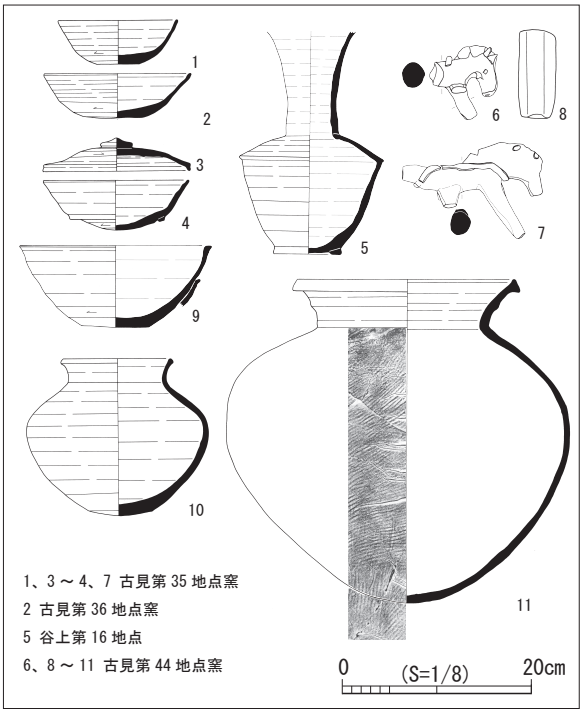


図 10　古見古窯群・谷上古窯群の調査で出土した
Ⅴ-２期に位置づけられる主な資料

東海西部の須恵器窯について―猿投窯を中心に―

大西 遼（愛知県陶磁美術館）

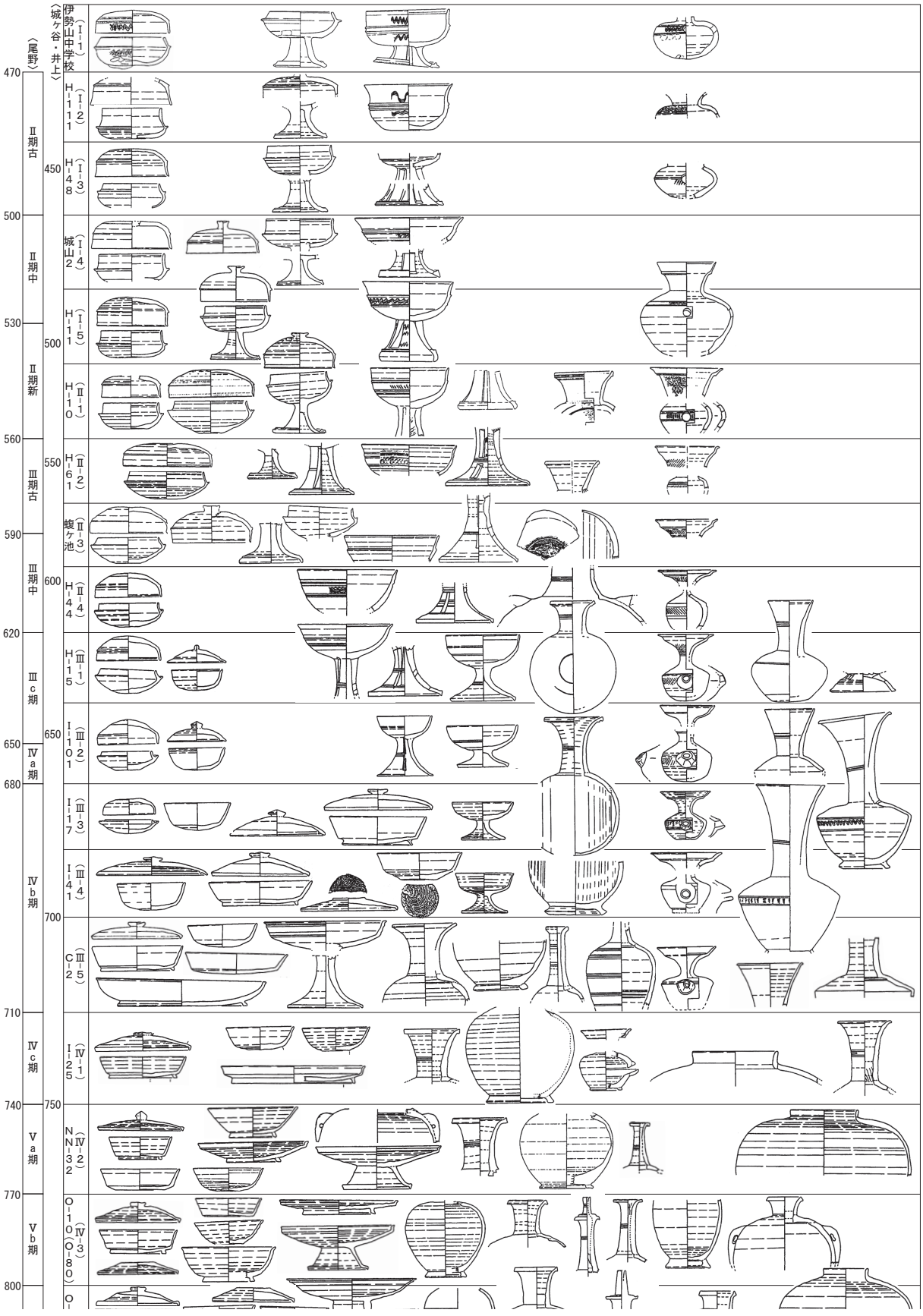


図１－１　猿投窯編年（城ヶ谷・井上編年と尾野編年の対照イメージ）※実測図は井上 2015・城ヶ谷 2015 を改変

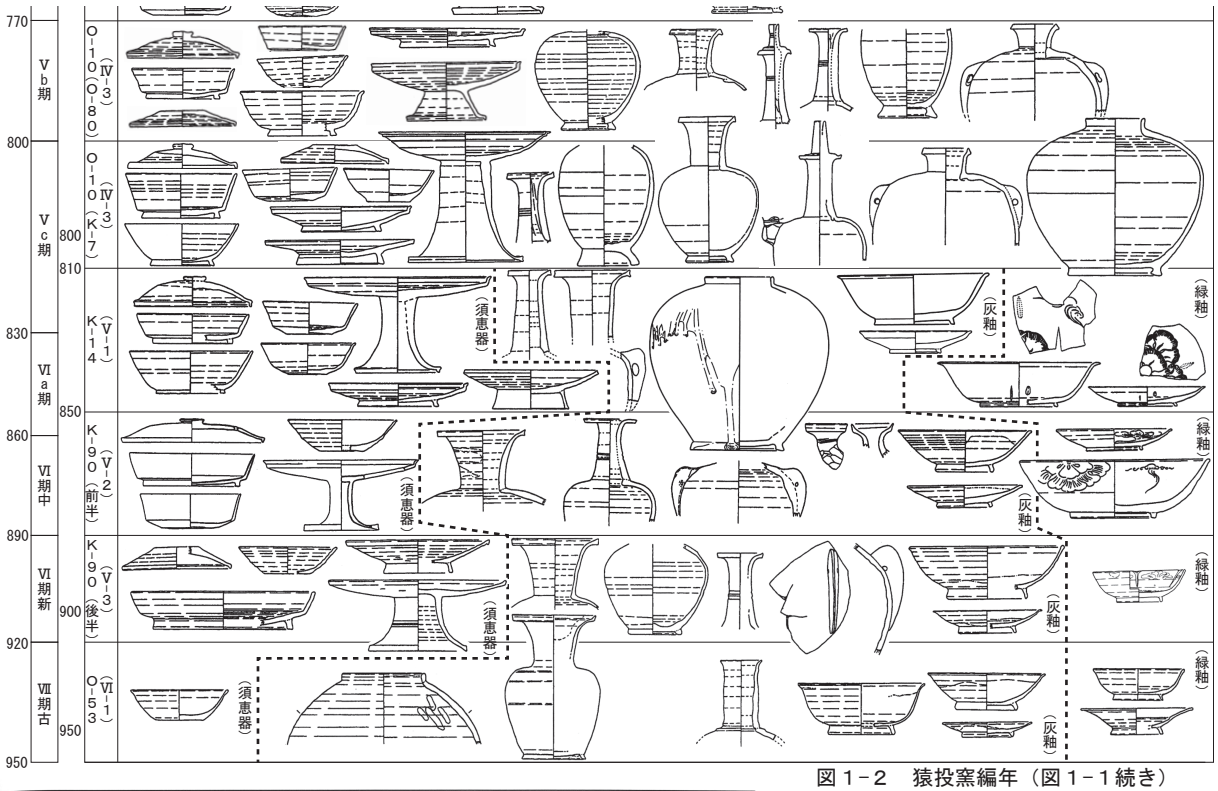


図１−２　猿投窯編年（図１−１続き）

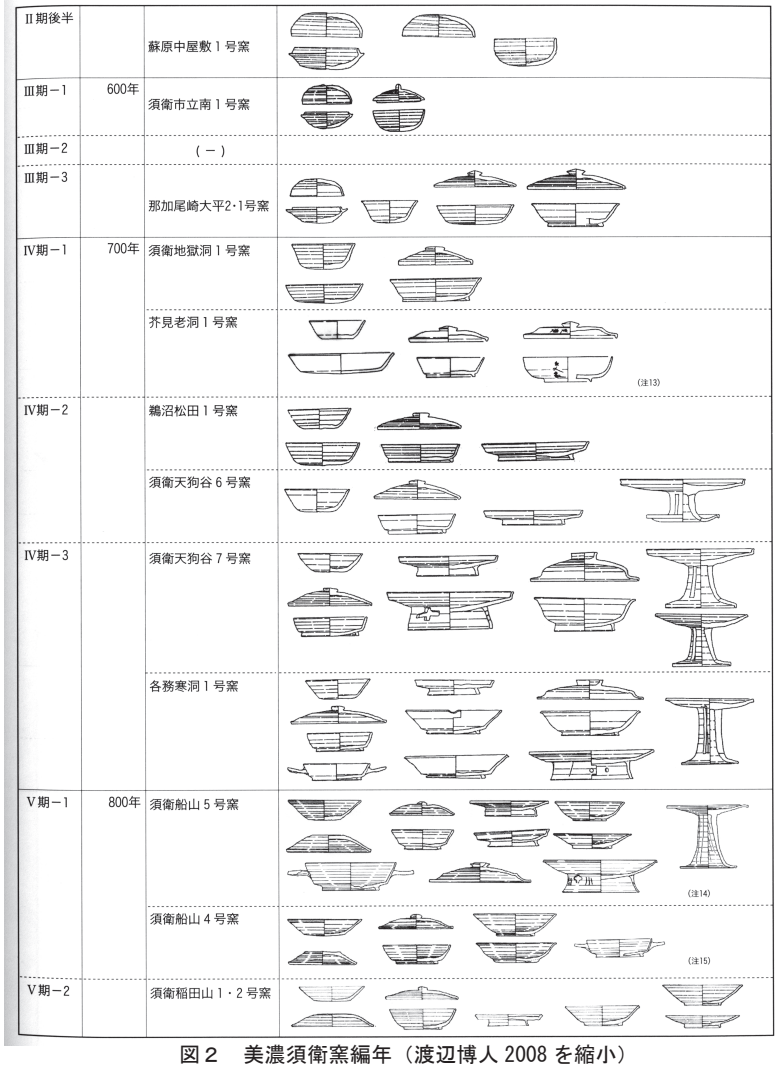


図２　美濃須衛窯編年（渡辺博人 2008 を縮小）

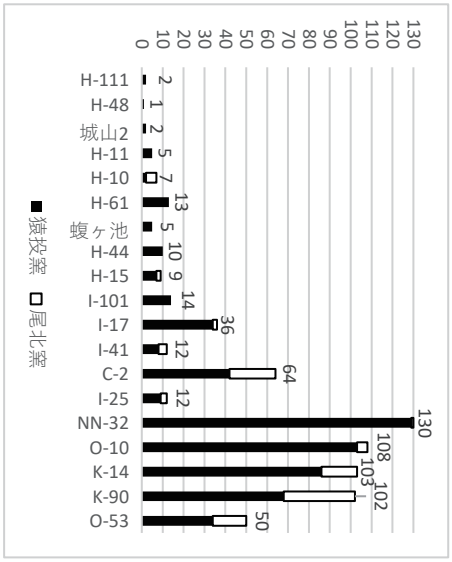


図３　猿投窯・尾北窯の窯跡数の推移
（愛知県史編さん委員会 2015 を参照、一部時期変更）

【主な参考文献】
・愛知県史編さん委員会 2015『愛知県史　別編　窯業１　古代　猿投系』愛知県
・井上喜久男 2015「第５節　編年論　瓷器」『愛知県史　別編　窯業１　古代　猿投系』愛知県
・尾野善裕 2000「猿投窯（系）須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』東海土器研究会
・尾野善裕 2008「古代の灰釉陶器生産と来姓古窯跡群」『来姓古窯跡群』豊田市教育委員会
・尾野善裕 2022「猿投窯系須恵器編年の再編と下り松瓦窯の操業年代」『伊保廃寺発掘調査報告書』名古屋大学考古学研究室・豊田市
・城ヶ谷和広 2015「第５節　編年論　須恵器」『愛知県史　別編　窯業１　古代　猿投系』愛知県
・渡辺博人 2008「美濃須衛窯について」『日本考古学協会 2008 年度愛知大会研究発表資料集』同実行委員会

猿投窯における須恵器貯蔵器種の地域色

–古墳・飛鳥時代の甕を中心に–

髙島　悠希
（公財）滋賀県文化財保護協会

１.はじめに

須恵器研究の対象となる器種は、杯身・杯蓋といった供膳具や小型の製品が主体で、壺や甕というような大型の製品は研究対象として扱われにくい。須恵器貯蔵器種の関心度が低い理由はいくつか考えられる。

まず、発掘調査で須恵器貯蔵器種が完形の状態で出土することは稀で、多くは胴部のみや口縁部のみといったように破片で出土することが多い。胴部破片のみでは、遺物そのものやそれに伴う遺構の時期特定も困難で、貯蔵器種で最も重要とされる容量についても検討を深めることができない。仮に運良く、完形ないしは口縁部の破片というような時期特定可能な個体が出土したとしても、そもそも須恵器貯蔵器種自体が、供膳具と比較しても時期差を示す属性の変化が乏しいとの指摘（小田 2019）や、甕の耐久性に伴い長期間に渡って使用される場合があることの指摘（津野 2017）などから、それ単体での考察は慎重にならざるを得ない。加えて、破片の接合・実測作業に時間のかかることや、保管するのに大きく場所をとり、収蔵庫の奥に追いやられて日の目を浴びず忘れ去られていくことも要因であろう。これらに相まって、須恵器貯蔵器種の資料的価値が過小評価される傾向も少なからず感じられる。

しかしながら近年、須恵器貯蔵器種をめぐる議論が再び活性化している。貯蔵器種が大きく取り扱われた事例としては、1990 年代後半から 2000 年代前半にかけての、北陸古代土器研究会による須恵器貯蔵具をめぐる議論があり、須恵器の甕・壺が研究の対象として大きく取り上げられた。その製作技術、器形や容量の変遷、消費地遺跡からの出土状況といった検討が深められている（北陸古代土器研究会 1999 など）。そして最近では、2018 年の独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所が開催した古代官衙・集落研究会の第 22 回研究集会「官衙・集落と大甕」において、官衙に集中的に出土する須恵器貯蔵器種を検討対象とし、甕の製作・流通・使用・廃棄の実態についての考察が深められている（奈良文化財研究所 2019）。ここでは、須恵器貯蔵器種は、「製作から使用・廃棄に至る痕跡をとどめており、出土状況を踏まえることで遺跡の性格づけにも関わる貴重な情報を内包した遺物（p. 7 奈良文化財研究所 2019 開催趣旨（原文ママ）」と述べられている。

貯蔵器種の検討は須恵器研究の中でも重要視されるべき項目の１つであり、古代土器研究の中で新たな側面を見せてくれる可能性がある。

２.猿投窯産須恵器甕に関する研究課題と筆者の研究視座

筆者は貯蔵器種が、産地同定や工人系譜の考察に適していると考えている。壺や甕の口

縁端部形状の検討はその１つで、機能として直接に関係のない口縁端部は、製作する担い手の個性（地域色）が形状として最も顕著に現れる。特に律令的土器様式成立以降、土器の器種や大きさに一定の基準が設けられる中で杯身や杯蓋というような小型の器は、実測図上はもちろんのこと、実際に観察しても豊富な知識がなければ産地同定は非常に難しいだろう。しかしながら壺や甕は、器が大きいことも相まって口縁端部形状の独自性が認知しやすく、各地域の須恵器窯によってその形状は様々である。となれば、生産窯やその周辺地以外の消費地遺跡ないしは古墳などで出土した貯蔵器種の産地同定は、製品の広域流通解明や古墳被葬者の性格を窺うことの一助となる。近年、都城の発掘調査では多種多様な口縁端部形状を有する多数の須恵器甕の出土が報告されており、それら製品がどの地域からそれぞれ持ち運ばれたのか気になるところである。しかしながら、冒頭で述べたような近年における須恵器貯蔵器種をめぐる議論は、徐々に活発化していているものの、各地域の須恵器窯研究の中での貯蔵器種については検討の余地が残るように感じる。猿投窯研究においても同様のことが言え、猿投窯はもとより全国的にみても各須恵器窯の貯蔵器種の編年案の作成は低調である。

従来の猿投窯研究の中では先学諸氏により猿投窯編年が示されているものの（楢崎・斎藤 1983、岩崎 1987、斎藤 1995、尾野 2000、城ヶ谷 2015 など）、貯蔵器種についての詳細な編年案は認められず、各時期の貯蔵器種が有する諸特徴についても詳しくは述べられていない現状がある。

そこで筆者は、貯蔵器種の中でも須恵器甕（1）に焦点を当て、1）容量の計測と規格性の検討（図 1）、2）生産窯遺跡出土品を対象とした口縁端部形状の変遷について（図 2・図 3）、3）それをもとに生産遺跡および消費地遺跡から出土した猿投窯（系）産である容量計測可能な個体および胴部のプロポーションを認知できる個体を抜粋・集成し、その変遷について（図 4）、4）これまで筆者が資料調査で培ってきた知識と上記の 1）および 2）を総合的にあわせることで猿投窯（系）の須恵器甕の地域色について明らかにすること、の 4 点について現在調査を進めているところである。

本稿では、頁数の制約から上記 3 点すべてを詳らかに述べることはできないため、3）の猿投窯（系）の須恵器甕の地域色について簡単に述べてみようと思う。

３.猿投窯（系）須恵器甕の地域色

現在、筆者が考えている製作技法に焦点を当てた猿投窯産貯蔵器の独自色（地域色）は、以下の 7 点である。

A）胴部内面に明瞭な同心円の痕跡が認められない。

B）胴部外面は平行叩きで統一される。

C）胴部外面の平行叩きの方向が統一されていく。（平行文が右肩上がり）。

D）頸部および胴部外面にカキ目を施さない。

E）胴部外面に沈線を施す場合がある。

F）頸部および胴部に「二子線」を用いる場合がある。

G）黄土を塗布する場合がある。

上述した内容について順次説明しよう。

A）胴部内面に明瞭な同心円の痕跡が認められない　貯蔵器種を製作する上で欠かせない道具の１つに叩き板と当て具を挙げられる。粘土紐の輪積みと半乾燥によって徐々に積み上げられる胴部の形を整えるために、そして胎土中の空気を抜くために、当道具（叩き板を外面で、当て具を内面で）を器壁に挟み込むように使用する。叩き板と当て具にはそれぞれ文様が刻まれているため、その文様が土器の内外面にそれぞれスタンプされる。

須恵器生産が始まった初源期における胴部製作時の内面の特徴を述べると、陶邑窯をはじめ各地で操業した初期の須恵器窯では、明瞭な同心円の痕跡は認められない。この点は猿投窯も同様である。5 世紀末～6 世紀初頭以降、陶邑窯や新たに各地で操業を開始した須恵器窯では、貯蔵器の胴部内面に明瞭な同心円の痕跡が認められるようになる。これは当該期から、胴部内面に使用する「木製当て具」の表面において意図的に同心円を刻むことが要因で、その工具を使用した際には、胴部内面に明瞭な同心円が痕跡として残る。

一方で猿投窯における須恵器貯蔵器の製作では、5 世紀末～6 世紀初頭以降においても明瞭な同心円の痕跡は認められず、内面には指ナデや板ナデが認められる。ここでいう「明瞭」というワードが留意すべき点で、猿投窯においても微弱な同心円の痕跡は認められる製品がある。しかしながら、この微弱な同心円の痕跡は平滑な「木製当て具」の使用多寡におけるものである。経年劣化に伴って木の年輪が表出した工具を使用したことによる痕跡が残ったものであり、光などを当て熟察しなければ確認できないほどである。したがって、先述した表面に意図的に同心円を刻んだ「当て具」の使用とは意を異にする。

なお、猿投窯において上述した同心円の痕跡が認められないのは 7 世紀中葉までで、この時期以降の尾張地域の窯では、従来通りの同心円の痕跡が認められない貯蔵器と新たに明瞭な同心円の痕跡を残す貯蔵器とが共存するようになる。これは尾張地域の須恵器窯に外部からの工人が流入してきたものと筆者は考えている。

B）胴部外面は平行叩きで統一される　C）胴部外面の平行叩きの方向が統一されていく

外面においても猿投窯の特徴が注目される。まず、胴部外面は平行叩きで統一される。しかしながら 7 世紀中葉以降は、格子叩きや擬格子叩きが認められるようになる。先述と同様に、尾張地域の須恵器窯に、外部からの工人が流入してきたものと筆者は考えている。合わせて、平行叩きの方向が 6 世紀以降に漸次統一され、正面から見た際に平行文が右肩上がりとなる（底部は異なる）。

D）頸部および胴部外面にカキ目を施さない　E）胴部外面に沈線を施す場合がある

胴部外面および頸部外面にカキ目を施さない点も、当地域の須恵器貯蔵器種の特徴といえよう。陶邑窯をはじめとした須恵器窯では、胴部や頸部外面の制作時にカキ目を施す個体が一定数ある。一方で猿投窯ではこの技法は認められず、仮に横方向のラインを施す場合には、カキ目に代わって胴部外面に沈線を巡らす。この沈線は時期によってその施す箇

所が異なり、5 世紀には小型や中型の貯蔵器に限って胴部全体に一定の間隔をあけながら施され、6 世紀以降は肩部から中央部ないしは肩部のみに施される。大型の甕には認められない。7 世紀以降は沈線の幅が狭く細くなり、小型や中型に加え大型の甕にも沈線を巡らせるようになる。その箇所は肩部や底部に比較的近い胴部、胴部中央部など様々であるが、そのほとんどが 2 条以内である。沈線を施す技法自体は、韓半島南部由来の技法で、初期に製作された須恵器貯蔵器に認められる技法ではあるが、それ以降の全国各地の須恵器窯では、こうした沈線を巡らせる製品は生産していないようである (2)。

もちろん、貯蔵器種全てに必ず沈線やカキ目を施すとは限らないことから、沈線やカキ目を施す個体とそうでない個体とは併存（両方とも生産）していたこととなる。例えば、発掘調査で出土した須恵器甕を観察した際に、カキ目技法が認められないからといって、直ちに「陶邑窯産ではなく猿投窯産である」とは断定できない。それは上述したように、陶邑窯や猿投窯、その他の須恵器窯においてカキ目技法を施さない個体も製作しているためである。しかしながら、ことに 5 世紀後葉から 6 世紀以降の個体で沈線を巡らせる須恵器甕であれば、猿投窯産の可能性が高い。逆にいえば、カキ目技法を施す個体であれば、猿投窯産の可能性は非常に低いということになる。

注意が必要なのは、猿投窯では 6 世紀代を中心として底部のみにカキ目を施す個体が多くなることである。猿投窯内で 6 世紀とそれ以外の時期を判別する 1 つの材料になる。

F）頸部および胴部に「二子線」を用いる場合がある　二子線（二子平行線文）は、2 本 1 単位の平行した細い線が沈線化したもので、伊藤禎樹によって尾張地域特有の技法として紹介された（伊藤 2004）。瓶や壺・甕の胴部および頸部、器台などといった器種の表面に認められる。おそらく、ブレのない波状文を施すための補助線として、波状文自体の縦幅やその範囲を決定するための補助線として巡らせるものであろう。主に 5 世紀～6 世紀代に製作された須恵器に認められる。7 世紀以降は現在のところ確認できない。

G）黄土を塗布する場合がある　黄土は、酸化第二鉄（Fe_2O_3）を多く含むもので、猿投窯の須恵器の器面に人為的に塗布される場合がある。近年、その主成分について詳細に検討されており（尾野・降幡 2023）、黄土を釉薬とはみなさず、化粧土の範疇で評価を下している。筆者は、猿投窯における黄土を塗布された須恵器の出現は 7 世紀前葉（東山 15 窯式期）と考えており、あわせて他地域の須恵器窯では看取できない尾張地域特有のものと考えている。黄土の塗布が認められる器種は主に貯蔵器種で、7 世紀後葉以降に塗布される率が上がる傾向にあり、塗布される箇所は様々である。焼成温度が低いと赤褐色を呈し、焼成温度が高いと艶のない黒褐色を呈する。黄土を塗る背景については今のところは断定できないものの、須恵器甕を観察してみると胴部外面や頸部内外面といった外から目視できる箇所に塗布されている場合が多い（内面に塗布するものも認められる）。当該期の猿投窯の製品は全体的に白色・肌色に近い色で焼き上がることから、例えば、全国的に須恵器＝灰色というイメージが広く共有されていた場合、そのイメージに近づける工夫として黄土を塗布したかもしれない。

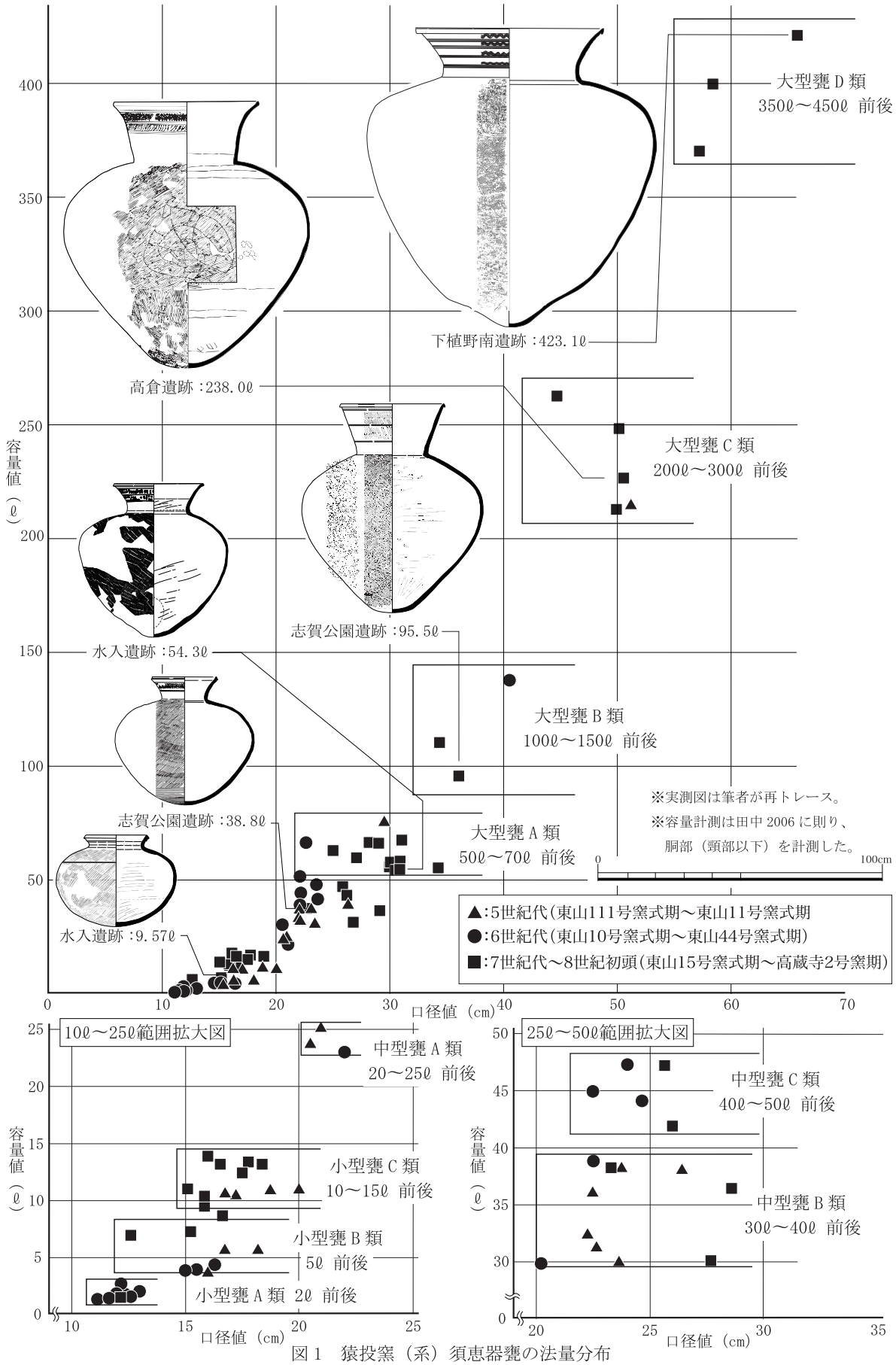
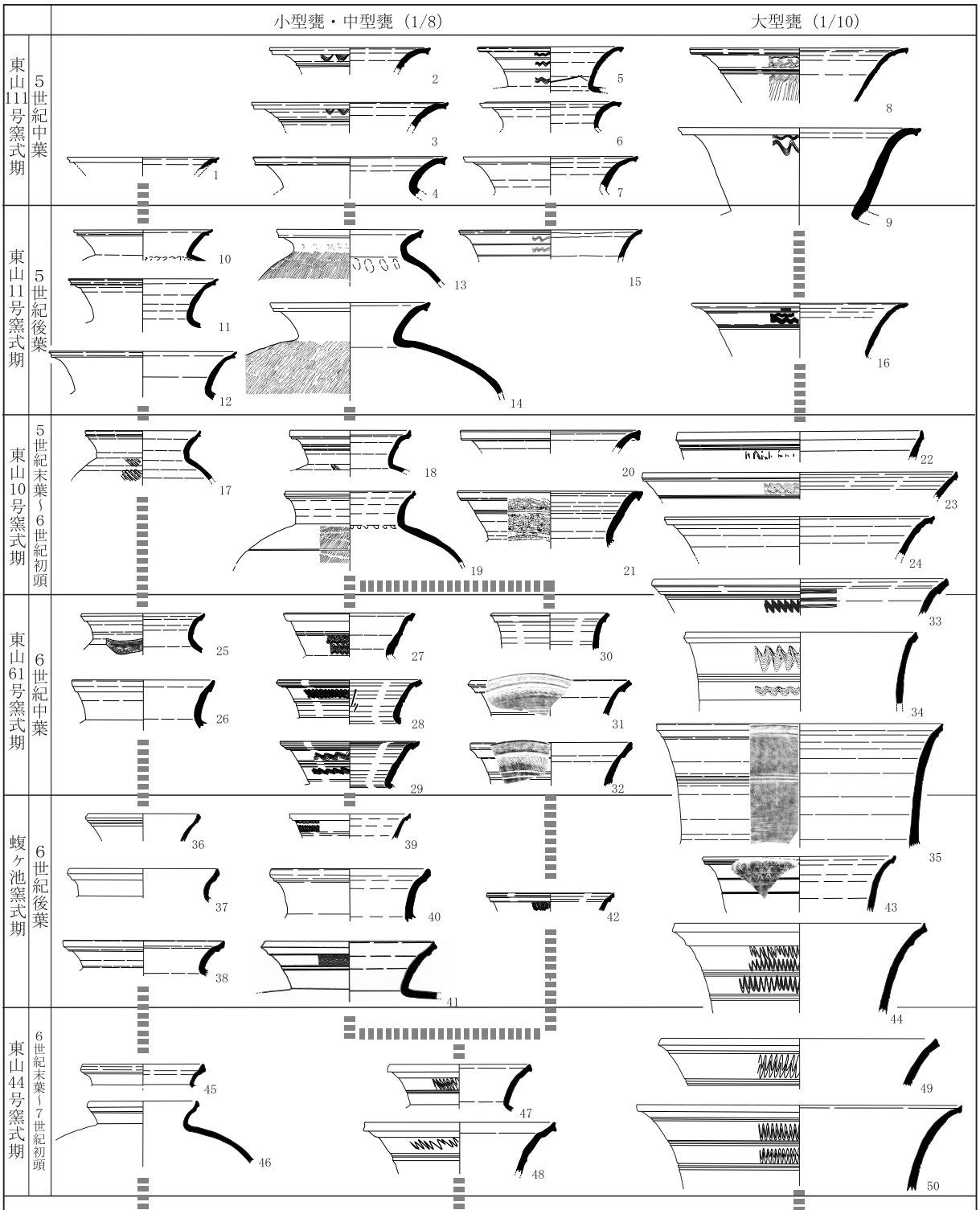


図 1　猿投窯（系）須恵器甕の法量分布



東山 111 号窯式期　1・2・3・6・7・9：東山 111 号窯（斎藤 1983）4：城山 2 号窯（七原惠史ほか 1978）5 城山 2 号窯（大西 2017b）

東山 11 号窯式期　10：東山 111 号窯（城ヶ谷 2015）11・12：城山 2 号窯（七原ほか 1978）13・14：東山 11 号窯（小林 1987）15 城山 2 号窯（大西 2017b）16：東山 11 号窯　筆者実測（荒木集成館蔵）

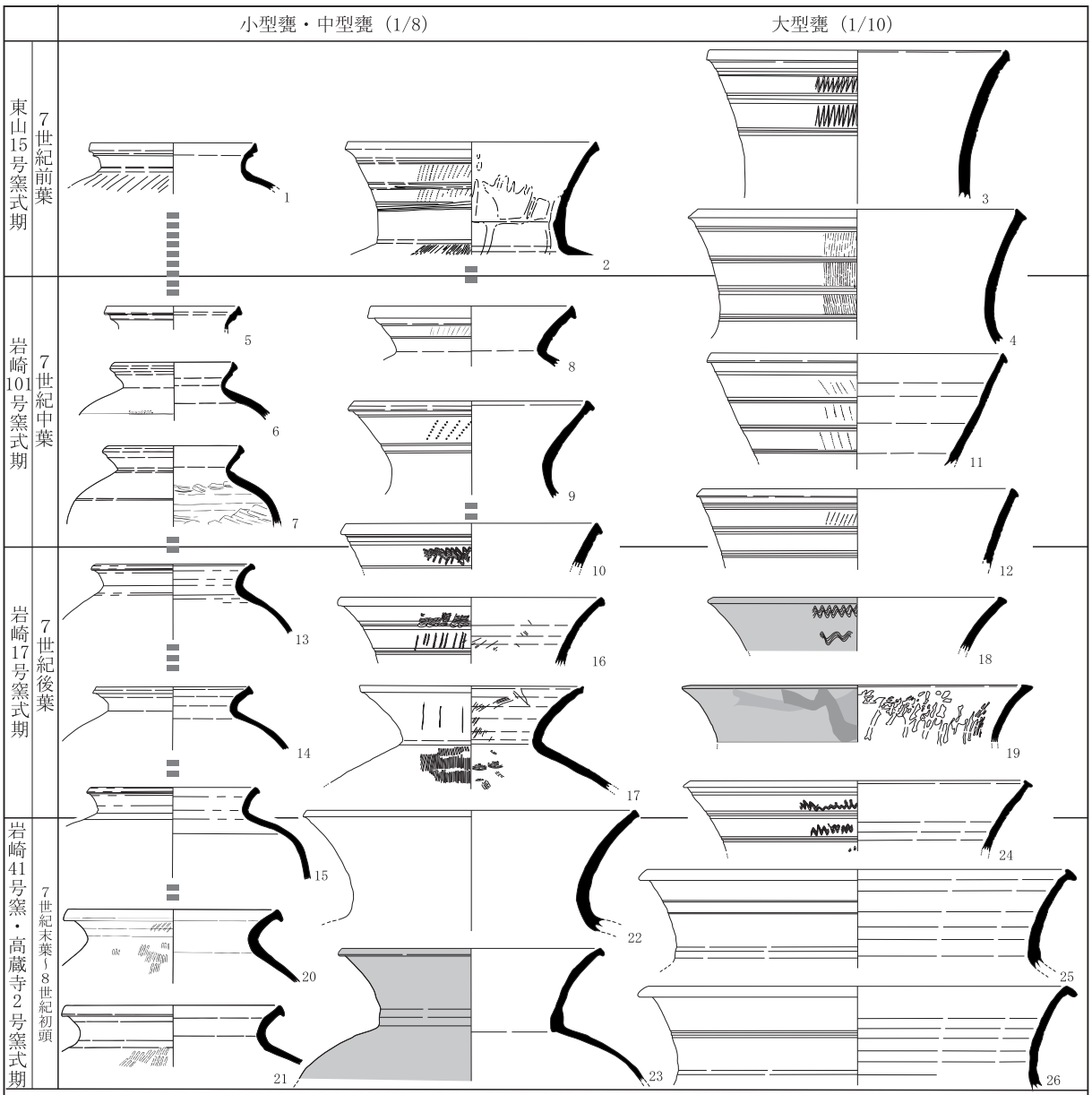
東山 10 号窯式期　17・18・20・22・24：下原古窯（浅田 2006）19・23 東山 11 号窯（城ヶ谷 2015）21：東山 61 号窯下部灰層（尾野・梶原 2010）

東山 61 号窯式期　25・27：下原古窯（浅田 2006）26・31・35：東山 61 号窯（尾野・梶原 2010）28・29・30：卓ヶ洞 3 号窯（岡本 2016）33：東山 10 号窯（城ヶ谷 2015）34：東山 61 号窯（斎藤 1986）

蝮ヶ池窯式期　36・37：東山 38 号窯（森 1978）38：東山 61 号窯（尾野・梶原 2010）39・43：蝮ヶ池窯（伊藤・岩本 2004）40：東山 10 号窯（荒木 1974）41：東山 44 号窯（小島 1979）42：卓ヶ洞 4 号窯（岡田 2016）44：東山 6 号窯　筆者実測（愛知県陶磁美術館蔵）

東山 44 号窯式期　45・46・47・49・50：東山 44 号窯（小島 1979）48：東山 6 号窯　筆者実測（愛知県陶磁美術館蔵）

図 2　猿投窯産須恵器甕における口縁端部形状の変化（東山 111 号窯式期～東山 44 号窯式期）

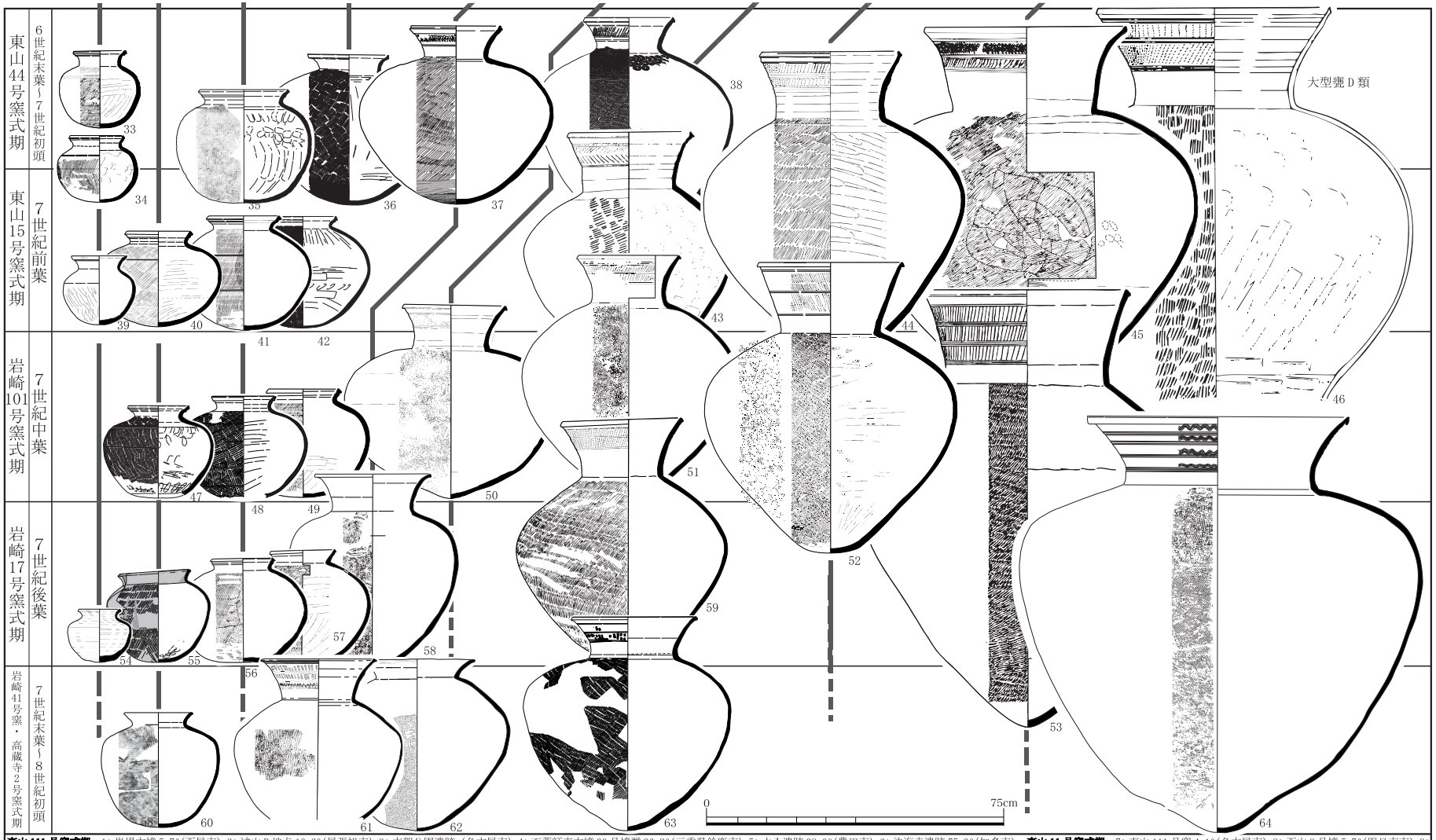


東山 15 号窯式期　1：東山 15 号窯（城ヶ谷 2015）2：東山 115 号窯（纐纈 2007）3：東山 78 号窯（城ヶ谷 2015）4：東山 24 号窯（城ヶ谷 2015）
岩崎 101 号窯式期　5：東山 50 号窯 6・7：東山 115 号窯（纐纈 2007）8・9・12：東山 50 号窯（城ヶ谷 2015）10：岩崎 17 号窯　筆者実測（愛知県陶磁美術館蔵）11：岩崎 101 号窯（城ヶ谷 2015）
岩崎 17 号窯式期　13・15：丁子田 1 号窯（穐田 2007）14：岩崎 17 号窯（城ヶ谷 2003）16・17・18・19：岩崎 17 号窯　筆者実測（愛知県陶磁美術館蔵）
岩崎 41 号窯・高蔵寺 2 号窯式期　20・21：鳴海 228 号窯（尾野 1993）22・23：岩崎 41 号窯　筆者実測（愛知県陶磁美術館蔵）24：岩崎 17 号窯　筆者実測（愛知県陶磁美術館蔵）25・26 高蔵寺 2 号窯　筆者実測（愛知県陶磁美術館蔵）

※実測図については筆者が再トレース。

図 3　猿投窯産須恵器甕における口縁端部形状の変化（東山 15 号窯式期～岩崎 41 号窯・高蔵寺 2 号窯式期）

小型甕A類 20前後
小型甕B類 50前後
小型甕C類 10～150前後
中型甕A類 20～250前後
中型甕B類 30～400前後
中型甕C類 40～500前後
大型甕A類 50～700前後
大型甕B類 100～1500前後
大型甕C類 200～3000前後
大型甕D類 350～4500前後
容量計測箇所
※実測図は筆者が再トレース。
※容量計測は田中2006に則り、左図斜線部を計測した。
東山111号窯式期 5世紀中葉
東山11号窯式期 5世紀後葉
東山10号窯式期 5世紀末葉～6世紀初頭
東山61号窯式期 6世紀中葉
蛸ヶ池窯式期 6世紀後葉
小型甕B類
小型甕C類
中型甕B類
大型甕C類
小型甕B類
中型甕A類
大型甕B類
小型甕A類
中型甕C類



東山 111 号窯式期　1：岩場古墳 5.7ℓ(西尾市) 2：城山 B 地点 10.6ℓ(尾張旭市) 3：志賀公園遺跡（名古屋市) 4：石薬師東古墳 30 号墳群 36.2ℓ(三重県鈴鹿市) 5：水入遺跡 38.0ℓ(豊田市) 6：法海寺遺跡 75.3ℓ(知多市)　**東山 11 号窯式期**　7：東山 111 号窯 4.1ℓ(名古屋市) 8：西山 8 号墳 5.7ℓ(四日市市) 9：阿曽田遺跡 10.9ℓ(岐阜県中津川市) 10：替田遺跡 30.0ℓ(三重県津市) 11：長坂丘頂 32.4ℓ(尾張旭市) 12：水入遺跡（豊田市) 13：池下古墳 218.1ℓ(名古屋市)　**東山 10 号窯式期**　14：福戸ヶ根遺跡 3.6ℓ(岐阜県土岐市) 15：東古渡遺跡 5.1ℓ(名古屋市) 16：羽根古墳（名古屋市) 17：駒前第 1 号墳（瀬戸市) 18：塔の越遺跡 23.8ℓ(稲沢市) 19：岩倉城遺跡 25.1ℓ(岩倉市)　**東山 61 号窯式期**　20：船木山古墳群 0271 1.3ℓ(岐阜県本巣市) 21：高蔵遺跡 1.8ℓ(名古屋市) 22：神崎山古墳 3.8ℓ(岐阜県可児市) 23：穴田古墳群 11 号墳 4.1ℓ(瀬戸市) 24：船木山古墳群 019 22.9ℓ(岐阜県本巣市) 25・26：梅替古墳（岐阜県加茂郡）　**蟹ヶ池窯式期**　27：東谷 1 号墳 1.8ℓ(名古屋市) 28：東谷 12 号墳 2.7ℓ(名古屋市) 29：高蔵遺跡 38.5ℓ(名古屋市) 30：西浦遺跡 44.0ℓ(長野県飯田市) 31：川田遺跡 66.3ℓ(海部郡) 32：宮ノ前第 5 遺跡 137.4ℓ(山梨県笛崎市)　**東山 44 号窯式期**　33：志賀公園遺跡 2.6ℓ(名古屋市) 34：大毛池田遺跡(2.4ℓ) 35：梅替古墳 15.2ℓ(岐阜県加茂郡) 36：志賀公園遺跡 29.6（名古屋市) 37：志賀公園遺跡 38.8ℓ(名古屋市) 38：志賀公園遺跡 50.3ℓ(名古屋市)　**東山 15 号窯式期**　39：東山 15 号窯 1.9ℓ(名古屋市) 40：水入遺跡 9.5ℓ(豊田市) 41：志賀公園遺跡 13.4ℓ(名古屋市) 42：志賀公園遺跡 13.3ℓ(名古屋市) 43：半田山古墳群 C39 号墳 54.1ℓ(静岡県浜松市) 44 地蔵ヶ谷横穴群 110.5ℓ(静岡県袋井市) 45：高蔵遺跡 238.0ℓ(名古屋市) 46：半田山古墳群 C39 号墳（398.5ℓ超）　**岩崎 101 号窯式期**　47：志賀公園遺跡 7.2ℓ(名古屋市) 48：水入遺跡 10.46ℓ(豊田市) 49：志賀公園遺跡 12.4ℓ(名古屋市) 50：鵜沼西町古墳 47.1ℓ(岐阜県各務原市) 51：与島古墳群 62.56ℓ(岐阜県高山市) 52：志賀公園遺跡 95.5ℓ(名古屋市) 53：高針原 1 号窯 246.0ℓ(名古屋市)　**岩崎 17 号窯式期**　54：丁字田 1 号窯 1.2ℓ(長久手市) 55：水入遺跡 6.5ℓ(豊田市) 56 志賀公園遺跡 11.2ℓ(名古屋市) 57：志賀公園遺跡 13.8ℓ(名古屋市) 58：駒場遺跡 32.4ℓ(豊川市) 59：志賀公園遺跡 55.5ℓ(名古屋市)　**岩崎 41 号窯式期・高蔵寺 2 号窯式期**　60：下田南遺跡 7.0ℓ(岩倉市) 61：丁字田 1 号窯（長久手市) 62：水入遺跡 36.3ℓ(豊田市) 63 水入遺跡 54.3ℓ(豊田市) 64 下槙野南遺跡 423.1ℓ(京都府乙訓郡)　※愛知県所在の遺跡は愛知県を省略。

図 4　猿投窯（系）須恵器甕の編年

おわりに

以上簡単ではあるが猿投窯における須恵器甕の特徴について述べてみた。上述した複数の要素に加えて、口縁部形状や胴部のプロポーション、施文の種類などを加味した複眼的な視野による産地同定が必要である。今後の筆者の課題としては、製作技法の検討、流通分布の検討、生産割合の検討など様々である。特に 7 世紀以降、畿内をはじめとして西日本全域で段階的に甕の生産割合が減少するという指摘がある中で（望月 2017)、猿投窯では甕をはじめとした貯蔵器種の生産を急激に増加させる。こうしたことを踏まえて、須恵器生産体系における猿投窯の位置付けや役割について、今後検討を深めていきたい。

（註）

(1) 本稿では口径値 10cm 以上、容量 10以上、口縁部が外反する形状のものを甕と定義している。

(2) 全国各地の須恵器甕、ことに胴部は検討が進んでいないため、筆者が認識していない場合がある。

謝辞

本稿をなすにあたっては以下の諸氏・機関から御協力を賜りました。末筆ながら記して感謝の意を表します（五十音順、敬称略)。

愛知県陶磁美術館　浅田博造　荒木集成館　大西遼　春日井市教育委員会

参考文献

愛知県史編さん委員会（2015)『愛知県史別編 窯業 1　古代　猿投系』愛知県

青木修（1998)『駒前第 1 号墳』(財）瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告書　第 19 集

穐田和樹ほか（2007)『丁字田窯跡・市ヶ洞 1 号窯跡－長湫南部土地区画整理に係る発掘調査報告－』瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告　第 36 集　長久手市教育委員会・財団法人　瀬戸市文化振興財団

浅田博造（2006)『下原古窯跡群－下原古窯跡群第 2 次・第 3 次発掘調査報告書－』春日井市遺跡発掘調査報告第 12 集　春日井市教育委員会

荒木実『東山古窯跡群』中日出版本社

池本正明ほか（1999)『細口下 1 号窯・鴻ノ巣古窯・高針原 1 号窯』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 81

石黒立人ほか（2004)『志賀公園遺跡Ⅱ』愛知県倍増文化財センター調査報告書　第 121 集

伊藤禎樹（2004)「尾張型須恵器の出現」『韓式系土器研究会Ⅷ』韓式系土器研究会

伊藤禎樹・岩本佳子（2004)「名古屋市蝮ヶ池窯について」『三河考古』第 17 号　三河考古刊行会

岩崎直也（1987)「尾張型須恵器の提唱」『信濃』第 39 巻　第 4 号　信濃史学会

上嶋善治・伊藤秀雄ほか（1997)『与島古墳群』岐阜県文化財保護センター調査報告書 33

上村安生ほか（2008)『替田遺跡(第 1・2 次)発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告 115-15

小田裕樹（2019)「宮都における大甕」『第 22 回古代官衙・集落研究会報告書 官衙・集落と大甕』奈良文化財研究所

大西遼（2017a）「窯跡資料から見た東山窯開窯期の再検討」『考古学フォーラム』23　考古学フォーラム
大西遼（2017b）「続・尾張旭市城山古窯跡群出土須恵器の系譜をめぐって」『貝塚』72 物質文化研究会
大本直人ほか（2015）『梅替古墳』岐阜県文化財保護センター調査報告書 135
岡本直久ほか（2016）『卓ヶ洞 2 号・3 号・4 号窯跡発掘調査報告書』瀬戸市文化振興財団調査報告 59 尾張旭市教育委員会
尾野善裕（1993）『NN228 号窯・NN 289 号窯発掘調査報告書』名古屋市教育委員会
尾野善裕（2000）「猿投窯（系）須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』第 1 分冊　発表要旨　猿投窯・湖西窯編年の再構築　東海土器研究会
尾野善裕・梶原義実（2010）『東山 61 号窯発掘調査報告書』名古屋大学大学院文学研究科考古学研究室
尾野善裕・降幡順子（2023）「［研究ノート］西石根第 7 号窯出土の推定「黄土」調剤容器について」『刈谷市歴史博物館　研究紀要第 4 号　令和 5 年度』刈谷市歴史博物館
恩田知美ほか（2017）『本巣市船来山古墳総括報告書　資料編』本巣市文化財調査報告書　第 4 集　本巣市教育員会
春日宇光（2021）『西浦遺跡』飯田市教育委員会
加藤大蔵ほか（1991）『穴田 11 号墳・種成第 4 号窯跡』瀬戸市教育委員会
加藤裕之・鈴木 敏則（1987）『浜松市半田山遺跡 5 発掘調査報告書』浜松市教育委員会
木川正夫（2002）『川田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 103
岐阜県土岐市教育委員会・（財）土岐市埋蔵文化財センター（2003）『土岐市遺跡詳細分布調査報告書』
木村有作（1989）『東古渡町遺跡第 1 次発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会
中川和哉・野島永（1999）『下植野南遺跡』京都府遺跡調査報告書 25　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
纐纈茂（2007）『H－115 号窯発掘調査報告書』名古屋市教育委員会
小島一夫（1979）『光真寺古窯発掘調査報告書』名古屋市教育委員会
小林久彦（1987）「1.水神古窯における須恵器生産の系譜」『水神古窯』豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告書第 7 集　豊橋市教育委員会
斎藤孝正（1983）「猿投窯成立期の様相」『名古屋大学文学部研究論集 LXXXIV』（史学 29）名古屋大学文学部
斎藤孝正（1988）「Ⅰ東海西部（愛知・岐阜）」『須恵器集成図録』第 3 巻　東日本編Ⅰ　雄山閣
坂井尚美（2003）『鵜沼西町古墳発掘調査報告書』各務原市文化財調査報告書 36　各務原市教育委員会
城ヶ谷和広（2003）「猿投窯岩崎 17 号窯出土須恵器の検討」『愛知県史研究』第 7 号　愛知県
城ヶ谷和広（2015）『愛知県史別編 窯業 1　古代　猿投系』愛知県
鈴木敏則（1994）「岩場古墳の鉄製品」『ホリデー考古』第 10 号　ホリデー考古刊行会
武部真木ほか（1997）『大毛池田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 72
田中耕作（2006）「簡易な土器容量測定方法の紹介」『新潟考古学座談会会報』第 31　新潟考古学座談会
津野仁（2017）「古代須恵器大甕の耐久-栃木県域の事例から–」『研究紀要』公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター

東海考古学研究会『須恵器生産の出現から消滅』第 3 分冊　消費地編Ⅰ（古墳時代）　猿投窯・湖西窯編年の再構築

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所（2019）『第 22 回古代官衙・集落研究会報告書 官衙・集落と大甕』奈良文化財研究所研究報告

永井宏幸ほか（2001）『志賀公園遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第 90 集

永井宏幸ほか（2005）『水入遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第 108 集

中久保辰夫（2019）「近畿地方における須恵器の受容と普及－古墳時代の饗宴と土器生産－」『考古学研究会第 2 回合同例会『須恵器受容・普及の実態』発表資料』考古学研究会

中里信之（2014）「名古屋台地とその周辺における初期須恵器の再検討」『韓式系土器研究』ⅩⅢ　韓式系土器研究会

中津川市教育委員会（1985）『阿曽田遺跡発掘調査報告書』

中島勝国ほか（1976）『可児町神崎山古墳発掘調査報告書』岐阜県可児町教育委員会

七原恵史ほか（1978）『尾張旭の古窯』尾張旭市教育委員会

七原恵史ほか（1983）『長坂古墳群－第 5 号墳・6 号墳の調査－』尾張旭市教育委員会

楢崎彰一・斎藤孝正（1983）「猿投窯編年の再検討について」『愛知県陶磁美術館研究紀要』 2

韮崎市教育委員会（1997）『宮ノ前第 5 遺跡』

服部芳人ほか（2000）『石薬師東古墳群・石薬師東遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告 200-2　三重県埋蔵文化財センター

服部芳人ほか（2020）『北山Ｃ遺跡（第 2～7 次）・西山古墳群発掘調査報告　－桑名市大字志知・四日市市西大鐘町－』三重県埋蔵文化財センター

林弘之ほか（1996）『駒場遺跡』豊川市教育委員会

樋上昇ほか（1991）『池下古墳』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第 24 集

日野幸治（1988）『塔の越遺跡発掘調査報告書－大型マンション建設に伴う緊急調査報告書－（Ⅱ)』塔の越遺跡発掘調査団　アクト

袋井市教育委員会（2004）『袋井市考古資料集 4：地蔵ヶ谷古墳群・横穴群 1・2』

北陸古代土器研究会（1999）『須恵器貯蔵器を考えるⅠ つぼとかめ』

松原隆治（1992）『岩倉城遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 38

望月精司（2017）「壺・甕－貯蔵具－」『モノと技術の古代史　陶芸編　小林正史（編)』吉川弘文館

基峰修（2023）『下田南遺跡発掘調査報告書 －川井野寄地区工業用地開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査－』実測図版編（1）岩倉市教育委員会・株式会社アーキジオ

森威史（2001）『高蔵遺跡』静岡人類史研究所

森茂雄（1978）「城山八幡宮（H -228 号）窯」『古代人』第 34 号　名古屋考古学

森泰通（2009）ほか『上向イ田窯』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第 38 集　豊田市教育委員会

守山市教育委員会 1963『守山の古墳』

渡邊誠ほか 1993『法海寺遺跡Ⅱ』知多市文化財資料　第 31 集　知多市教育委員会

陶邑窯跡群について―古墳時代を中心に―

岩越陽平（奈良県立橿原考古学研究所）

はじめに　陶邑窯跡群は、大阪府南部の堺市を中心に和泉市、大阪狭山市の３市にまたがる広大な地域に分布する国内最大の須恵器生産地である（図１～３）。東西約 15 キロメートル、南北約９キロメートルの範囲に確認されている窯跡の総数は 854 基（大阪府立近つ飛鳥博物館 2006）であり、古墳時代中期から平安時代初期（４世紀末～９世紀）までの約 500 年間にわたり継続的な生産が行われていた。陶邑窯跡群の開始は、百舌鳥・古市古墳群の築造された時代と重なる。韓国の陶質土器の生産技術という先進的な技術を取り入れ、王権の膝下に配置された須恵器生産地とみることができる。

陶邑窯跡群は和泉山脈から派生した泉北丘陵・信太山丘陵に位置する。河川の開析作用により形成された谷地形を境に、地形的に細分することができ、東から順に、陶器山地区（MT）・高蔵寺地区(TK)・富蔵地区（TM）・栂地区(TG)・大野池地区(ON)・光明池地区(KM)・谷山池地区(TN)と把握される（図１・２）。さらに、陶器山地区の東側に狭山池地区(SY)を加える理解もある。また、生産・流通に関わる集落遺跡、生産者やその統括者が葬られた可能性がある古墳も分布している。

古墳時代の陶邑窯　古墳時代中期に相当する４世紀末～５世紀代の陶邑窯跡群の編年は TK73→TK216→TK208→TK23→TK47 と理解されてきた（田辺　1966・1981）。さらに、それに遡る陶邑窯跡群の初現期の様相は1986年以降の大庭寺遺跡にはじまる発掘調査により明らかになってきており、TG232 号窯→ON231 号窯→濁り池窯→TK73 号窯と編年される（田中　2002、植野　2002）。器形、焼成技術には韓国加耶地域の洛東江流域と全羅道の栄山江流域という複数地域の要素が認められることは重要である（酒井　1994・2019・田中　2002 など）。また、土師器器形の須恵器の存在は、土師器製作者も須恵器生産に参画したことを示している（中久保　2015）。岡戸哲紀は、陶邑における初期の集落展開を渡来系集団と倭系集団の関係性などから、３段階に分けて捉えた（岡戸　2007、表１）。

初期須恵器段階において、西日本各地や近畿周辺部で、窯跡あるいは特徴的な意匠をもつ須恵器の出土から、韓半島の各地に由来する多元的な須恵器生産の導入が行われたと考えられる。各地の生産地が尾張・東山窯や松山平野の伊予市市場南組窯などを除くと各地にはほとんど定着せず衰退していく中にあって、陶邑窯が生産を継続し、大規模化していく背景には生産開始当初からの王権の意図が読み取れる。一方で、陶邑窯から東山窯への技術的関与をどのように評価するかといった問題もあり（中里　2017 など）、初期須恵器段階においても、単純な多元論のみではない複雑な動きが想定される。最近窯の調査が行われた枚方市茄子作遺跡の様相なども重要であろう。

５世紀後半以降には、定型化した須恵器の器形、生産技術が陶邑窯から各地で成立する地方窯へ発信された。

古墳時代後期、６世紀代の陶邑窯跡群は、群集墳の盛期とも重なり、窯の分布は最大に広がる。大野池地区では、数基を残して急速に衰退する一方、西方の槙尾川左岸の谷山池地区で新たに生産が開始され、６～８世紀にかけて展開する。また、遺跡範囲では陶邑窯跡群の範囲外となる、６世紀後葉～７世紀初頭にかけての狭山池周辺窯の拡大（植田　1999）、あるいは６世紀前葉～後葉にかけての日置荘西町窯跡群、丈六大池遺跡など、陶器山地区北方への拡大も重要である（江浦　1995）。ヘラ記号の種類なども増加しており、多数の工人が須恵器生産に携わったことがうかがえる。

陶器山地区では辻之遺跡、陶器南遺跡、小角田遺跡など、生産・流通に関わる集落遺跡が複数確認さ

れており、古墳の様相とも合わせて、樋口吉文は６世紀の陶器山地区に「茅渟県陶邑」の姿を読み取る（樋口 1999)。そもそも陶邑窯跡群という名称は、『日本書紀』崇神天皇七年条に登場する『茅渟県陶邑』に由来するが、地名や式内社である陶荒田神社の存在などからみても、『日本書紀』に登場する「茅渟県陶邑」が陶器山地区周辺を指すという指摘は多い(森 1977 など)。

陶邑窯跡群の地域差と生産体制　その大規模性から日本最大の須恵器生産地として把握される陶邑窯跡群だが、その内部にはいくつかの単位、あるいは丘陵ごとに分かれた異なる生産体制が存在したという指摘は重要である。陶邑窯跡群周辺に居住した氏族についても、郷単位で整理がなされている（溝口 2015 など)。地域差を指摘する研究では、とりわけ石津川を境に東西に地域差が存在し、王権の影響力が強い東地域と、在地豪族主導で運営された西地域と理解されている。

十河良和は５世紀代の陶邑窯跡群西部の大野池地区を中心とした地上式窯の偏在性に、５世紀代における東西差を読み取った（十河 2010)。６世紀代では、白石耕治が５世紀代に東方領域で発展した寸胴形の窯体構造が６世紀にかけて陶邑全域に広く影響を及ぼしたことを指摘する（白石 2010 など)。
菅原雄一は、陶邑窯跡群の東地域（高蔵寺地区・陶器山地区）は「窯体構造の改良、ロクロ回転方向の転換と統一化、Ⅰａ類短脚高杯の主生産など、生産の効率化や統一化を指向し、技術改良を積極的に果たした集団」であると理解する。ロクロ回転方向についていえば、東地域（陶器山・高蔵寺地区）で５世紀後半頃から右回転主体へ変化し、西地域にも影響を及ぼす（菅原 2002)。また、東西差は蓋杯の内面中央部における静止ナデの有無においても認識できる（植野 1983・藤原 2002 など)。なお、これらの技術改良は、別の面から見れば、大量生産による製品の粗雑化などを引き起こす、効率化や省略化でもあったのだろう。

７世紀以降では、西村康は窯の分布傾向・窯体構造の検討・特定の製品の有無などで、東大地区（陶器山地区・高蔵寺地区)、中・西大地区（栂地区以西）と分類し、東大地区で古代に新たに甕生産に特化した窯体構造である平窯を導入する点に、技術導入に積極的な姿を見出す（西村 1983)。さらに、陶邑窯跡群の末期にあたる９～10 世紀には高蔵寺・陶器山地区を残すのみとなるが、この頃、延喜式の記載からは王権や大神神社の祭祀に関わる甕を、和泉国が調納品として多く納めていたことがうかがえる(千葉 2010)。

技術拡散のセンターとしての陶邑窯　５世紀後半以降の地方窯の成立に関して、陶邑窯跡群の製品との類似から陶邑窯跡群がその技術の発信源となった可能性は高く（田辺 1981・菱田 1992 など)、さらに菱田哲郎は、重要な仮説として、帰郷型などの工人移動モデルを示した（菱田 1992)。他の研究分野、例えば埴輪研究などでは製作工具痕跡の同定などから既にそうした研究もなされているが、須恵器研究で工人移動をどのように実証していくかは課題である。

また、５世紀後半頃～６世紀初め頃の技術拡散においても、陶邑窯跡群東地域が主導的な役割を果たしたとされ、東地域の技術が西日本の広域に広がっている（菅原 2006、図４)。ただし一部では、陶邑窯とは異なる型式変化を示しつつも、古代にかけて成長する近江鏡山窯（鈴木 2025)、あるいは、技術改良や省力化に積極的であった陶邑窯とは対照的に、生産開始期からの技術を維持しながらやがて一大生産地となる東山窯が存在するように（岩越 2026 予定)、陶邑窯跡群からの技術伝播の様相やその背景についてはまだ検討の余地があるといえよう。

６世紀中葉以降には地方窯の増加とともに、須恵器の在地生産が顕在化し、地方窯から地方窯への技

術拡散が主となり、陶邑窯の技術のセンターとしての求心的な傾向も薄れていったと考えられる（菱田 2007 など）。ただし、５世紀後半以降の地方窯の展開については、段階的に理解されてきた一方で、実際には漸移的な部分もあり、陶邑窯跡群と地方窯の中心–周辺関係がどのように変化していったのかについては、実際の製品や窯などの分析を踏まえた検討の余地があるように思う。

近年の研究として　最近、筆者は陶邑窯跡群の中でも、生産された製品の細部形状の差があることに注目し、古墳時代の陶器山地区の編年研究に取り組み始めている（岩越 2025、図６）。その細部形状の特徴とは、一つには、６世紀中葉頃（TK10 型式期新段階に併行）まで蓋杯の杯身の端部や杯蓋の稜に段を残しながら変遷していくといった、陶邑窯跡群の他の地区の蓋杯では６世紀初め頃（MT15 型式期に併行）までしかみられない特徴である。

このような特定の器種の細部形状に注目し、地区ごと、あるいは東西の差などを見出した研究はこれまでにも存在しており、先述の菅原による高杯の脚部形状の分析などもそれにあたるが（菅原 2006）、この研究からいくつかの方向性が見出せる。

第１に、既往の編年との関係である。陶邑窯跡群の編年は、森浩一（森 1958）、田辺昭三（田辺 1966・1981）、中村浩（中村 1978・2001）、佐藤隆（佐藤 2007）、山田邦和（山田 2011）らによって行われている（表２・図５）。また、一つの地区の資料で須恵器編年を提示したものとして、谷山池地区における白石耕治の編年も重要である（和泉丘陵内遺跡調査会 1992）。既往の編年のうち、広く受け入れられている田辺編年、中村編年は「窯式編年」と「床式編年」という言葉でよく対比されるが、方法論以外にも両者が用いている資料に陶邑窯跡群内部での地域差があるということも、改めて注意する必要がある。

また、田辺編年の場合、陶器山地区と高蔵寺地区の資料による編年が組まれるが、筆者の認識が正しいとすれば、蓋杯の細部形状の変化については、両地区で差がある。すなわち、田辺編年の指標である蓋杯について、細部形状の変化としてみた場合、必ずしも正しくない点がある。

今後は、各地区ごとの変化を把握した上で、複数器種の全体的なプロポーションの変化や、器種組成の変化など、より大きな変化などに注目して併行関係を把握することが必要となろう。

第２に、陶邑窯跡群内部での地域差を明らかにすることで、丘陵ごとに異なる可能性もあるとされる生産体制の理解につながる。王権主導の地区としてまとめられることもある陶器山地区と高蔵寺地区であるが、平安時代の９世紀には陶器山地区と高蔵寺地区を残すのみとなる。この頃、西暦 859 年（天安３年・貞観元年）に和泉国と河内国の間で起きた、いわゆる陶山の薪争いは有名であるが、これは和泉国大鳥郡に属する高蔵寺地区と、多くが河内国丹比郡に属する陶器山地区との間で起きたと考えられる。両地区の製品は非常によく似ているが、古墳時代にも細部形状では差異があることが判ることで、両地区でやや異なる生産体制が古墳時代にまで遡る可能性を指摘できる。

第３に、地方窯への技術拡散の問題に関して、地方窯の技術系譜を陶邑窯跡群内部のより細かい範囲に求められる可能性がある。例えば、陶器山地区の蓋杯と大阪府北部の千里窯跡群の蓋杯には先述の細部形状で共通点を見出すことをできる（岩越 2025）。また、陶器山地区と千里窯跡群の間には、他にも秋山浩三（秋山 2006）や我妻佑哉（我妻 2023）が指摘するような高杯端部形状での類似点などがある。

なお、先述のように、６世紀から７世紀前葉にかけてさらに、陶器山地区周辺での須恵器生産の拡大現象が狭山池地区や、陶器山地区北方の丈六大池遺跡、日置荘西町遺跡、深井畑山遺跡などの須恵器窯跡で認められ、これらも陶器山地区の拡大現象として理解できると考えている。丈六大池遺跡では粘土採掘坑も確認されており、日置荘遺跡でもタタキ板や当て具のような生産用具が出土したことはよく知られているが、６世紀中葉（TK10 型式期）の陶器山地区の主体がこの地域であった可能性もある。

６世紀を前後する時期の畿内の須恵器生産は、陶器山地区とその周辺部の窯、そしてその技術系譜をひく大阪府北部の千里窯跡群によってリードされた可能性がある。

第４に、消費地への流通の問題として、仮に、陶邑窯跡群のどの地区から製品が供給されたかということにも意味があるとすれば、その実態を把握することにもつながる。このほか、植田隆司は横穴式石室出土須恵器において、杯身立ち上がりに古い様相を残す傾向を指摘し、それを古墳出土須恵器の特質と捉えたが（植田 2012)、これは前述のような陶邑窯跡群内部の地域差を加味した場合、陶器山地区で生産された製品、あるいはその技術系譜をひく千里窯跡群等の窯跡で生産された製品の可能性がある。

まとめ　国内最大の須恵器生産地である陶邑窯跡群に纏わる多くの研究について、筆者自身も現時点では咀嚼できておらず、本来取り上げるべき研究も多々見落としていると思われるが、いくつかの課題を指摘して終わりとしたい。陶邑編年は、泉北ニュータウンの急速な開発とそれに伴う発掘調査の結果、広域編年として比較的早くに確立された一方、既に指摘されるように、資料の属性分析や器種ごとの変遷の実態なども十分ではなく、根本的な再検討や微修正がなされないまま今日に至っている。また、誤解を恐れずに言えば、編年の基準資料ばかりが注目される現状にある。

陶邑窯跡群の資料は言うまでもなく膨大であり、個人レベルでは困難な作業であるが、多くの埋もれた資料の再検討を行うことでも、今回みたような地域差などの実態について検討できる余地がある。

さらに、陶邑窯跡群出土資料の検討と、近年、各地の須恵器生産地でも進められる編年作業等により、全国的に、あるいは陶邑窯跡群内部であっても必ずしも一様ではない須恵器の変化の実態が明らかになることで、須恵器編年が生産地編年としての意義を取り戻すことにつながるだろう。また、それは都城における消費地編年が重視される古代にも通ずることであると思われる。

【参考文献】

秋山浩三 2006「古墳副葬須恵器の産地推定一例―物集女車塚・井ノ内稲荷塚における微細特徴からの追究―」『吉岡康暢先生古希記念論集 陶磁器の社会史』

和泉丘陵内遺跡調査会 1992『陶邑古窯址群―谷山池地区の調査―』和泉丘陵内遺跡発掘調査報告書 Ⅳ

岩越陽平 2025「桜井谷窯跡群と陶邑窯跡群」『「須恵器の里とよなかの謎に迫る」資料集』豊中市教育委員会

岩越陽平 2026「西日本からみた須恵器生産」『季刊考古学・別冊　東海と古墳時代の東西交流』（予定）

植野浩三 1983「須恵器蓋杯の製作技術」『文化財学報』第２集 奈良大学文学部文化財学科

植野浩三 2002「TK73 型式の再評価―高杯の消長を中心にして―」『田辺昭三先生古稀記念論文集』田辺先生古稀記念の会

植田隆司 1999「陶邑窯跡群東端の窯跡分布」『狭山池』論考編 狭山池調査事務所

植田隆司 2012「古墳時代須恵器編年の限界と展望」『龍谷大学考古学論集』Ⅱ　龍谷大学考古学論集刊行会

江浦洋 1995「陶邑周辺部における須恵器生産点描」『日置荘遺跡』分析・考察編 大阪府教育委員会・大阪文化財センター

大阪府立近つ飛鳥博物館 2006『年代のものさし 陶邑の須恵器』

岡戸哲紀 2007「陶邑の成立」『財団法人大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府立弥生文化博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館　2005 年度共同研究成果報告書』財団法人大阪府文化財センター

酒井清治 1994「わが国における須恵器生産の開始について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 57 集　国立歴史民俗博物

館
酒井清治 2019「韓国全羅道の楔形陶枕と大庭寺窯跡の陶枕について」『郵政考古紀要』歴史・民族・考古学論攷（Ⅱ） 郵政考古学会
佐藤隆 2007「６世紀における須恵器大型化の諸様相―陶邑窯跡編年の再構築に向けて・その３―」『大阪歴史博物館研究紀要』第６号　大阪市文化財協会
白石耕治 2010「陶邑窯―大阪府南部窯跡群の地域性―」『古代窯業の基礎研究―須恵器窯の技術と系譜―』窯跡研究会
菅原雄一 2006「陶邑窯跡群の地域差と技術拡散」『考古学研究』第五十三巻第一号 考古学研究会
鈴木茂 2025「鏡山古窯址群関連資料寄贈報告及び若干の考察」 『令和６年度　野洲市文化財調査概要報告書』野洲市教育委員会
十河良和 2010「五世紀代における陶邑窯跡群の東部と西部」『ヒストリア』223 大阪歴史学会
田中清美 2002「須恵器定型化への過程」『田辺昭三先生古稀記念論文集』田辺昭三先生古稀記念の会
田辺昭三 1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古クラブ
田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
千葉太朗 2010「第４章　陶邑窯と畿内諸窯の検討」『古代窯業の基礎研究―須恵器窯の技術と系譜―』窯跡研究会
千葉太朗 2013「第４章　泉北丘陵の須恵器生産と陶邑」『和泉市の考古・古代・中世』和泉市の歴史６　和泉市史編さん委員会
中村浩 1981『和泉陶邑窯の研究―須恵器生産の基礎的考察―』柏紀房
中村浩 2001『和泉陶邑窯 出土須恵器の製式編年』芙蓉紀房出版
中久保辰夫 2015「須恵器・二重口縁壺の製作背景」『韓式系土器研究』XIV　韓式系土器研究会
中里信之 2017「須恵器と東山窯成立研究の現状と展望」 『考古学フォーラム』 23 考古学フォーラム
西村康 1983「陶邑・猿投・牛頸―須恵器生産の進展―」『文化財論叢』同朋舎
樋口吉文 1999「茅渟県陶邑」の最新の考古学的成果から―陶器山地区北部を中心にして―」『堺市博物館報』第十八号 堺市博物館
菱田哲郎 1992「須恵器生産の拡散と工人の動向」『考古学研究』第 39 巻 第３号 考古学研究会
菱田哲郎 2007『古代日本国家形成の考古学』京都大学学術出版会
藤原学 2002「群集墳と群集窯」『八十塚古墳群の研究』関西大学文学部考古学研究 第７冊 関西大学文学部考古学研究室
溝口優樹 2015『日本古代の地域と社会統合』吉川弘文館
森浩一 1958「和泉河内窯の須恵器編年」『世界陶磁全集』第一巻、河出書房
森浩一 1977「第三章・第三節 生産の発展とその技術」『大阪府史』第一巻・古代編
山田邦和 2011「須恵器の編年　①西日本」『古墳時代の考古学』１　同成社
我妻佑哉 2023「６世紀前葉における須恵器長脚無蓋高坏の諸類型と地域差」『大阪大学・関西大学・京都府立大学・明治大学４大学合同考古学・古代史大学院生研究交流プログラム成果報告』明治大学大学院文学研究科

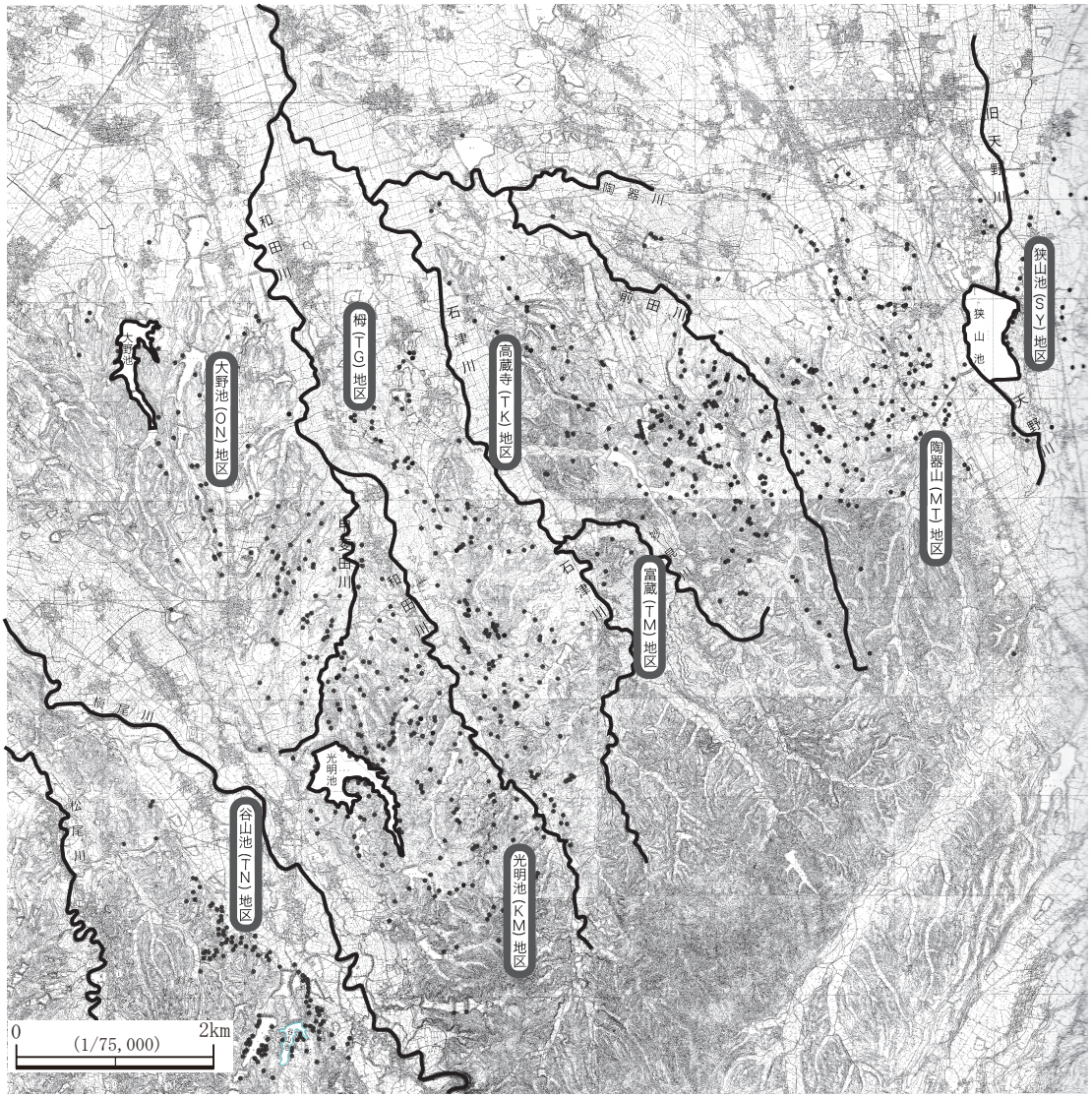
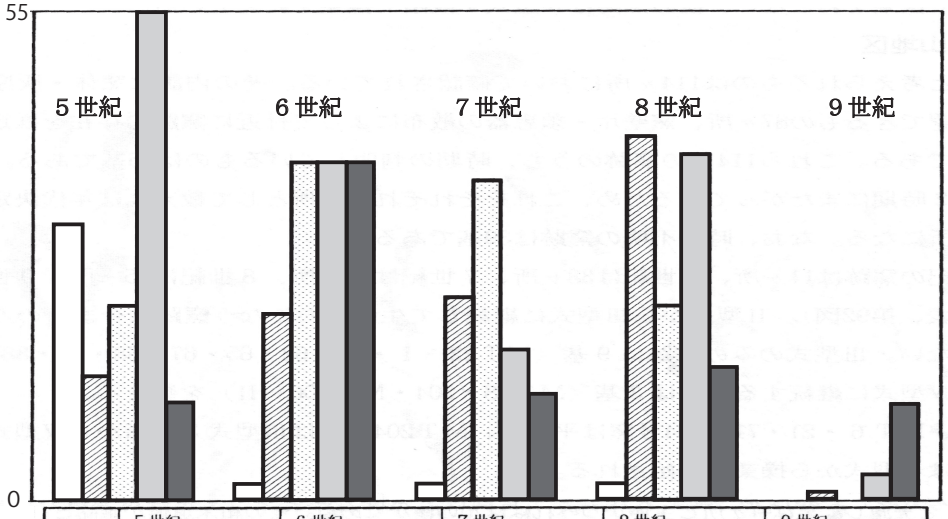


図１　陶邑窯跡群分布図（S=1/75,000）（近つ飛鳥博物館 2006 を元に作成）



	５世紀	６世紀	７世紀	８世紀	９世紀
大野池	31	2	2	2	0
光明池	14	21	23	41	1
梅	22	38	36	22	0
高蔵寺	55	38	17	39	3
陶器山	11	38	12	15	11

図２　陶邑窯跡群の地区別　窯跡数（宮崎編 1995 を元に作成）

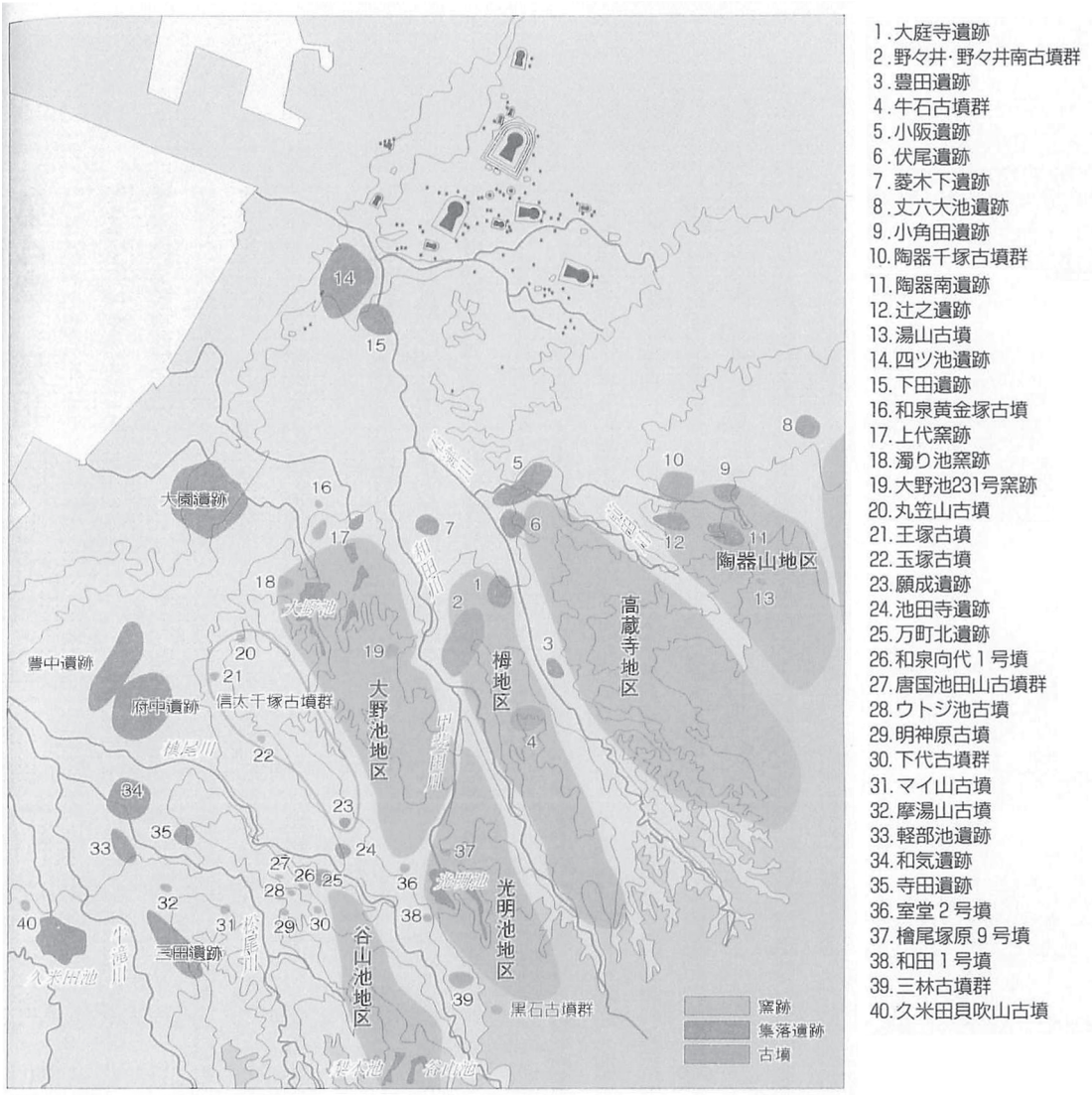
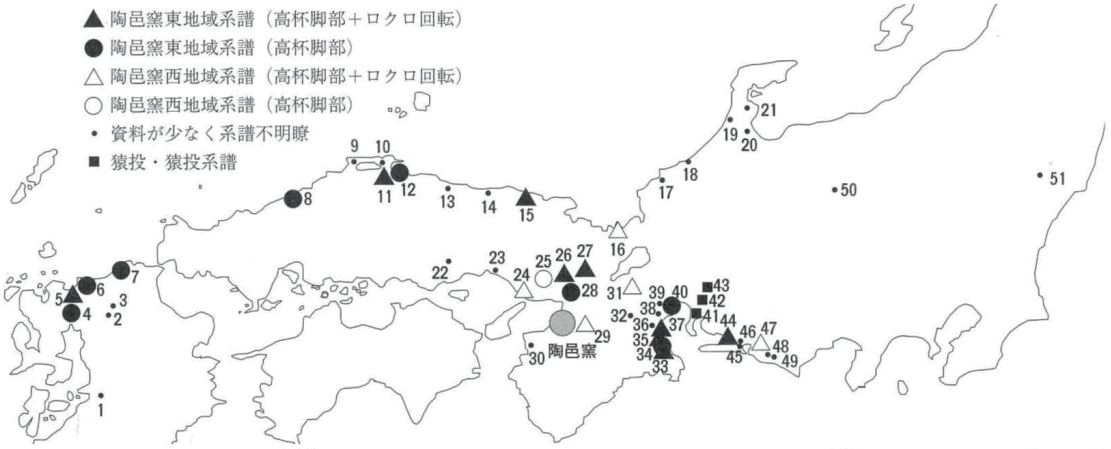


図３　陶邑窯跡群と周辺遺跡（千葉 2013 を元に作成）

表１　陶邑における集落の動向（岡戸 2007）

		大庭寺	万崎池	小阪	伏尾	深田	野々井	豊田	集落の特徴
出現期	TG 232								・渡来系集団を中心とした工人集落の出現。
発展期	ON 232 TK 73								・渡来系集団と倭系集団が混在した工人集落の出現。
完成期	TK 216 TK 208 TK 23								・掘立柱建物を中心として構成される大規模集落の出現。 ・古墳の築造。 ・泉北丘陵に展開する在地有力集団の須恵器生産への積極的な関与。



1．萩尾大溜池窯　2．山隈窯　3．小隈窯　4．神籠池窯　5．新開窯　6．重留窯　7．稲元日焼原１号窯　8．日脚１号窯　9．深谷窯　10．廻谷窯　11．門生山根１号窯　12．高畑窯　13．埴見中の谷窯　14．七谷窯　15．鬼神谷１号窯　16．興道寺窯　17．鎌谷窯　18．二ツ梨東山４号窯　19．柳田ウワノ１号窯　20．園カンデ窯　21．深沢１号窯　22．戸瀬池窯　23．那波野丸山３号窯　24．赤根川・金ヶ崎窯　25．郡塚１号窯　26．猫谷窯　27．園部大向窯　28．千里窯　29．中佐備窯　30．沙羅谷４-Ⅱ号窯　31．泉窯　32．二ツ峠窯　33．久居窯　34．藤谷窯　35．ヲノ坪窯　36．内多窯　37．徳居１号窯　38．稲生窯　39．西ヶ谷窯　40．小杉大谷窯　41．新田窯　42．東山窯　43．城山窯　44．水神窯　45．明通り窯　46．峠場１地点窯　47．有玉窯　48．安久路窯　49．衛門坂２号窯　50．松の山窯　51．泉崎窯

図４　地方窯技術系譜（菅原 2006 を元に作成）

表２　陶邑窯跡群　編年対照表（近つ飛鳥博物館 2006 を元に作成）

森 浩一氏案 1958 1962	田辺昭三氏旧案 1968	中村 浩氏案 1978・2001	田辺昭三氏新案 1981	岡戸哲紀氏案 1994	山田邦和氏案 1998	田中清美氏案 2002	植野浩三氏案 2002
		第1段階 前期		（　）		（　）	
Ⅰ期 前半	Ⅰ期 TK73型式	Ⅰ型式 第1段階 後期	Ⅰ期 TK73型式 一須賀２号窯段階	Ⅰ期 TG232型式 TG232号窯 TG231号窯 ON231号窯	Ⅰ期 前期 古段階（大庭寺窯式）	TG232型式 TG231型式 TK73型式 ON231型式（濁り池窯）	TG232型式 TG232型式 ON231号窯 TK73型式 濁り池窯
			TK73号窯段階	Ⅱ期 TK73型式	新段階（高蔵寺73号窯式）	TK73型式新段階	TK73型式新段階
後半	TK216型式	第2段階	Ⅰ期 TK216型式	Ⅲ期 TK216型式	Ⅰ期 中期 古段階（高蔵寺216号窯式）	TK216型式	
	TK208型式	第3段階	TK208型式 ON46号窯段階 TK208号窯段階	Ⅳ期 TK208型式	新段階（高蔵寺208号窯式）	TK208型式 ON46号窯段階 TK208号窯段階	
	TK23型式	第4段階	TK23型式		後期 古段階（高蔵寺23号窯式）	TK23型式	
	TK47型式	第5段階	TK47型式	白石耕治氏案 1992	新段階（高蔵寺47号窯式）	TK47型式	
Ⅱ期	MT15型式	第1段階	MT15型式	1期	前期 古段階（陶器山15号窯式）		
	TK10型式	第2段階	TK10型式 TK10号窯段階	2期	新段階（高蔵寺10号窯式）		
Ⅲ型式 前半	（　）	第3段階	Ⅱ期 TK10型式 MT85号窯段階	3a期	Ⅱ期 古段階（陶器山85号窯式）		
後半	TK43型式	第4段階	TK43型式	3b期	後期 中段階（高蔵寺43号窯式）		
	TK209型式	第5段階	TK209型式	4期 西 弘海氏 飛鳥編年 1971	新段階（高蔵寺209号窯式）		
末	（　）	第6段階	TK217型式	5期 飛鳥Ⅰ	初期（高蔵寺217号窯式古段階）		
Ⅳ期 前半	TK217型式	Ⅲ型式 第1段階		飛鳥Ⅱ	Ⅲ期 前期 古段階（高蔵寺217号窯式新段階）		
	（　）	第2段階	Ⅲ期 TK46型式	飛鳥Ⅲ	新段階（高蔵寺46号窯式新段階）		
後半	（　）	第3段階	TK48型式	飛鳥Ⅳ	後期 古段階（高蔵寺48号窯式）		西 弘海氏 平城宮編年 1975
Ⅴ期 前半	MT21型式	第1段階	MT21型式	飛鳥Ⅴ	Ⅳ期 前期 陶器山21号窯式		平城Ⅰ・Ⅱ
	（　）	Ⅳ型式 第2段階	（　）				平城Ⅲ
後半	（　）		（　）				
	TK7型式	第3段階	Ⅳ期 TK7型式		後期 高蔵寺７号窯式		平城Ⅳ・Ⅴ
		第4段階					平城Ⅵ
Ⅵ期	TK122型式	Ⅴ型式 第1段階	MT83型式		Ⅴ期		平城Ⅶ
	MT5型式	第2段階					平城Ⅷ

山田邦和氏案は（1998『須恵器生産の研究』学生社）より、飛鳥編年・平城宮編年は（1986『土器様式の成立と展開』真陽社）より引用。ただし、飛鳥編年の暦年代については（相原喜之　1997「Ⅰ　大和　飛鳥・藤原地域の土器」『古代の土器５－２　７世紀の土器（近畿東部・東海編）』）による。



付表 4　陶邑・田辺編年

（田辺昭三　1981『須恵器大成』角川書店）の98～111頁の実測図に、（田辺昭三　1966『陶邑古窯址群I』平安学園研究編集第10号 ）の図版43のTK7号窯の資料を追加して作成した。なお、一部掲載出来なかった資料がある。また、TK73型式古段階の資料は割愛している。

図５　陶邑窯跡群　田辺昭三による編年（近つ飛鳥博物館 2006）

図 6　陶邑窯跡群陶器山地区の編年および他地区との併行関係試案

※蓋杯は S=1/6、高杯・甕は 1/8。谷山池地区は白石 1992。高蔵寺地区は田辺 1966 を元に一部資料を追加。

東アジア窯業の源流から見た摂津千里窯の製作技術

奈良文化財研究所　我妻佑哉

概要　大阪平野北部に所在する千里窯跡群は、古墳時代後期にあたる６世紀を盛期とする大規模須恵器生産地である。西暦 500 年、すなわち６世紀の開始を相前後する千里窯の操業拡大とともに、日本列島において須恵器食器製作時のロクロ回転方向の主体が左→右へ変化しはじめ、また、内面中央にロクロ停止後の静止ナデを施す例が増加する。

その背景を検討すべく、中国大陸および韓半島の陶磁器の観察を行ったところ、中国大陸や韓半島東半の加耶・新羅地域ではロクロ左回転＋内面中央静止ナデ無しの傾向が強いのに対して、韓半島西半の百済・栄山江流域ではロクロ右回転＋内面中央静止ナデの例が一定みられることがわかった。東アジアのロクロ技術の展開を踏まえ、千里窯ひいては列島で技術的変化が生じたのかについて考察したい。

１．摂津千里窯跡群における研究史と本稿の射程

（１）千里窯跡群の概要と研究史

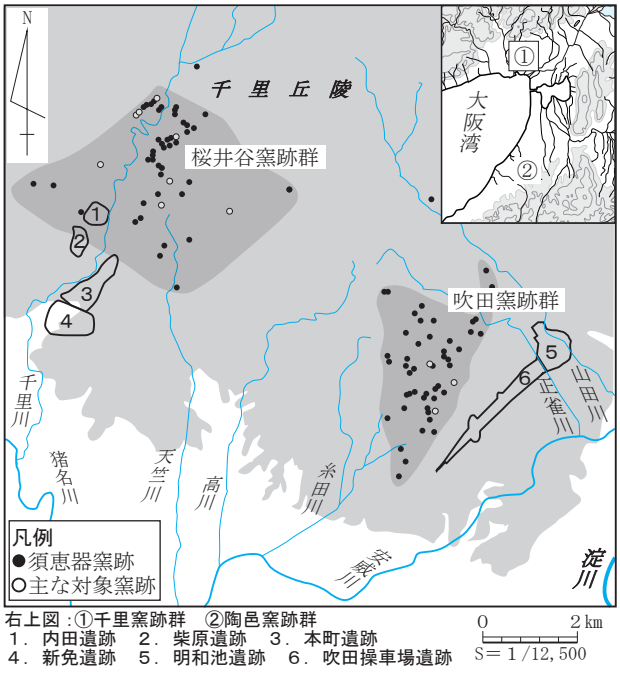
大阪平野北部にまたがる千里丘陵に所在する千里窯跡群[(1)]は、西半の豊中市桜井谷窯跡群・東半の吹田市吹田窯跡群の総称である（鍋島・藤原 1974、図１）。現状では両群を合わせて約 100 基の須恵器窯跡の存在が確認されており、そのほとんどが古墳時代後期にあたる６世紀代の操業と考えられている。大阪平野南部の陶邑窯跡群に総合的な規模では劣るものの、古墳時代後期については畿内地域に２つの大規模須恵器生産地が併存する状況であったといえる。

須恵器研究の端緒としての千里窯　実は千里窯西半の桜井谷窯は日本列島ではじめて踏査を受けた須恵器生産地であった可能性がある（菱田 2025）。古くは明治期に大阪造幣局のいわゆるお雇い外国人であったウィリアム・ゴーランドが踏査を行っていた記録があり、ゴーランドに影響を受けた考古学者の笠井新也・地元住職の櫻井義彰らも踏査記録を公表していた（笠井 1915、櫻井 1916）。戦後すぐの 1950 年にも京都大学助手の小林行雄が桜井谷 2-1 号窯の発掘調査を実施している（陣内ほか編 2025）。

以上の経緯を受けつつ、大阪平野の南北での須恵器生産をはじめて対比的に分析したのは同志社大学の森浩一であった。氏は大阪南部窯跡群（※陶邑窯）と大阪北部窯跡群（※千里窯）との名称を用いつつ、漁労に用いる飯蛸壺形須恵器の生産が前者では多く後者ではほとんどみられないことを説いた（森 1963）。内容もさることながら、とりわけ遺跡の呼称から氏の問題意識がうかがえるようである。

千里窯製品の特徴と研究の展望　高度経済成長期に入ると千里ニュータウンなどの開発に伴う調査が相次いで行われた。その成果を受けて、桜井谷・吹田の両群が同一系統であるとされるに至り（鍋島・藤原 1974）、吹田窯では藤原学が、桜井谷窯では木下亘がそれぞれ須恵器の年代的研究を行った（藤原 1981、木下 1982・2005）。近年では田村美沙や筆者が千里窯全体を統合した年代的研究を提示している（田村 2010、我妻 2024、図２）。

以上の研究のなかで千里窯製品の特徴がいくつか指摘された。まとめると、①須恵器蓋杯の口縁端部や高杯脚部・腿の文様などに古い時期の要素が残存すること、②高杯の脚端部・甕などの



右上図：①千里窯跡群　②陶邑窯跡群
1．内田遺跡　2．柴原遺跡　3．本町遺跡
4．新免遺跡　5．明和池遺跡　6．吹田操車場遺跡

図１　千里窯跡群および周辺遺跡（我妻 2024）

口縁端部が肥厚して稜をなすこと、がある。

①・②の要素を併せもつ「千里系須恵器」（秋山 2006・2007、田村 2010、我妻 2026 予定）は淀川流域を中心に列島各地に分布しており、千里窯が単に多数の窯を抱える生産地であっただけでなく、広域供給も担っていたことが判明してきた。

ただし、後述するように陶邑窯東地域でも①・②の要素をもつ製品を生産しているとの指摘もある（岩越 2025b など）。今後も千里窯に独自の特徴が真に存在するのかを精査する必要はあろう。そのうえで、なぜ６世紀に陶邑窯内部では地域差が顕在化するのに対し、千里窯内部は桜井谷ー吹田間の微差はあれども丘陵一帯で同一系統的なのか、そもそもなぜ大阪平野の南北に大規模須恵器生産地が併存していたのか、古墳時代後期の畿内地域における須恵器生産全体を俯瞰した研究を進めていく必要がある。

（２）問題の所在と分析の視座

千里窯では操業拡大期にあたる（５世紀末葉～）６世紀初頭[(2)]から須恵器食器（蓋杯・高杯など）の製作時にＡ．ロクロを右回転で使用し、Ｂ．内面中央にロクロ停止後に静止ナデを施す、場合が多い（藤原 2002、我妻 2024、岩越 2025a、図４）。同様の技法を採用する傾向は千里窯だけではなく陶邑窯東半の陶器山地区周辺や高蔵寺地区でもみられ（菅原 2006、岩越 2025b、図４参考）、やがて７・８世紀に至って列島全体に波及する（北野ほか 2002）。翻って、列島における須恵器生産の開始（≒初期須恵器段階）から１世紀近くの期間、ロクロ左回転での製作が主体で、ロクロ停止後の調整はあまり行われてこなかったといえる。

ここで強調しておきたいのは、千里窯の操業が急拡大する千里１期≒陶邑田辺編年 MT15 型式期（田辺 1966・1981）において、須恵器食器が大型化する点である（図２）。つまり、ＡやＢの技法の転換ともいえる現象は須恵器の形態的変化や生産地体制の変化と時期を同じくしているといえる。

上記の変化を考えるうえで、そもそもなぜ列島の須恵器生産がロクロ左回転から始まったのか、ロクロ右回転や内面中央静止ナデが列島独自のものなのかについての分析を避けて通ることはできない。そこで筆者は、東アジアにおけるロクロ使用の源流である中国大陸と、列島に須恵器生産技術を伝えた韓半島の土器・陶磁器を観察し、特に食器類の製作時におけるＡ．ロクロの回転方向、とＢ．内面中央の調整、について観察を実施した。細に入った分析ではあるものの、技法の観察は器としての形状に左右されない強みがあり、地域や時代の異なる土器・陶磁器を等閑視できる（尾野 2019）。

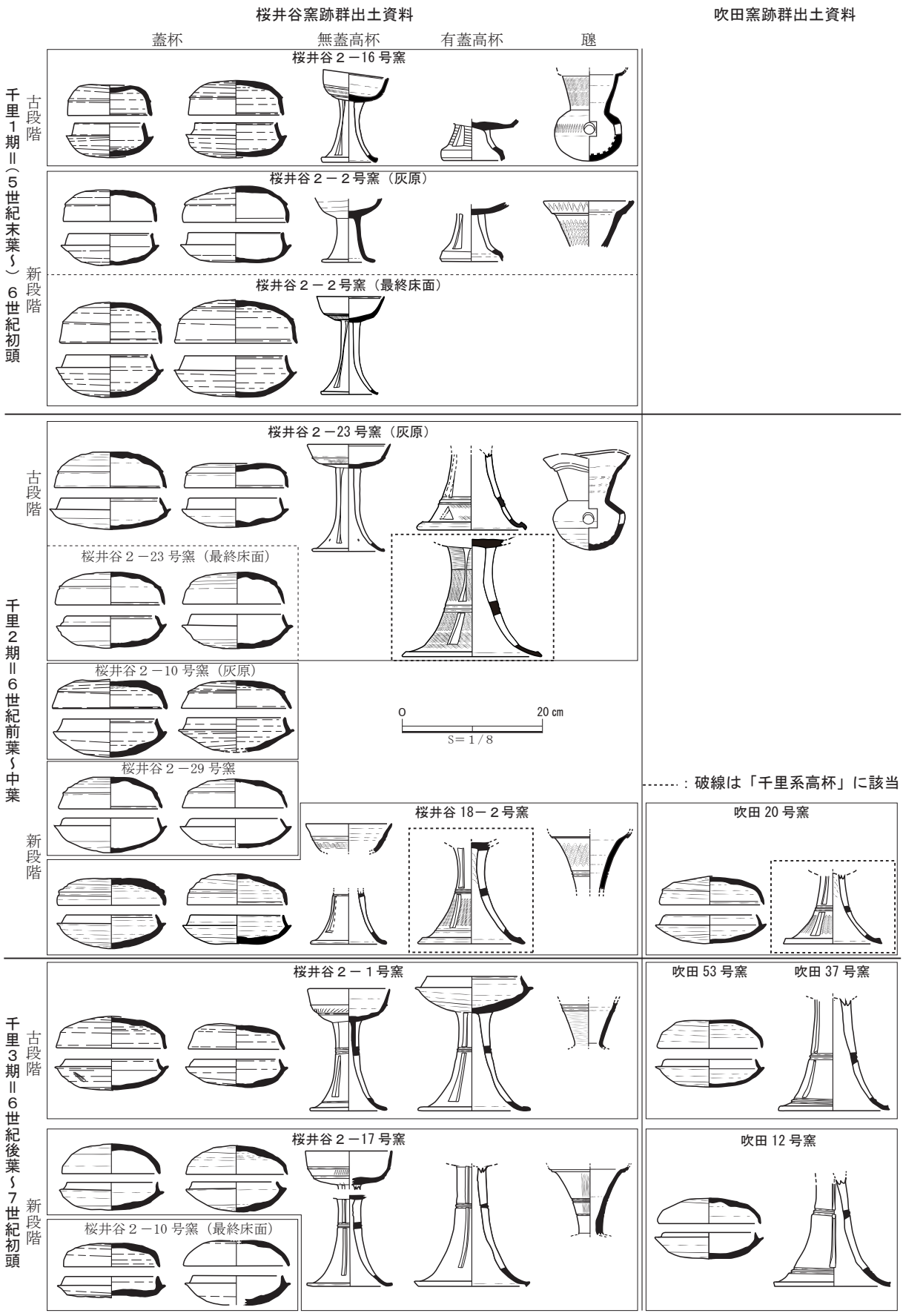


図２　千里窯跡群における古墳時代須恵器の型式変化（我妻 2025a を改変）

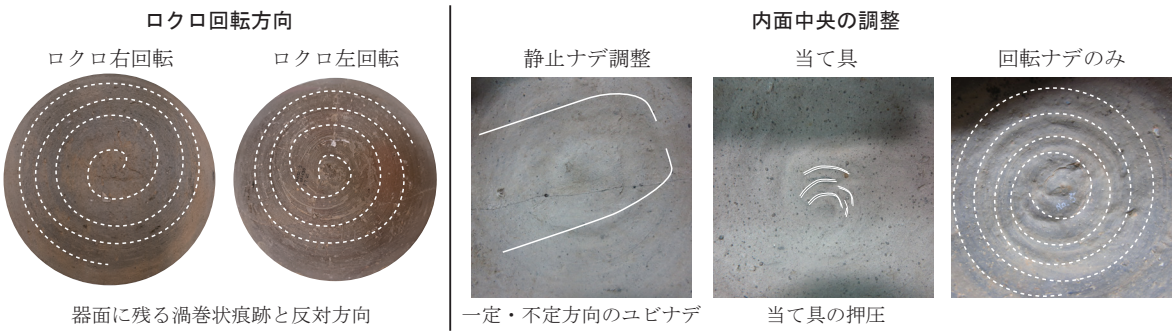


図３　陶磁器食器製作時のロクロ回転方向と内面中央の調整（模式図）

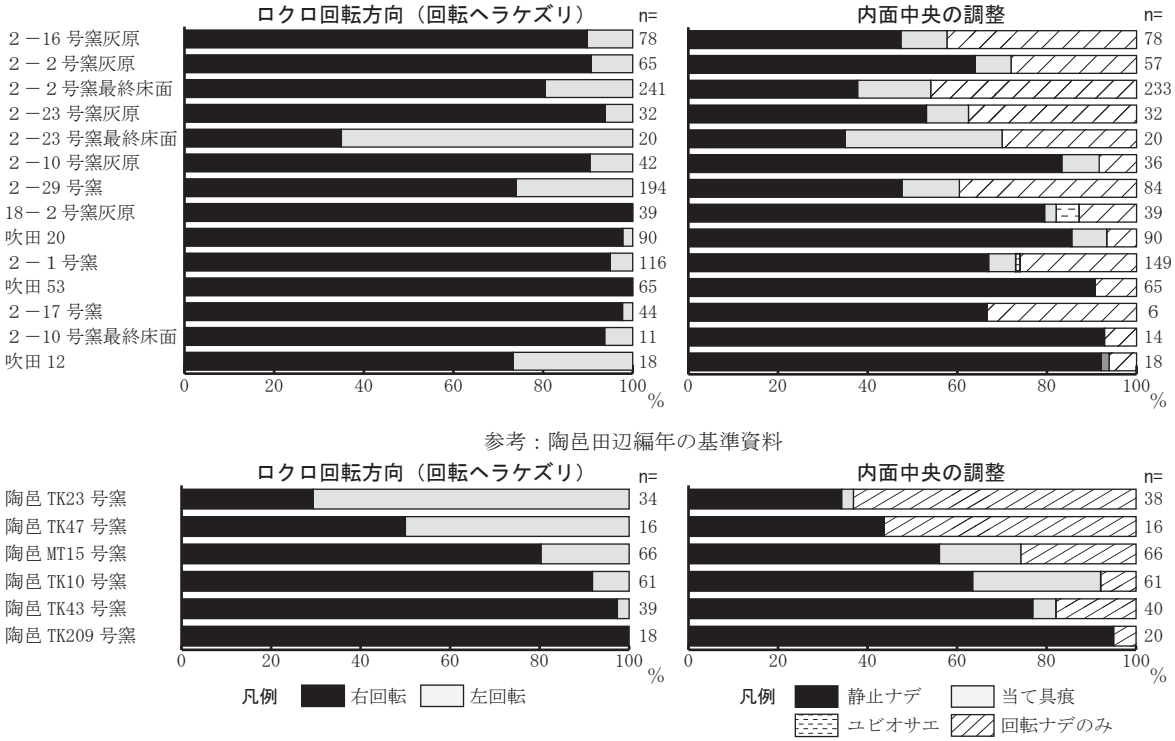


図４　千里窯跡群におけるロクロ回転方向・内面中央調整の変遷

２．東アジアにおけるロクロ使用技術の変化

（１）中国大陸におけるロクロ使用

まず、東アジアにおけるロクロを用いた土器類の生産は確実な例では長江流域の松澤文化期、黄河流域の龍山文化期（今から 4400 ～ 3800 前ごろ）まで遡る。なお、窯の構築自体は先立って開始しているが、ロクロ使用の開始とともに還元炎焼成による硬質の土器生産も開始した。当該期には黒色処理・研磨処理を施して器壁を薄く仕上げる黒陶とそういった処理をしない灰陶があり、後者が韓半島の陶質土器、ひいては日本列島の須恵器の直接の祖先といえる。

今回の分析では、中国考古博物館・河南博物院・鄭州市博物館・鄭州商城遺跡博物館・漢魏洛陽城遺跡博物館・二里頭遺跡博物館（以上、中国河南省）、隋唐大運河博物館・銅川耀州窯博物館・陝西省考古博物館（以上、中国陝西省）の展示資料について観察を行った。いわゆる黄河流域中原地域の資料が主であり、都城遺跡の周辺生産地の製品のほか、長江流域から流入した原始青磁・青磁等も含んでいる（図５）。

観察結果は上記博物館の資料を先述の龍山文化期（BP4400～3800）から、二頭里文化期（BC2070～1600）、殷代（BC1600～1046）、周代（BC1046～771）、春秋戦国時代（BC771～221）、漢代～中国三国時代（BC206～AD265）、北朝時代（AD439～589）、隋・唐代（AD589～907）の８つの時代区分に振り分けて提示した（図６－Ⅰ）。



図５　観察した資料の例

ロクロの回転方向については、全ての時代を通して左回転が圧倒的多数を占める。そのなかで内面中央の様相が確認できた食器類にかんしては、内面中央にはロクロ回転ナデのみが確認でき、静止ナデは認められなかった。したがって、中国大陸においてはロクロ使用開始時から使い方については変化が生じていなかったといえる（尾野 2019）。

（２）韓半島におけるロクロ使用の変化と地域差

続いて、列島における須恵器生産の直接的な源流となった韓半島陶質土器生産におけるロクロの回転方向とロクロ停止後の調整について確認したい。観察の結果、韓半島の東西で傾向が異なっていたため、加耶・新羅地域と（百済・）栄山江流域に区分して提示する。

加耶・新羅地域　金海大成洞 73 号墳（金官加耶：４世紀末葉～５世紀初頭）、咸安道項里古墳群（阿羅加耶：５世紀前葉）、釜山蓮山洞古墳群・九郎洞古墳群（金官加耶：５世紀後葉）、清道聖谷里古墳群（新羅：６世紀後葉）、浦項大蓮里古墳群（新羅：６世紀末葉）、釜山五倫洞古墳群（新羅：７世紀前葉）を対象とした（図６－Ⅱ）。

ロクロ回転方向については、上記のうち全点がロクロ左回転で製作されていた。観察できた点数が少なかったためグラフからは除外したものの、いわゆる韓半島三国時代の陶質土器に先立つ現三国時代の瓦質土器（紀元後１～３世紀）でもロクロ左回転での製作例のみが確認できた。また、観察不可の一部を除いて内面中央を回転ナデのみで仕上げる例が占めていた。

栄山江流域　霊岩内洞里双墓（５世紀末葉～６世紀初頭）、羅州伏岩里丁村１号石室・同１号甕棺（５世紀末葉～６世紀初頭）、光州良爪洞杏林遺跡１号墳（５世紀末葉～６世紀初頭）、海南長鼓峰古墳（６世紀初頭）、咸平新徳古墳（６世紀初頭）、和順懐徳３号墳（６世紀初頭）、羅州伏岩里丁村古墳２号石室（６世紀中葉）を対象とした（図６－Ⅲ）。なお、追葬が可能な横穴式石室を採用しているほか、丁村古墳のように墳丘内に別の埋葬を行う場合も多いため、ある程度時期幅のある資料群を含んでいる可能性がある。

ロクロ回転方向については、上述の加耶・新羅地域とは違ってロクロ右回転で製作した食器類が一定の割合を占めていることがわかる。とりわけ６世紀中葉に位置づけ得る丁村古墳２号石室出土陶質土器蓋杯は全点ロクロ右回転での製作を確認できたことから、６世紀前半のうちに徐々にロクロ右回転の割合が高まっていくことがわかる（金 2002）。また、内面中央の調整については、

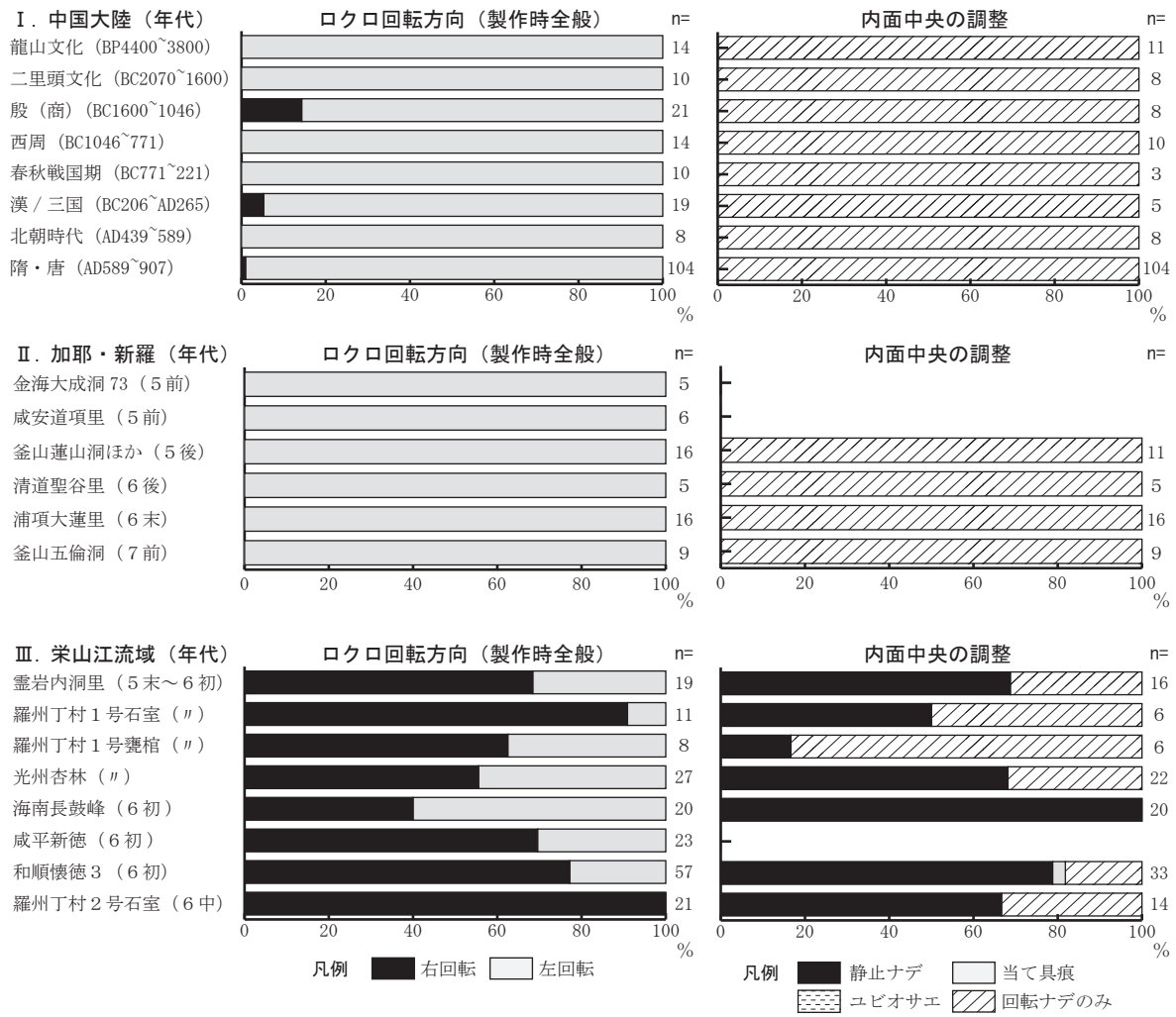


図６　中国大陸・韓半島におけるロクロ回転方向・内面中央調整の変遷

ナデ範囲が狭いもの・広いものなど多少のバリエーションを含めて静止ナデ調整の採用割合が高い。この点も加耶・新羅地域とは傾向が異なっている。

３．東アジアにおけるロクロ技術の波及と変容

（１）中国大陸から韓半島へ

中国大陸から韓半島への窯業生産技術や付随するロクロ使用技術の移動は、漢が韓半島北部に設置した楽浪郡・帯方郡を経由して進んだと考えられている（長友 2025 など）。ただし、波及は何度かあり、原三国時代の瓦質土器・三国時代の陶質土器生産開始のいずれも、中国からの直接的ないし間接的な影響を想定できるという（同上）。断続的かつ波状の技術波及を描写する（図７）。

その断続性に起因してか、例えば韓半島東半の新羅や加耶では高杯を用いる場合が多く、西半の百済・栄山江流域では蓋杯や蓋杯に３本の脚部が付属する三足土器を用いる場合が多いなど、東西で大きく主要食器の構成が異なる。また、同じ器種の場合でも細部の形状や文様に地域性が強い。一方でロクロ使用自体については、グラフに図示しえなかった４・５世紀代の百済・栄山江流域を含めて韓半島全体で当初は左回転が主体をなすなど、中国大陸以来の伝統に則っていたといえる。

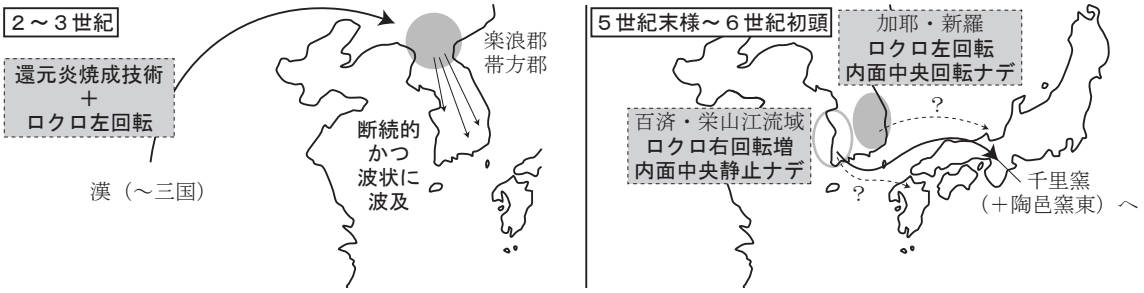


図７　東アジアにおけるロクロ成形・整形技術の波及イメージ

韓半島一帯で共通性が高かったはずの技術系統に変化が生じるのは６世紀初頭ごろで、百済・栄山江流域でのみロクロ右回転での製作例が急増する。内面中央の静止ナデについては初源が遡る可能性はあるが[(3)]、当該期にその例が増えることは間違いがない。６世紀の開始を前後する時期に５世紀代までにはなかったロクロ使用方法の地域差が生じている点は強調しておく。

（２）韓半島から日本列島へ

日本列島の初期須恵器のうち、とりわけごく初期の段階（TG232 ～ TK73 型式期：４世紀末葉～５世紀初頭）には主に加耶地域の影響が強いとされ､時期が進む（TK216 型式期:５世紀前葉～）につれて百済・栄山江流域の影響も加わると考えられている（酒井 2004 など)。この指摘は、先述の韓半島内部での食器構成の地域差と関連しており、TK216 型式期において須恵器食器の生産主体が高杯主体から蓋杯主体へと変化すること（田辺 1981）に基づいている。一方で、定型化以後（TK208 型式期～：５世紀中葉～）は韓半島からの影響は少ないものと考えられてきた。

しかしながら、近年においては第１章に述べた陶邑編年 MT15 型式期（≒千里１期)、すなわち６世紀初頭前後における須恵器各器種の大型化と栄山江流域の陶質土器各器種の大型化とが連動しているとの見解が提示される（酒井 2013、中久保 2016・2019、我妻 2025b）など、韓半島からの断続的な影響を積極的に見出す立場の研究も増えつつある。また、韓半島でも列島産の須恵器ないし現地で須恵器を模倣した須恵器系土器の出土が相次いでおり、土器組成の一部を占めていたことが判明してきた。以上を受けて、６世紀初頭ごろの千里窯・陶邑窯東半における〔ロクロ右回転＋内面中央静止ナデ〕の採用についても、同様の変化が生じる栄山江流域との双方向的な影響関係に起因していた可能性を考慮すべきだろう。

大型化との関連とその背景　ではなぜ韓半島栄山江流域と列島の千里窯および関連の生産地でさまざまな変化が同調するのか。偶然の一致でないとすれば、どのような背景を想定すべきか。

まず列島側の研究史を振り返ると、６世紀における須恵器の大型化については葬送儀礼の変化との関連が想定されてきた。具体的には畿内型横穴式石室とその内部に須恵器を大量に供献する儀礼の普及（藤原 1985、土生田 1991、岩越 2018 ほか）である。そのなかで６世紀初頭～前葉にかけての供献食器としては多量の蓋杯と少量の無蓋高杯が主体をなすとされる（森本 2012)。

そのうえで、大口径の蓋杯や長脚高杯、その他大型の器形を製作するにあたって、５世紀から６世紀の間にかけてロクロの改良等があったのではないか（白石 2018）との見解に注目したい。実際の発掘調査で古墳時代のロクロが出土した例は現状のところ見当たらないものの、ロクロ右回転化や内面中央静止ナデの採用は大型化に付随する技術改良の一部と考えることができる。特に静止ナデについては、大型の食器を製作する際に生じる内面中央付近のロクロ目の凹凸を解消

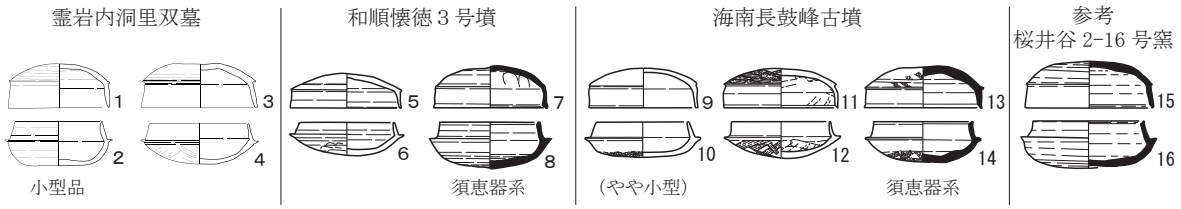


図８　栄山江流域における古墳出土蓋杯のバリエーション（断面黒塗りは須恵器系）

するための調整と考えるのが自然であろう。

当該期を前後して、栄山江流域でも同様に横穴式石室への土器類の供献儀礼が盛行しはじめ、供献食器としては多量の蓋杯（図８）と少量の無蓋高杯が中心をなす。さらに、そのうち蓋杯については須恵器系土器を交えるなど多様性がありながら、全体として大型化を志向する傾向が看取でき（呉 2016、図８）、その他、高杯や器台・瑞にも大型化傾向を認める（中久保 2016、我妻 2025b など）。そして、〔ロクロ右回転＋内面中央静止ナデ〕を製作技法の主体とする。

近年では異論（寺前 2012、北山 2018・2020）があるものの、そもそも埋葬施設内に須恵器を供献する儀礼の普及自体が韓半島の儀礼を倣ったものとする見方が定説である（土生田 1994 ほか）。いわば、①葬送儀礼に供する器種が大型化する、②大型食器を製作するにあたって技法が転換する、といったソフトとハードの両面が列島と韓半島栄山江流域とで共通していたのである。

まさにこの時期に限って栄山江流域に前方後円形の墳墓が築造される点は示唆的である（福永 2007、高田 2012 ほか）。本稿で対象としたなかでは、長鼓峰古墳・新徳古墳は前方後円形であり、その他丁村古墳・懐徳３号墳を合わせた４古墳で倭系（北部九州系）横穴式石室を採用する(4)。双方向的な対外交渉、すなわち人々の往来は確実に存在し、習俗の相互影響とともに、技術者レベルでの交流もあったのだろう。

ここで、千里窯と陶邑窯東半という、古墳時代畿内地域の中核をなす須恵器生産地で技法が大きく変わることの意義が浮かび上がる。新たな葬送儀礼に資する大型の器を生産するにあたって、その儀礼の源流の一つであり、当該期の主要交渉相手でもあった栄山江流域から技術の導入を図った。一連の儀礼変化と新技術の受容が中央政権の膝元で生じたことに、古墳時代における手工業生産技術発展の契機と過程の一端をうかがい知ることができる。

ただし、栄山江流域との技術交流の窓口が伝統的な陶邑窯であったのか、あるいは新興の千里窯であったのか、その両方か(5)。はたまた本稿で言及しえなかった九州地域か。加えて、技術交流を促した政治勢力はいかなるものであったのか。一歩踏み込んで文明・都市・国家の形成上の意義は何か(6)。現時点で明確な答えを出すことは難しい。それでも、千里窯の活発化、ひいては古墳時代の須恵器生産やそのあり方について、東アジアからの広い視野に基づく分析を行うことの重要性を今後も主張する次第である。

おわりに　本稿では中国大陸から韓半島を経由して畿内中枢の須恵器生産地に至る技術の変遷を、ロクロ回転方向と内面中央の調整の２点に絞って概観してきた。当然ながら分析すべき属性・資料は多分に控えている。また、同じ６世紀でも陶邑窯の西半や他の地方窯では栄山江流域以外からの影響があった可能性（入江 2011）なども検討を進める必要があろう。

本稿での結論の当否はともかくも、細部の技法にまで踏み込む日本考古学の土器研究手法（北

野ほか 2002、藤原 2002、岩越 2025a）によってアジアにまで及ぶ地域性を抽出できることは間違いがない。しかしながら、実際に研究のアイデアを中韓両国の研究者に話すと「そこまで細かく見ている人はいない」と言われることが多かった。改めて、有効な考古学的分析手法を見出し発展させた先達に敬意を表し、その普及を図ることを誓って、本稿を綴じたい。

【註】

（1）以下、特段の例を除いて「千里窯」とする。他の生産地についても同様である。

（2）千里窯の操業拡大期（千里 1 期、我妻 2024・2025a）と併行する陶邑田辺編年 MT15 型式期の開始年代については 5 世紀末葉とみる見解（白石 1985、藤野 2009 など）と 6 世紀初頭とみる見解（福永 2018 ほか）がある。筆者は消極的に後者の立場をとりつつも、自然科学分析の解釈にかかわる問題もあるため当否は筆者自身には判断しがたいため、本稿では両論を併記する。

（3）百済・栄山江流域の影響を受けていると考えられる初期須恵器段階（特に TK216 号窯）の蓋杯にも静止ナデ調整が認められるためである。

（4）埋葬施設構造に着目すると、畿内型横穴式石室の源流は百済系（太田 2011 など）との指摘がある一方、上述のように栄山江流域の横穴式石室は列島から北部九州系石室の構築技術が移植されたもの（柳沢 2001）とされている点には留意すべきといえる。翻って、栄山江流域との対外交渉がどのような形で行われていたのかを考えるうえでも細かな技術痕跡から伺うことのできる人の移動の実態を捉えることが重要ではないか。

（5）千里窯西半の桜井谷窯周辺では栄山江流域系の可能性のある浅鉢や提瓶、軟質土馬などが操業拡大（≒ 6 世紀初頭前後）とともに急増する（飯塚・我妻 2025）。また、千里 1 期の桜井谷窯製品には焼成時に藁を挟み込むことによって生じる火襷状痕跡が残る場合が多く、この点も栄山江流域と類似する（酒井 2013）。陶邑窯での分析不足は自覚しつつも、当該期の千里窯が技術交流の一翼を担っていた可能性は十分にあると考えている。

（6）ロクロの使用はゴードン・チャイルドが掲げる古代都市の諸要件（高橋 2014 ほか）のうち「専業工人の存在」の一要素となりうる。

本稿は奈良文化財研究所による中国社会科学院考古研究所との共同研究および日本学術振興会科学研究費：J250107052 の成果の一部である。

【参考文献・図版の出典】

秋山浩三　2006「古墳副葬須恵器の産地推定一例－物集女車塚･井ノ内稲荷塚における微細特徴からの追究－」『陶磁器の社会史：吉岡康暢先生古希記念論集』桂書房

飯塚信幸・我妻佑哉　2025「古墳時代後期の須恵器生産における外来技術受容の一様相－大阪府桜井谷窯跡群およびその周辺地域を中心に－」『大阪府立狭山池博物館研究紀要』15

入江文敏　2011『若狭・越古墳時代の研究』学生社

岩越陽平　2018「6 世紀初頭における地方窯の分布とその背景にかんする考察」『待兼山考古学論集』Ⅲ、大阪大学考古学研究室

岩越陽平　2025「桜井谷窯跡群と陶邑窯跡群」『須恵器の里とよなかの謎に迫る』豊中市立郷土資料館

太田宏明　2011『畿内政権と横穴式石室』学生社

尾野善裕　2019「前近代東アジア窯業技術系統論 ： ロクロの回転方向を視座として」『文化財論叢』Ⅴ　奈良文化財研究所創立 70 周年記念論文集、奈良文化財研究所

海南郡・財団法人馬韓文化研究院　2024『海南　板山里　長鼓峰古墳』

笠井新也　1915a「摂津國桜井谷に於ける古代製陶の遺跡及びその遺物に就いて」『考古学雑誌』第 5 巻第 1 号、日本考古学会

北野博司・畑中英二・浅生卓司・菅原雄一　2002「須恵器の成形におけるロクロ回転」『日本考古学協会第 68 回総会』研究発表要旨、日本考古学協会

北山峰生　2018「近畿－木棺直葬墓の須恵器－」『季刊考古学』第 142 号、雄山閣

北山峰生　2020「横穴式石室定着前後の土器副葬」『横穴式石室の研究』同成社

木下　亘　1982「摂津桜井谷古窯跡群における須恵器編年」『桜井谷窯跡群 2 － 17 号窯』豊中市文化財調査報告第 9 集、少路窯跡遺跡調査団

木下　亘　2005「生産遺跡」『新修豊中市史』第 4 巻、豊中市史編纂委員会

金　鍾萬　2002「百済土器に見られる製作技法－泗沘時代を中心として－」『朝鮮古代研究』第 3 号、朝鮮古代研究刊行会

光州広域市・(財) 大韓文化財研究院　2013『光州　良爪洞　杏林遺跡』Ⅱ

国立光州博物館　2021『咸平　禮徳里　新徳古墳』国立光州博物館学術叢書　第 70 冊
国立羅州文化財研究所　2017『羅州　伏岩里　丁村古墳』
呉　東彈　2016「栄山江流域園盖杯の登場と変遷過程」『韓国考古学報』98、韓国考古学会（韓文）
酒井清治　2004「須恵器のはじまり」『国立歴史民俗博物館研究報告』110
酒井清治　2013『土器からみた古墳時代の日韓交流』同成社
桜井義彰　1916「攝州櫻井谷村古代窯址に就て」『考古学雑誌』第７巻第３号、日本考古学会
白石耕治　2018「近畿－泉北丘陵窯跡群の須恵器生産の転換期－」『季刊考古学』第 142 号、雄山閣
白石太一郎　1985「年代論」『岩波講座　日本考古学』第１巻、岩波書店
陣内高志・岩越陽平・我妻佑哉編　2025『大阪府豊中市　桜井谷窯跡群 2-2 号窯跡・2-16 号窯跡発掘調査報告書』豊中市文化財調査報告第 92 集、豊中市教育委員会
全羅南道文化財団　国家遺産研究所・霊岩郡　2025『霊岩　内洞里　双墓』学術叢書第 16 冊
高田貫太　2012「栄山江流域における前方後円墳築造の歴史的背景」『内外の交流と時代の潮流』古墳時代の研究７、同成社
高田貫太　2019『「異形」の古墳　朝鮮半島の前方後円墳』角川書店
高橋照彦　2014「都市とは何か、それはいつ誕生したか」『考古学研究 60 の論点』考古学研究会
田辺昭三　1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
田辺昭三　1981『須恵器大成』角川書店
田村美沙　2010「千里窯における古墳時代後期の須恵器生産とその供給」『待兼山考古学論集Ⅱ』大阪大学考古学友の会
寺前直人　2012「横穴式石室導入前後における土器組成」『駒沢史学』第 77 号、駒沢史学会
中久保辰夫　2016「古墳時代後半期における土器研究の現状」『土器編年研究の現在と各時代の特質－須恵器生産の成立から終焉までー』考古学研究会関西例会
中久保辰夫　2019「百済・栄山江流域と倭の相互交流とその歴史的役割」『国立歴史民俗博物館研究報告』217
長友朋子　2025『古墳時代の窯と器　東アジア国家形成期の技術交流』
鍋島敏也・藤原 学　1974『千里古窯跡群』藤原童心社
土生田純之　1994「畿内型石室の成立と伝播」『ヤマト王権と交流の諸相』５、名著出版
菱田哲郎　2025「桜井谷窯跡群－須恵器窯跡群研究の原点」『須恵器の里とよなかの謎に迫る　講演会資料』豊中市立郷土資料館
福永伸哉　2007「継体王権と韓半島の前方後円墳－勝福寺古墳築造期の時代背景をめぐってー」『勝福寺古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告　第 4 冊、大阪大学勝福寺古墳発掘調査団
福永伸哉　2015「考古学から見た継体大王の外交戦略」『つどい』第 327 号、豊中歴史同好会
福永伸哉　2018「邪馬台国と纏向遺跡・箸墓古墳」『古墳時代の畿内』講座　畿内の古代学　第Ⅱ巻、雄山閣
藤野一之　2009「Hr-FA の降下年代と須恵器暦年代」『上毛野の考古学』Ⅱ、群馬考古学ネットワーク
藤原　学　1981「須恵器窯跡」『吹田市史』第８巻５章、吹田市
藤原　学　1985「須恵器からみた古墳時代葬制の変遷とその意義」『末永先生米壽記念獻呈記念論文集』乾、奈良県橿原考古学研究所内末永先生米寿記念会
藤原　学　1991「畿内」『土師器と須恵器』古墳時代の研究　第６巻、雄山閣
藤原　学　2002「群集墳と群集窯－八十塚古墳群出土須恵器と周辺の生産地の関連からー」『八十塚古墳群の研究』芦屋市文化財調査報告 33 芦屋市教育委員会・関西大学文学部考古学研究室
森　浩一　1963「飯蛸壺形土器と須恵器生産の問題」『近畿古文化論攷』吉川弘文館
森本　徹　2012「横穴式石室と土器」『菟原Ⅱ』森岡秀人さん還暦記念論文集、菟原刊行会
柳沢一男　2001「全南地方の栄山江型横穴式石室の系譜と前方後円墳」『前方後円墳と古代日韓関係』同成社
我妻佑哉　2024「摂津千里窯跡群における須恵器生産の展開」『古代学研究』第240号、古代学研究会
我妻佑哉　2025a「桜井谷窯跡群2-2号・2-16号窯跡出土須恵器の編年的位置」『大阪府豊中市　桜井谷窯跡群　２－２号窯跡・２－16 号窯跡発掘調査報告書』豊中市文化財調査報告書　第92集、豊中市教育委員会
我妻佑哉　2025b「高坏形器台にみる日韓土器型式変化の連動性」『待兼山考古学論集』Ⅳ、大阪大学考古学研究室
我妻佑哉　2026（予定）「古墳時代後期における須恵器脚付器種の形状差と分布差－「千里系須恵器」の再検討を通してー」『奈文研論叢』第６号、独立行政法人国立文化財機構　奈良文化財研究所
和順郡・（財）大韓文化財研究院　2019『和順　千徳里　懐徳３号墳』

滋賀県内の須恵器生産と鏡山古窯群について

野洲市教育委員会文化財保護課　鈴木茂

① これまでの滋賀県内における須恵器研究

・丸山竜平氏、林純氏、畑中英二氏をはじめとする多くの研究者によるまとめと考察

・近年の資料再整理（鏡山古窯群等）と沢組遺跡（堅田古窯群）の発掘調査・研究

② 滋賀県内における７世紀頃までの須恵器についての考察点（一例）

Ⅰ、滋賀県内における須恵器生産開始前夜について

・岩崎氏の指摘 ← 滋賀県内における初期須恵器を集成し主に肉眼観察による分析。尾張型須恵器を提唱し滋賀県内の初期須恵器多くは陶邑・猿投・近江産であると指摘。（岩崎 1985・1986）

・近藤氏の指摘 ← 岩崎氏の分析に疑問。近江産初期須恵器を完全否定しないものの、近江産といわれる須恵器の多くは陶邑産の可能性が高いことを指摘。（近藤 2000）

・大西氏の指摘 ← 滋賀県内の初期須恵器には一定数の猿投窯須恵器が存在している事を指摘。また消費地での詳細な分析により、須恵器の消費が TK73 型式ではほとんど認められなかったが、TK208 型式（ON46 段階）になると増加し TK23・47 型式ではさらに増加することを明快に指摘。（大西 2015・2016）

以上のことから・・・

Ⅱ、滋賀県内における須恵器生産の開始、展開、地域色について　（註）

・泉古窯　　← 確認されている滋賀県内最古の須恵器窯（TK23・47 型式～MT15 型式）

・堅田古窯群　← 近年の調査（沢組遺跡）により 6 世紀前半頃から須恵器生産していたことが判明。なお下仰木天神山遺跡からは多量の焼台や地域色のある杯が出土。

・鏡山古窯群　← 生産地に近接する古墳より TK23・47 型式頃の須恵器が確認されているが生産開始時期は不明。MT15 型式頃には生産を開始していた可能性が高い。

以上のことから・・・

Ⅲ、鏡山古窯群の特徴と消費地について

・現在の鏡山古窯資料の注意点　←窯址の調査例はほとんどない。

・鏡山古窯の地域色と渡来系要素　←特徴的な技法もつ須恵器と「天日槍伝承」

・鏡山古窯の地域色を持つ須恵器持の展開　←東海・北陸地方との関連性

以上のことから・・・

③ 終わりに

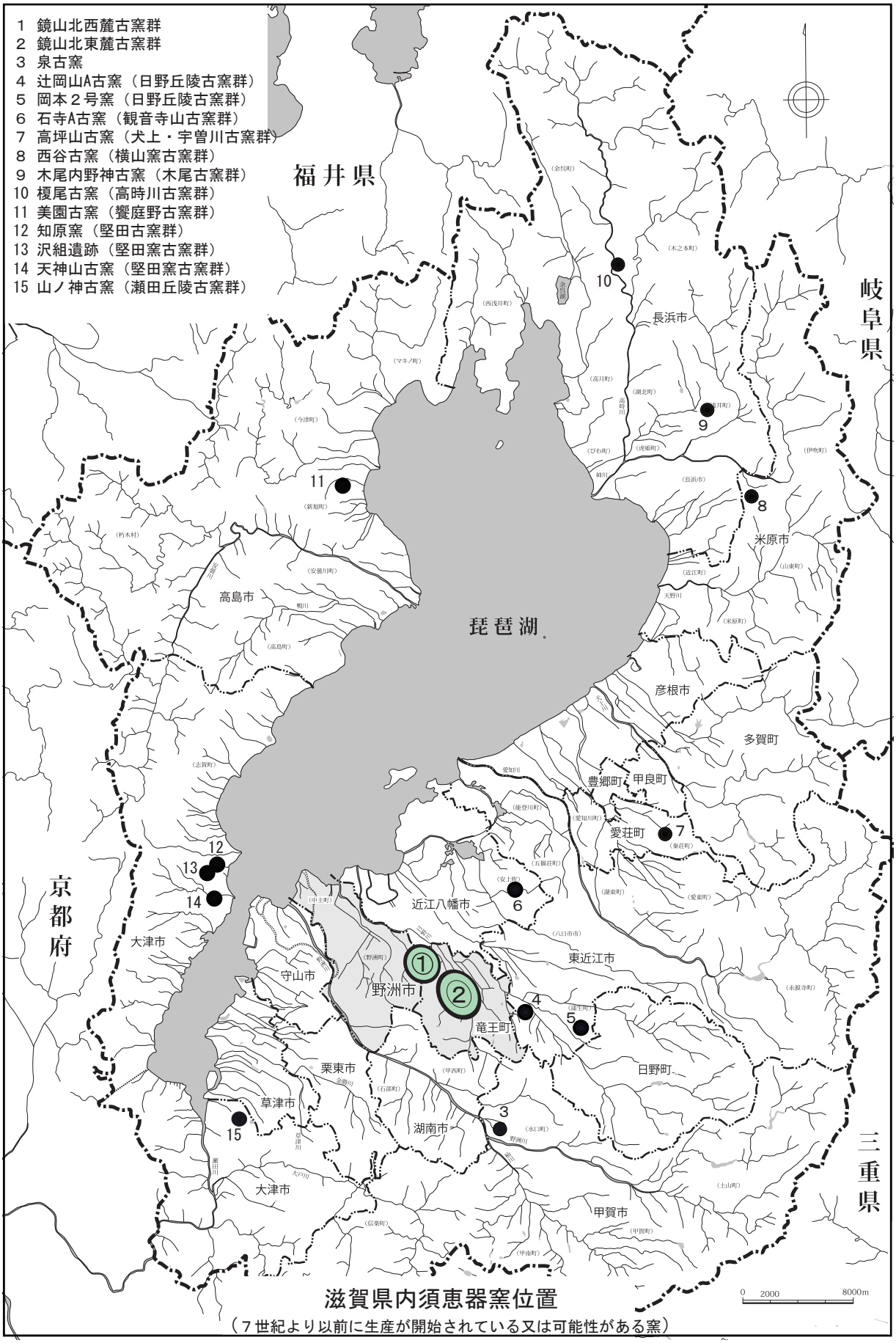
※沢組遺跡に関して山崎公輔氏（大津市）にご教授頂きました。記して感謝申し上げます。

註　掲載図面は各報告書・文献から抜粋して報告書掲載図面を再トレース後にスケールを 1／4 に統一した。

参考文献

岩崎直也 1985「地方窯の上限と系譜をもとめて（Ⅰ）」 『滋賀考古学論叢』2 号　滋賀考古学論叢刊行会

岩崎直也 1986「地方窯の上限と系譜をもとめて（Ⅱ）」 『滋賀考古学論叢』3 号　滋賀考古学論叢刊行会
大西遼 2015「滋賀県長浜市神宮寺遺跡・越前塚遺跡出土の猿投窯系須恵器　古墳時代における広域流通の解明への一資料」『貝塚』71 号　物質文化研究会
大西遼 2016「消費地出土須恵器の分析を通した地域史復元―古墳時代中期の近江湖北地域を事例に―」『古文化談叢』第 77 集　九州古代文化研究会
尾野善裕　2025「美濃丸山古窯跡群考ー天武朝古墳造営論をめぐって－」『学叢』47 号　京都国立博物館
近藤広 2000「近江における初期須恵器の問題―栗東町辻遺跡の初期須恵器を中心に―」『あまのともしび　原口先生古希記念集　』原口正三先生の古希を祝う集い事務局
佐野由美子 2009「鏡山古窯址群の成立と操業集団」『一山典還暦記念論集　考古学と地域文化』一山典還暦記念論集刊行会
鈴木茂　2021「鏡山古窯址群の諸様相について―野洲市所蔵資料の再整理をとおして―」『野洲市歴史民俗博物館研究紀要』25　野洲市歴史民俗博物館
鈴木茂　2022「夕日ヶ丘 21 号墳資料及び夕日ヶ丘古窯 2-2 号資料について　－鏡山古窯址群関連資料の整理－」『野洲市歴史民俗博物館研究紀要』26 号　野洲市歴史民俗博物館
鈴木茂　2025「第 2 章 鏡山古窯址群関連寄贈資料報告及び若干の考察」『令和六年度野洲市文化財調査概要報告書』野洲市教育委員会
林 純 1991「近江における古墳時代須恵器生産の特質」『滋賀考古』6 号
畑中英二 1991「6 世紀と 7 世紀・須恵器生産における質的問題」『滋賀考古』10 号 滋賀考古学研究会
畑中英二 1997「近江」『古代の土器研究－律令的土器様式の西･東５　7 世紀の土器－』 古代の土器研究会第 5 回シンポジウム発表資料集、古代の土器研究会
畑中英二 2002「鏡山古窯址群（夕日ヶ丘遺跡・夕日ヶ丘北遺跡・小山遺跡・大篠原南遺跡・大篠原東古窯址)」『平成 12 年度滋賀県埋蔵文化財調査年報』滋賀県教育委員会
畑中英二 2005「泉古窯における須恵器生産の様相」『ほ場整備関係（経営体育成基盤整備）遺跡発掘調査報告書 32－３ 植遺跡』滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会
畑中英二 2025「鏡山古窯址群と西河原遺跡群　－須恵器生産と地方官衙－」『学究無限　吉岡康暢先生卒寿記念論集』吉岡康暢先生卒寿記念論集刊行会
冨田尚弘 2008 『鏡山古窯址群分布調査報告書』　竜王町教育委員会
丸山竜平 1987『野洲町史　上巻』　野洲町教育委員会
丸山竜平 1987『竜王町史　上巻』　竜王町教育委員会
我妻佑哉　2024「大規模群集墳に対する須恵器の供給とその特質 : 古墳時代後期の近江・美濃地域を対象に」『待兼山論叢. 史学篇』　大阪大学文学会
野洲町立歴史民俗資料館 1999 『須恵器の美と世界 －鏡山古窯址群の時代―』
大津市市民部文化財保護課　2024　『沢組遺跡発掘調査現地説明会資料』
※その他報告書等・参考文献は紙面の都合上割愛しました。ご容赦ください。

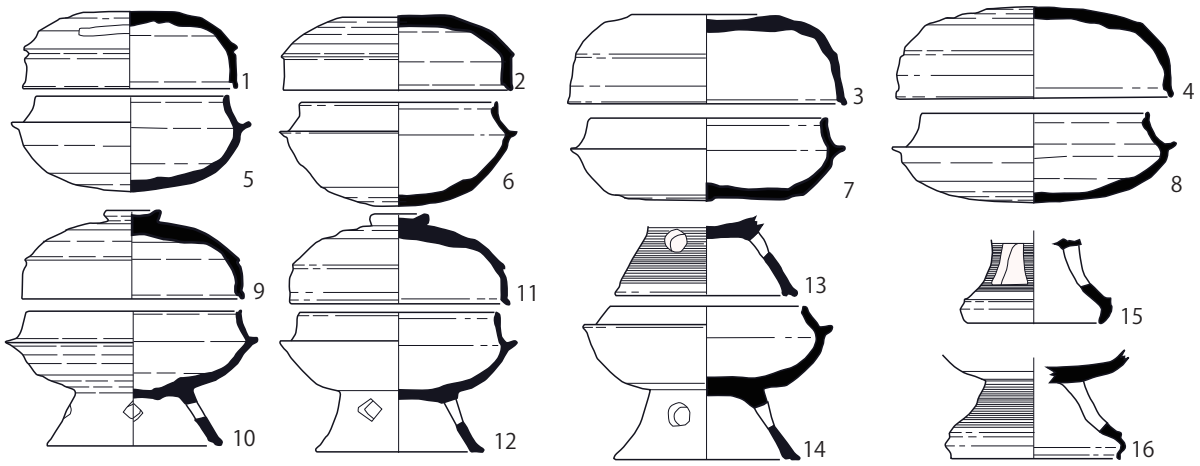


滋賀県内須恵器窯位置

（７世紀より以前に生産が開始されている又は可能性がある窯）

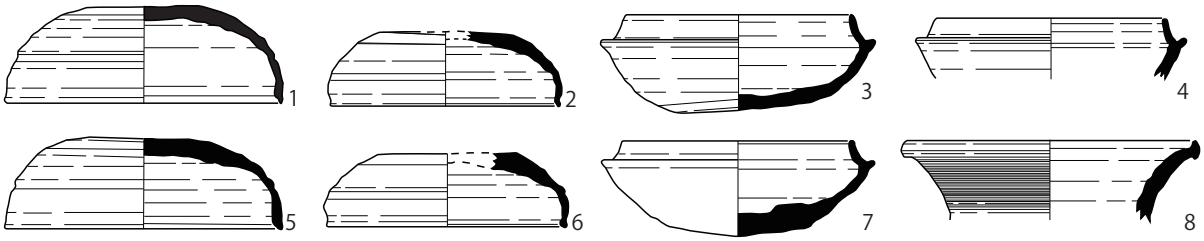


鏡山古窯址群における支群分布図（野洲町歴史民俗博物館1999を一部改変）

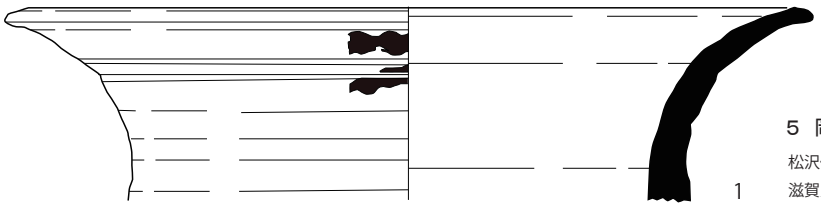


1,2,5,8 ～ 10 （林純 1991）より再トレース
3,4,6,7,11 ～ 16 畑中英二 1995「滋賀県甲賀郡水口町泉古窯採集遺物の検討（前編・中編）」『滋賀文化財だより』№226,227 滋賀県文化財保護協会より再トレース

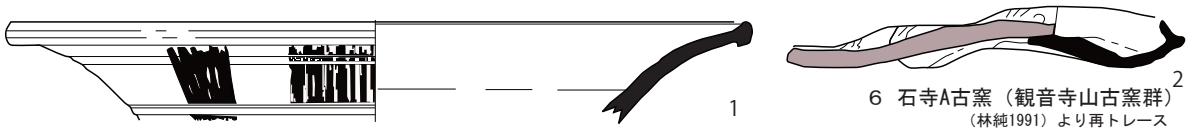
3 泉古窯



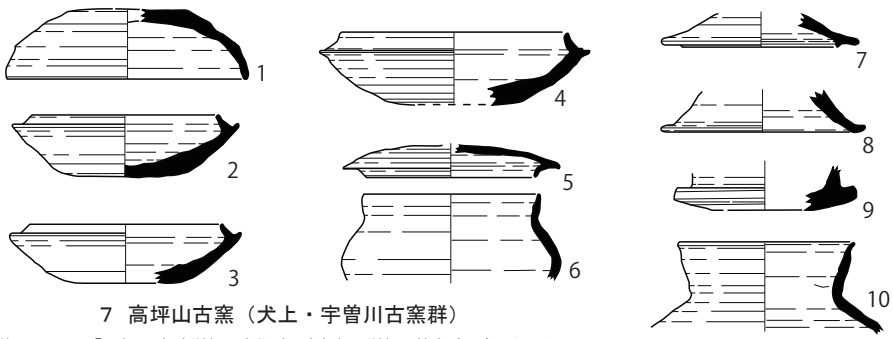
4 辻岡山A古窯（日野丘陵古窯群）　松沢修ほか 1977「昭和 50 年度滋賀県文化財調査年報」滋賀県教育委員会から再トレース



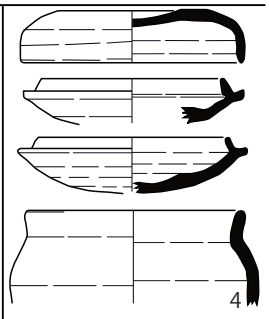
5 岡本２号窯（日野丘陵古窯群）
松沢修ほか 1977「昭和 50 年度滋賀県文化財調査年報」
滋賀県教育委員会から再トレース



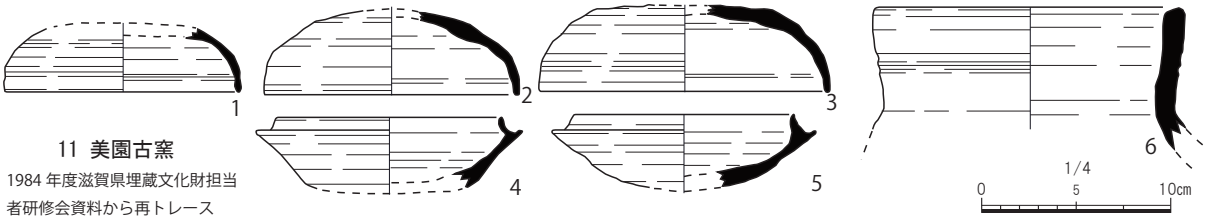
6 石寺A古窯（観音寺山古窯群）
（林純1991）より再トレース



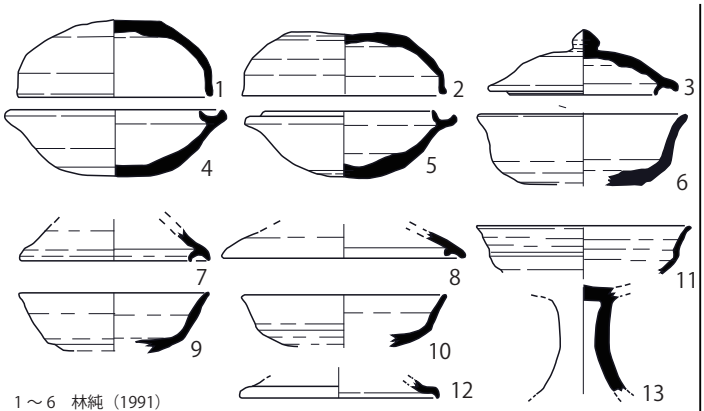
7 高坪山古窯（犬上・宇曽川古窯群）
松沢修ほか 1977「昭和 50 年度滋賀県文化財調査年報」滋賀県教育委員会から再トレース



9 木尾内野神古窯
（林純1991）より再トレース

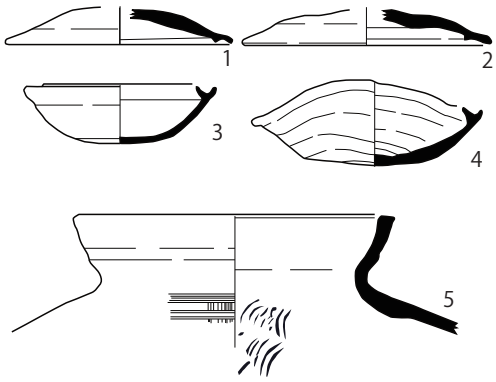


11 美園古窯
1984 年度滋賀県埋蔵文化財担当
者研修会資料から再トレース



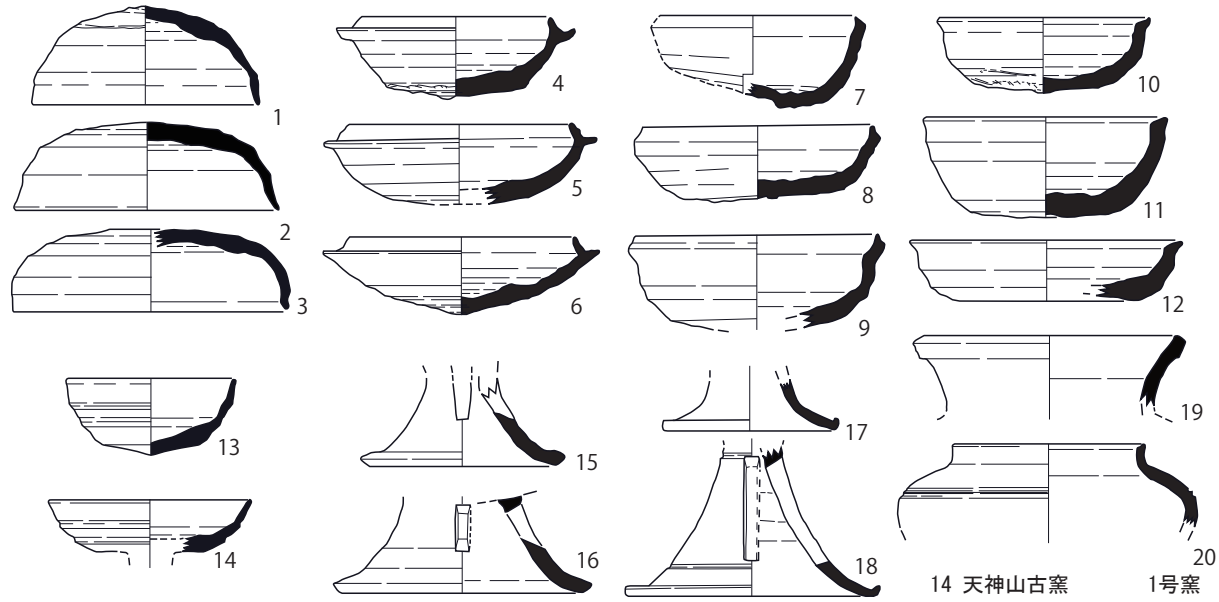
1～6　林純（1991）
7～13 北村圭弘 1992「西谷窯跡の須恵器について」『滋賀文化財だより』16 財団法人滋賀県文化財保護協会から再トレース

8　西谷古窯

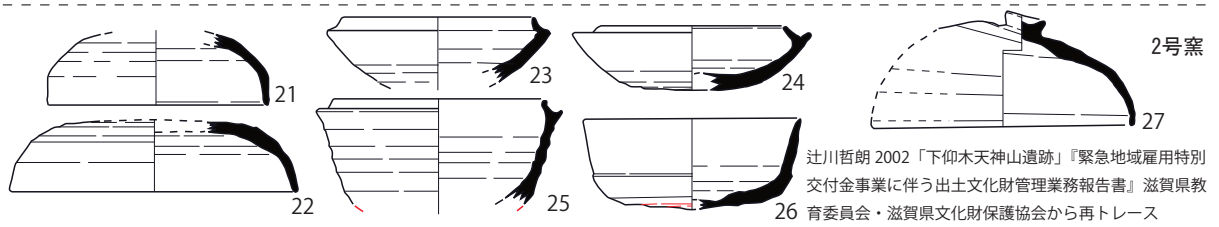


用田政晴 1985『余呉町埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』余呉町教育委員会から再トレース

10　榎尾古窯

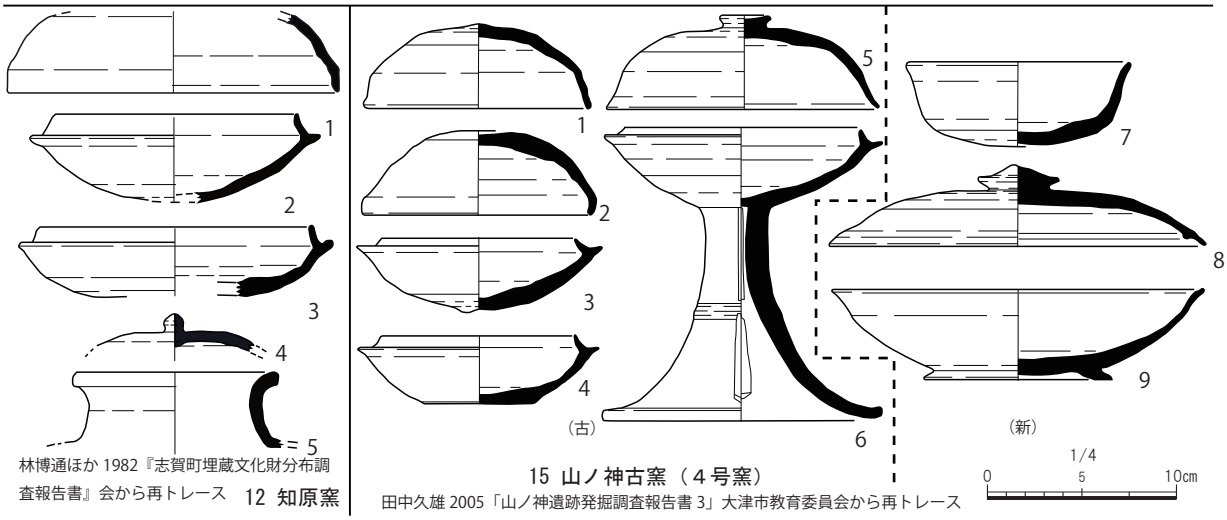


14　天神山古窯　1号窯



辻川哲朗 2002「下仰木天神山遺跡」『緊急地域雇用特別交付金事業に伴う出土文化財管理業務報告書』滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会から再トレース

2号窯

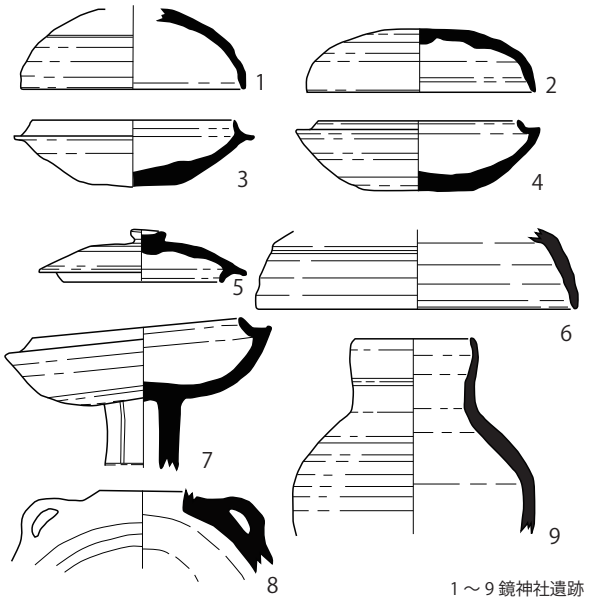


林博通ほか 1982『志賀町埋蔵文化財分布調査報告書』会から再トレース

12　知原窯

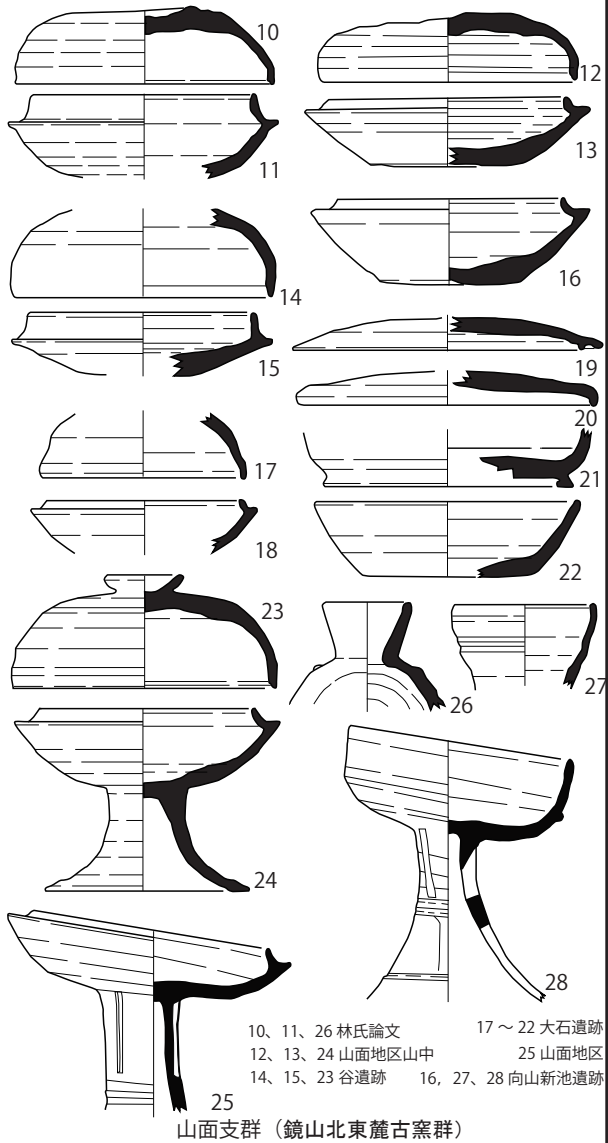
15　山ノ神古窯（４号窯）

田中久雄 2005「山ノ神遺跡発掘調査報告書 3」大津市教育委員会から再トレース



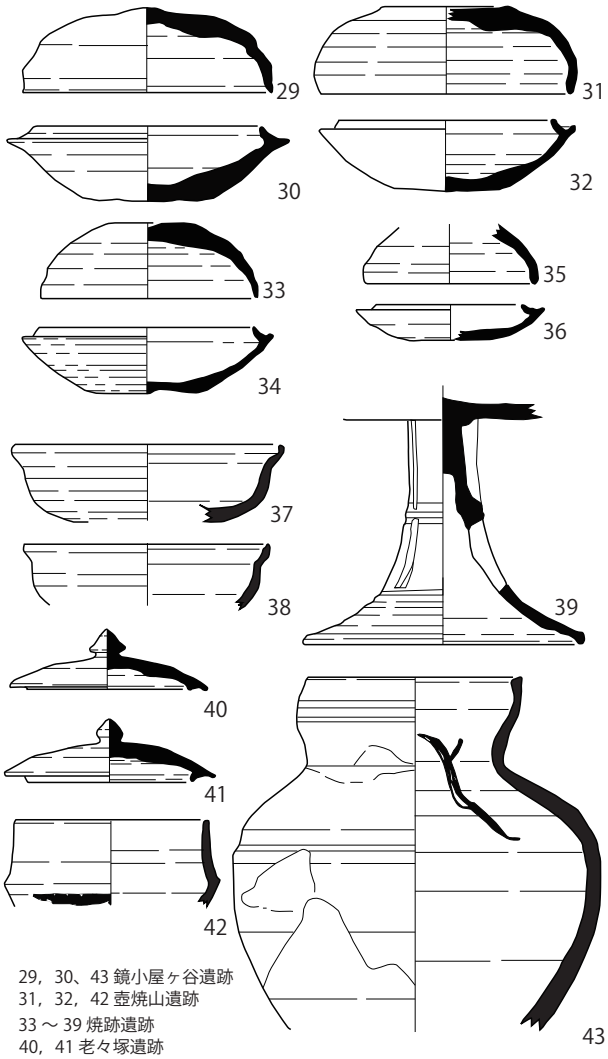
1～9 鏡神社遺跡

鏡神社支群（鏡山北東麓古窯群）



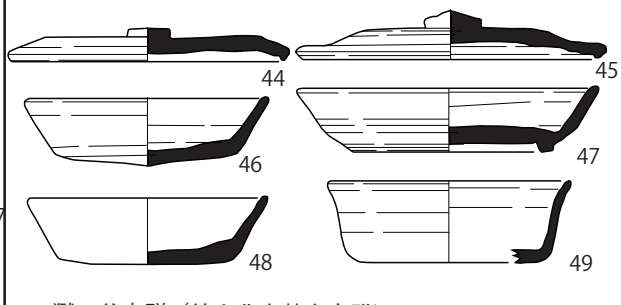
10、11、26 林氏論文
12、13、24 山面地区山中
14、15、23 谷遺跡
16，27、28 向山新池遺跡
17～22 大石遺跡
25 山面地区

山面支群（鏡山北東麓古窯群）



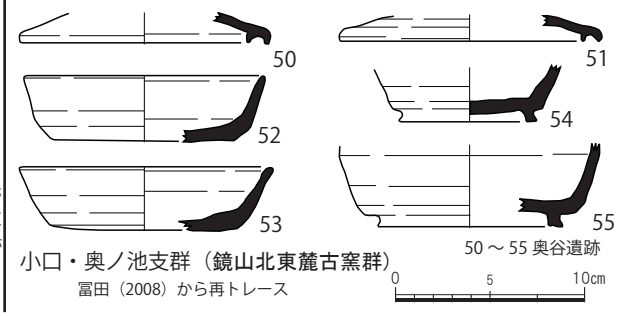
29，30、43 鏡小屋ヶ谷遺跡
31，32，42 壺焼山遺跡
33～39 焼跡遺跡
40，41 老々塚遺跡
※37.38 は上下反転

荒池・大谷支群（鏡山北東麗古窯群）



獄皿谷支群（鏡山北東麓古窯群）

44～49 八重谷遺跡

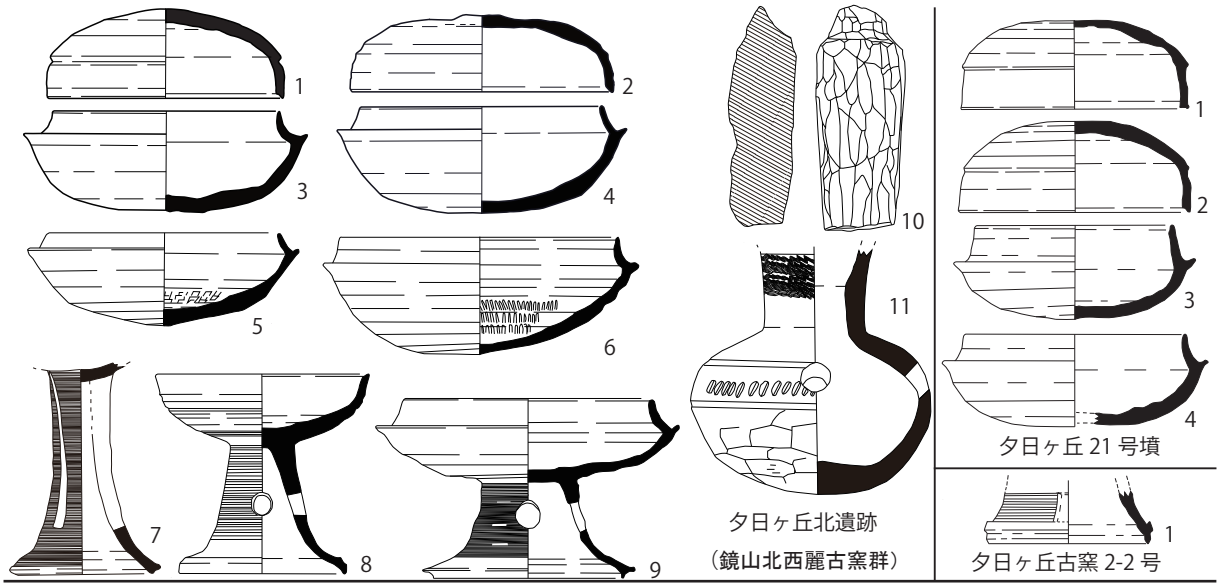


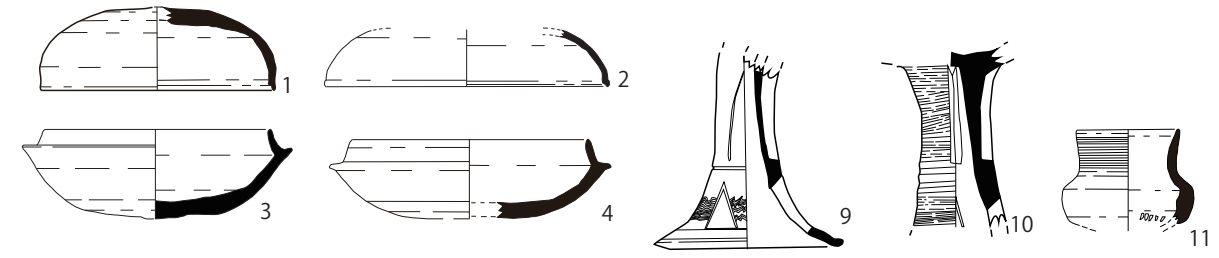
小口・奥ノ池支群（鏡山北東麓古窯群）

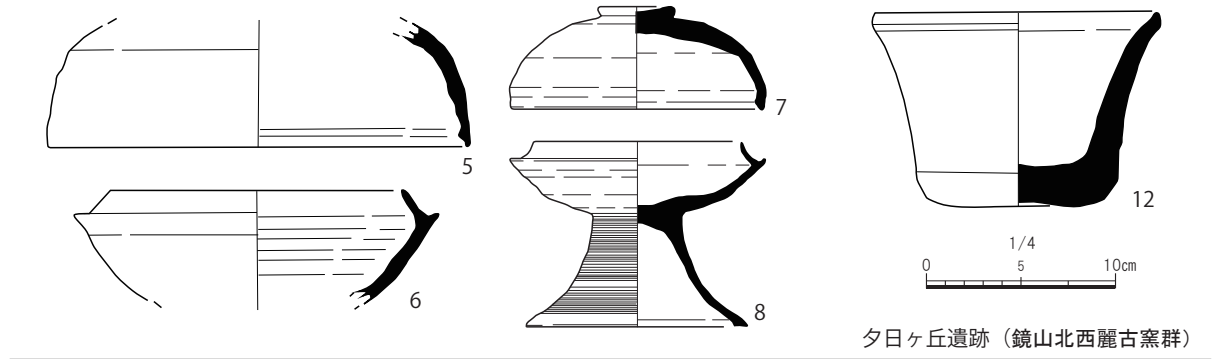
冨田（2008）から再トレース

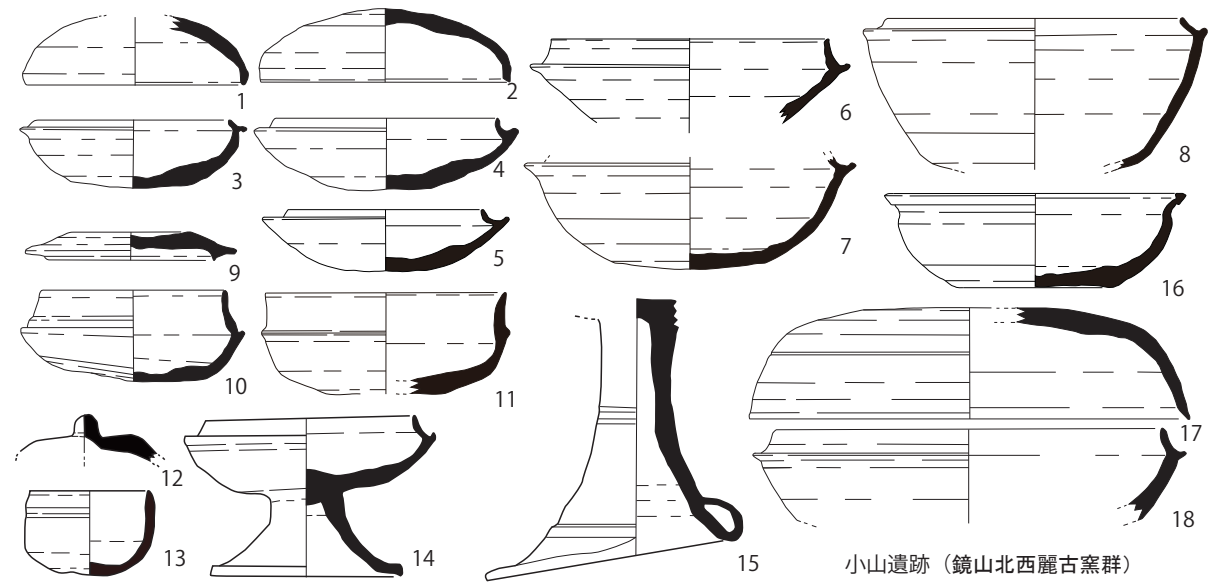
50～55 奥谷遺跡

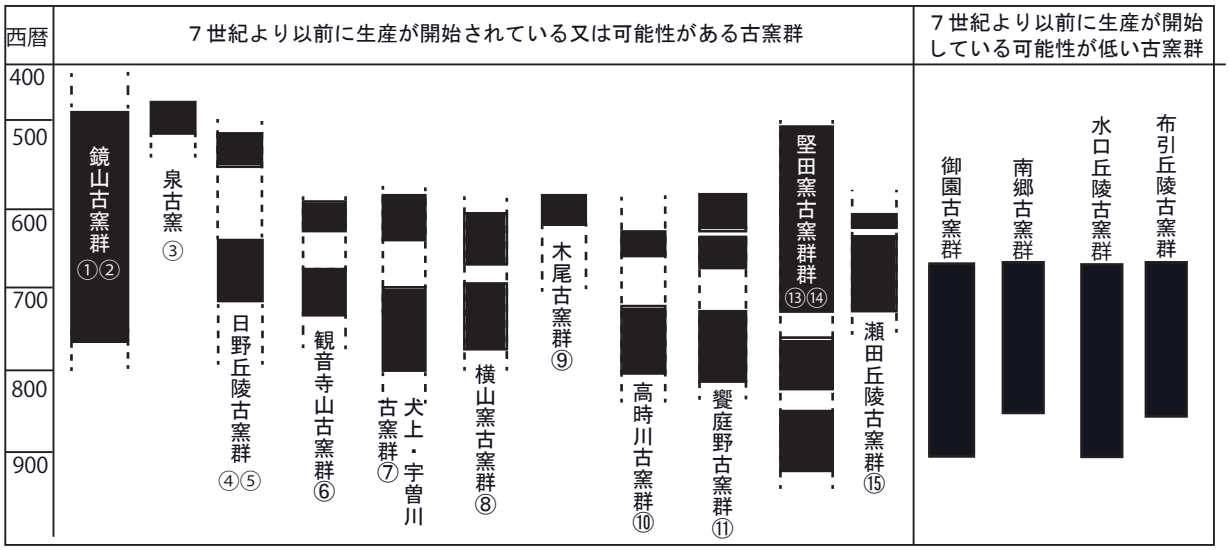
0 5 10cm


夕日ヶ丘北遺跡
（鏡山北西麗古窯群）
夕日ヶ丘 21 号墳
夕日ヶ丘古窯 2-2 号



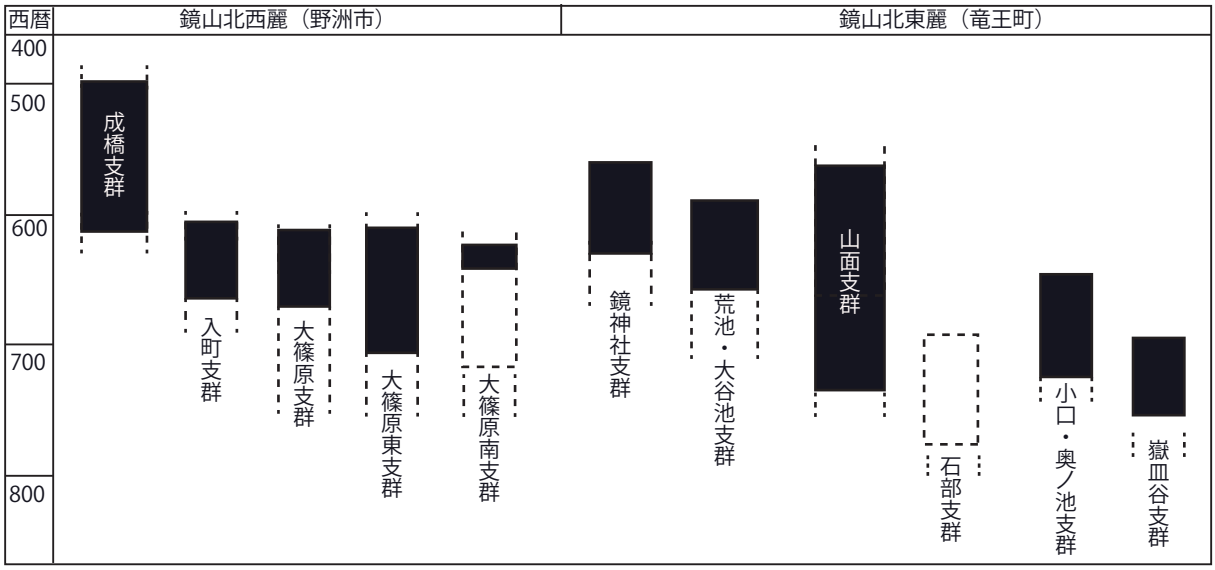

1/4
0 5 10cm
夕日ヶ丘遺跡（鏡山北西麗古窯群）


小山遺跡（鏡山北西麗古窯群）



滋賀県内須恵器古窯群の消長概念図

※牛谷好伸・浜中有紀　2010「第５章　関西」『古代窯業の基礎研究』 窯跡研究会、林純（1991）、畑中（1993・1997）を参考に作成

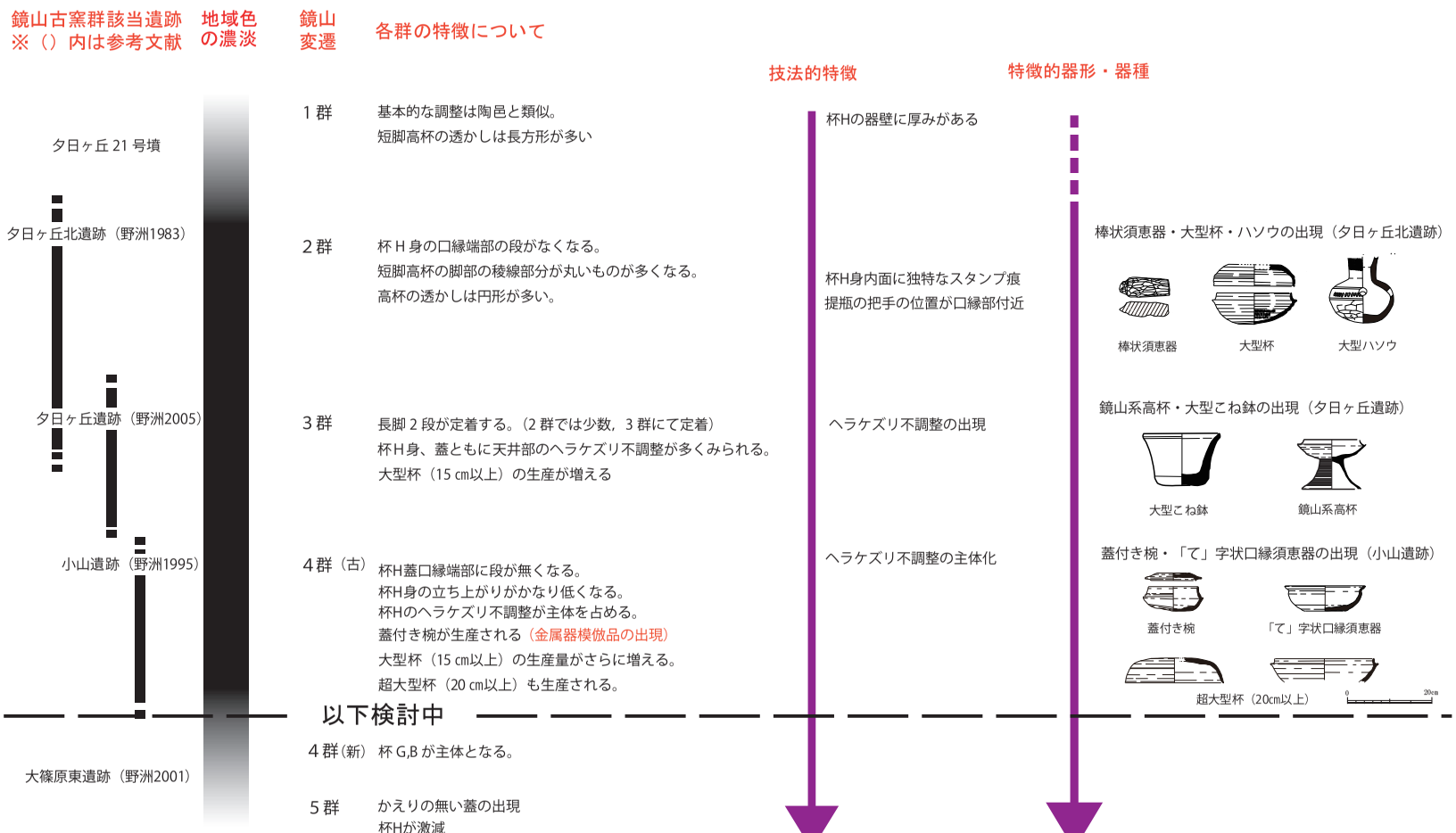


鏡山古窯群各支群の消長概念図（破線は確認されていないが周辺の調査結果等から予想されるもの）

※鏡山北東麗（竜王町）は冨田（2008）を参考に作成

鏡山古窯祉群の資料の特徴

①杯の身蓋ともに、口径に比して器高が深く全体的にずんぐりした形状である（畑中2002）
②杯身の立ち上がり端部は成橋11号窯（6世紀前半頃）において面をもつが、以降は立ち上がり端部を丸く収めるものが主体となる（畑中2002）
③杯蓋の口縁端部の面および稜も沈線化しつつも成橋5号窯（7世紀前半）まで残る。（畑中2002）
④ロクロ回転方向は大篠原窯後第1地点（7世紀中葉頃）に右回転に固定される。（畑中2002）
⑤生産地の原料土は鉄分の含有量が多く、焼き上がりの色調がやや黒味を帯びる傾向を持っている（田辺1981）
⑥夕日ヶ丘北遺跡から、土鈴や棒状須恵器、大型杯等が生産され、その後も小山遺跡などで、て状口縁須恵器、蓋付き椀など特異な器形が生産される（鈴木2021）
⑦陶邑古窯群では杯身の口径の縮小化が進むTK43，TK209型式以後も鏡山古窯群では大型杯が生産されている。なお縮小化の傾向は陶邑古祉窯群と同様である。（鈴木2021）
⑧ヘラケズリ未調整の技法が鏡山古窯群にて杯G,Bが出現する以前からみられる（鈴木2021）
⑨杯身は大型杯以外にも立ち上がりが高いものを生産し続ける（鈴木2022）
⑩杯は身蓋共に器壁が厚いものがみられる（鈴木2022）
⑪夕日ヶ丘遺北跡出土ハソウなど杯以外にも大型の器形がみられる（鈴木2021）
⑫須恵器蓋坏が口径に対して器高が高い深手の形態を示すこと（我妻2024）※①と関連
⑬全体的に細部の形状が鈍く坏蓋肩部の稜や坏身の口縁端部の段が早くに失われること（我妻2024）※②と関連
⑭陶邑窯谷山池地区を除く大部分でロクロ右回転による製作が行われていた畿内の生産地に対して、ロクロ左回転での製作が主流であったほか、蓋坏外面に回転ヘラケズリをほとんど施さない個体も散見されること（我妻2024）※④、⑧と関連
⑮鏡山系高杯など独自器種を生産していたこと（我妻2024）※⑥と関連



参考報告書
野洲町教育委員会『昭和57年度三堂・野々宮遺跡他発掘調査報告書』野洲町教育委員会　1983
野洲町教育委員会『平成6年度野洲町内発掘調査概要』野洲町教育委員会　1995
野洲町教育委員会『大篠原東遺跡発掘調査概要報告 II』野洲町教育委員会　2001
野洲市教育委員会『1996年　埋蔵文化財調査年報』野洲市教育委員会　2005

鏡山古窯址群（北西麗）の変遷イメージ図（野洲市2025を一部加筆改変）

平安時代の播磨の須恵器窯について
―研究の現状と課題―

兵庫県教育委員会
稲本悠一

はじめに

播磨(現兵庫県南西部)は、古墳時代中期以降、中世まで須恵器の生産が連綿と続いた地域である。須恵器の様相・変化を通時代的に検討できることに加えて、古代の播磨国が『延喜式』に記された須恵器の調納国であったこと、中世には東播磨（以下、「東播」という場合もある）で生産された、東播系須恵器[1)]が西日本を中心に全国に流通したことなども特筆され、当該地域の研究は単なる地方窯の研究に留まらず、列島の社会史や流通史等にも裨益する可能性を有する。

本報告では、これらの特徴を有する播磨の須恵器窯のうち、報告者が研究対象とする平安時代以降の須恵器窯（特に神出窯、相生・龍野窯）について、研究の現状と課題を報告する。

１．平安時代以降の播磨の須恵器窯（図１）

東播磨　志方窯跡群（加古川市・加西市)、神出窯跡群（神戸市西区)、三木窯跡群（三木市)、魚住窯跡群（明石市）が代表的な須恵器窯跡群である。時期及び窯の基数は下記の通りである。

志方窯跡群：８世紀前半～10 世紀中葉、約 150 基の窯跡（兵庫県教育委員会 2001 ほか)

神出窯跡群：10 世紀前葉～14 世紀？、約 90 基の窯跡と 10 箇所以上の灰原（森内 2015 ほか)

三木窯跡群：11 世紀後半～13 世紀前半、約 60 基（谷本 2023 ほか)

魚住窯跡群：12 世紀代２四半期～15 世紀前半、約 50 基（森内・池田 2010 ほか)

これらは操業期間の一部が重なるものの、生産のピークには差異が認められ、あたかも役割を交代するかのように、内陸から瀬戸内沿岸部へと展開していった。また、神出、三木、魚住の東播窯では、11 世紀後半～13 世紀前後の間に瓦も生産され、その製品が近隣だけでなく大和の興福寺、平安京とその周辺にまで供給されたことが知られる（上原 1978・森内 2024)。

西播磨　相生・龍野窯跡群（相生市・たつの市）が知られ、古墳時代後期から平安時代末（12 世後葉）までの窯跡、約 130 基が確認されている。東播磨同様に、11 世紀後半～12 世紀中葉には瓦生産が確認できる（稲本 2024 ほか)。

２．神出窯跡群（東播磨）の研究現状

（１）編年研究

神出窯を含む、東播系須恵器の研究史については、佐藤亜聖氏の詳細な整理がある（佐藤 2016・2022)。詳細はそちらに譲り、ここでは神出窯の編年研究の概要を紹介する。

神出窯の編年研究は 1970 年代に端を発する。1980 年代には、調査事例の増加に伴い、生産地および消費地双方での研究が飛躍的に進展した。この時期の編年案はいずれも、片口鉢を対象としたものであった。

そのような中、一つの到達点と評価されるのが森田稔氏の研究である。森田氏は、神出窯が連

綿と続く須恵器生産の系譜上にあることを重視し、供膳具、すなわち椀の変化を軸に編年を構築した。そして、椀との供伴関係に基づき片口鉢の変化を検討し、さらに平安京や経塚から出土した資料を用いて各段階の歴年代の比定を行った（森田 1986・図５）。その後、若干の修正は加えられたものの（森田 1995）、森田編年は時期区分が理解しやすく、年代比定も明瞭であったため、現在も兵庫県域の遺跡から出土した遺物の年代比定に用いられることもある。

一方、神出窯の生産開始期、すなわち東播系須恵器の成立時期については、釜ノ口５号窯の資料を最初期のものとして、11 世紀代とみる見解が通説化していたものの、その成立過程については不明瞭であった。東播磨およびその周辺地域には、古代以来の須恵器生産地である志方窯跡群などが知られていたが、これらと神出窯との関係も十分に検討されてこなかった（図２～４）[2)]。

鴨谷支群の調査　2002 年に実施された神出窯鴨谷支群・鼻谷支群の発掘調査では、10 世紀代とみられる窯跡が確認され、神出窯の生産開始時期が 10 世紀代にまで遡ることなどが明らかになった（兵庫県教育委員会 2011）。東播系須恵器の成立過程を検討する上で重要な調査成果であり、この成果は播磨諸窯の総括的な整理（片山 2009）や神出窯編年の再検討（森内 2015）へとつながった。

近年の研究動向　近年では、片口鉢の詳細な型式分類に基づく研究（松本 2012、日本中世土器研究会編 2013・2014・2015、森内 2015、佐藤 2022 ほか）に明らかなように、「東播系須恵器」と一括りにされてきたことで、等閑視されてきたきらいのある各窯跡群の地域性あるいは資料の多様性を意識した研究が展開している。

（２）編年

神出窯の資料を包括的に扱った編年研究として森内秀造氏の成果がある（森内 2015、図６）。同氏の研究は出土遺物の分析に加えて、窯体の規模や構造の変化にも着目しており、生産地の大局的な動向を重視したものと評価できる。

Ａ期　雑器生産期：10 世紀前葉～中葉

神出窯の生産開始期。瓷器系の輪高台椀（底部ヘラ切り）や輪高台の鉢Ｄなど、雑器を播磨特有の地上式窯体で生産する段階。この段階の甕は小型品。

Ｂ期　大甕生産期：10 世紀中葉～11 世紀第４四半期

大甕の生産が開始され、窯体規模が大型化（全長 10m以上、焼成部幅 2.5～3.0m）する段階。

Ｂ期の最古段階の鴨谷３－２号窯（10 世紀中葉～後葉）では、神出窯に特徴的な沈線椀が登場し、鉢Ｄは底部が輪高台のものから糸切り高台のものに変化する。

続く鴨谷２号窯（10 世紀後葉～11 世紀）は輪高台の椀が減少し、平高台の椀が主体となる。また、ヘラ切りの杯Ａの消失、小皿や東播系片口鉢の初現形態（外反口縁）の出現に加え、主体ではないものの瓦が生産されるなど、大きな変化がみられる。

そして、釜ノ口５号窯以降（11 世紀後半）は、一般的に東播系須恵器片口鉢と認識されている形態（口縁部非外反・体部直線的）が出現する。

Ｂ期で特に注目すべきは、「□殿御料」（鴨谷３－２号窯）や「王作上宮御料」（鴨谷２号窯）の刻書を有する甕である。特注品とみられるこれらは、中央貴族と神出窯との結びつきを示しており（森内 2015 ほか）、そこには播磨国司の介在も想定され、この延長線上に興福寺や法勝寺所用瓦の生産があるとする（森内 2024）。

Ｃ期　片口鉢・瓦生産：12 世紀～13 世紀初頭

大甕の生産が終了し、片口鉢と瓦が生産の主体の段階。窯体も縮小化。外反口縁の片口鉢がなくなる。椀については、12 世紀前半は前代の製作技法を踏襲するが、12Ｃ後半以降は製作技法（円盤底部の側面から体部を立ち上げる）が変化し、直線的かつ浅い器形となる。

Ｄ期（衰退期）：13 世紀後半～14 世紀？

調査例がほとんどなく不明瞭。小型窯で在地向けの雑器の生産を行っていたとみられる。

３．相生・龍野窯跡群（西播磨）の研究現状

（１）編年研究

個別の資料報告などは古くからあったが、体系的な研究が進められたのは 1980 年代以降であり、森内氏による研究が相生・龍野窯跡群の研究の基礎となっている。編年、生産体制などの議論（森内 1983）を皮切りに、以降、新出の資料を踏まえて編年を修正しつつ、経営主体や歴史的意義の検討を深めた（森内 1986 ほか）。

1990 年代以降は、資料数の増加に伴う再検討が進んだ。西播磨の生産地および消費地を対象とした研究（池田 2003 ほか）に加え、播磨一国を視野に入れた編年も提示された（片山 2009）。

近年では、竹原１号窯・９号窯の報告書が刊行され、その中で山田清朝氏は備前市伊部の医王山東麓窯跡群２号窯と製品が酷似する点を指摘し、西播磨から備前にかけての地域が技術を共有する一つの生産圏であったとした（山田 2022）。報告者もこの調査成果を踏まえた編年の再検討を行っている（稲本 2024）。

（２）編年

ここでは、報告者の編年（稲本 2024）の概要を紹介する（図８・９）。

Ⅰ期：８世紀前半～９世紀前葉

つまみを有する杯蓋（蓋Ａ）が生産される時期。杯Ａ・杯Ｂ・蓋Ａが主要器種で、揖西・光明山・西後明地区に窯が展開。杯蓋の様相などから３期に細分できる。

Ⅱ期：９世紀前葉～９世紀葉

つまみのない杯蓋（蓋Ｃ）が生産される時期。杯Ａ・杯Ｂ・蓋Ｃが主要器種で、西後明・入野地区に窯が展開。供膳具の様相から２期に細分できる。

Ⅲ期：10 世紀前半～11 世紀前半（最盛期）

杯蓋・杯Ｂ・椀Ａが消失し、椀Ｂが主流となる時期。器種数も最も多い。おもに入野地区に窯が展開。椀の口径、椀と杯の比率、その他の器種構成から３期に細分できる。

Ⅳ期：11 世紀後半～12 世紀後葉

杯Ａが消失し、椀を主体に、小椀・小皿・鉢などが生産される時期。中世的な器種構成で、光明山・揖西・那波野地区に窯が展開。主に供膳具の様相から３期に細分できる。ⅣＡ期とⅣＢ期の窯には瓦を生産するものが存在する。

中世的な器種構成となるものの、神出窯とは異なって、①器形別分業生産、②甕・壺・片口鉢の基本３種への集約（地域により椀を併焼）といった中世窯業の特色（楢崎 1965・吉岡 1994）は認められず、供膳具主体の生産方針を取り続け、独自に中世窯業へは転換しなかったといえる。

４．流通に関する研究現状

基本的に 12 世紀前半までの播磨産須恵器は、突帯双耳壺、経塚に使用された壺や甕、風字硯など遠隔地でわずかに出土することはあるものの、生産地周辺での消費（狭域流通）が主であったとみられる（佐藤 2016・2022、稲本 2025、中谷 2025 ほか）。ただし、甕については、先に述べたように特注品として平安京などにもたらされた可能性を否定することはできない。

このような流通状況が大きく変化するのが、日本中世土器研究会及び佐藤亜聖氏の研究によって指摘された 12 世紀後半である（佐藤 2016）。これ以降、東播系須恵器の片口鉢が西日本を中心とする広範な地域で確認されるようになる。東播系須恵器の広域流通の背景としては、「西日本全域における流通経済の構造的変化」や「平氏政権による外洋航路と瀬戸内航路の接続」（佐藤 2016：110 頁）といった要因が示唆されている。

おわりにー今後の課題と展望ー

本報告では、大雑把な内容であったが、神出窯および相生・龍野窯跡群の研究現状を紹介してきた。最後に、報告者が考える課題として以下の諸点を挙げ、今後の展望としたい。

①編年の再検討および器種構成変化の背景

②生産の契機および生産終了後の動向

③各窯の生産主体（生産体制）の解明

④瓦陶兼業窯の実態（瓦工人と須恵器工人の存在形態）

いずれも、一朝一夕に解決しうるものではないが、今後、多様な研究者による多角的な視点に基づく研究が展開されることで、播磨地域における須恵器生産の実態とその歴史的意義が、より立体的に明らかになることを期待したい。

【註】

1）森内秀造氏・池田征弘氏は、「還元焔焼成された須恵質の片口鉢や甕の生産を主体とする平安後期以降の東播磨地域の神出・三木・魚住窯の３窯跡群を中心とした窯跡群」を「東播窯」として整理し、これら「東播窯」において生産された製品を「東播産須恵器」と定義づけた（森内・池田 2010：421 頁）。佐藤亜聖氏は、この整理を参照し、「東播産須恵器」を含め、その系譜にある製品を一括して「東播系須恵器」としている（佐藤 2022）。

2）志方窯跡群の終焉想定時期は、各論者によって大きく異なる。例えば、森田氏は神出窯との接続を意識してか、10 世紀初頭～11 世紀中葉としたが（森田 1986）、森内氏の見解（兵庫県教育委員会 2001）をはじめ、11 世紀まで下るとみる研究はほとんど存在しない。

【主要参考文献】（◀ を付した文献は播磨の須恵器窯を知りたい方にオススメのもの）

・池田征弘 2003「第４章 調査の成果」『緑ヶ丘窯址群Ⅲ』兵庫県教育委員会

・稲本悠一 2024「西播磨における須恵器生産の展開と変容ー編年の再検討を中心にー」『中近世土器の基礎研究 31』、日本中世土器研究会

・稲本悠一 2025「突帯双耳壺の生産・流通からみた平安時代前・中期の播磨諸窯の特質」『ヒストリア』第 313 号、大阪歴史学会

・上原真人 1978「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』13・14 合併号、(財)元興寺文化財研究所
・荻野繁春 1985「西日本における中世須恵器系陶器の生産資料と編年」『福井考古学会会誌』第３号、福井考古学会
・神戸市教育委員会 2018『神出窯跡群発掘調査報告書』
・佐藤亜聖 2016「東播系須恵器編年研究の現状」『土器編年研究の現在と各時代の特質－須恵器生産の成立から終焉まで－』考古学研究会関西例会 ◄
・佐藤亜聖 2022「東播系須恵器」『新版　概説　中世の土器・陶磁器』真陽社 ◄
・谷本峻也 2023「三木窯跡群における東播系須恵器の分類と編年」『市史研究みき』第８号、三木市教育委員会
・中谷俊哉 2025「風字硯からみた平安時代須恵器の生産と供給－丹波篠窯と播磨諸窯の検討を中心に－」『ヒストリア』第 313 号、大阪歴史学会
・楢崎彰一 1965「古代末期の窯業生産」日本史研究会編『日本史研究』79
・日本中世土器研究会編 2013『第 32 回　中世土器研究会　東播系須恵器－編年と分布から考える－』
・日本中世土器研究会編 2014『第 33 回　中世土器研究会　東播系須恵器（２）－編年と分布から考える－』
・日本中世土器研究会編 2015『中近世土器の基礎研究 26』(東播系須恵器－編年と分布から考える－)、真陽社
・兵庫県教育委員会 1998『神出窯跡群』
・兵庫県教育委員会 2000『志方窯跡群Ⅰ－中谷支群－』
・兵庫県教育委員会 2001『志方窯跡群Ⅱ－投松支群－』
・兵庫県教育委員会 2011『神出窯跡群Ⅲ－神出鴨谷１号窯～３号窯・神出鳧谷１号窯－』◄
・松本彩　2012「11 世紀～13 世紀における播磨の須恵器鉢の生産について－」『中近世土器の基礎研究 24』、日本中世土器研究会
・森内秀造 1983「兵庫県相生古窯址群について」『日本史論叢』第 10 輯、日本史論叢会
・森内秀造 1986「平安時代の窯業生産－播磨地方の須恵器生産を中心に－」『歴史における政治と民衆』日本史論叢会 ◄
・森内秀造 2015「神出窯須恵器の生産地編年の再検討に向けて」『中近世土器の基礎研究 26』、日本中世土器研究会
・森内秀造 2024「播磨における院政期の瓦生産体制と瓦窯構造」窯跡研究会編『瓦窯の構造研究』真陽社
・森内秀造・池田征弘 2010「東播窯　神出窯　三木窯　魚住窯」『古陶の譜　中世のやきもの－六古窯とその周辺－』MIHO MUSEUM 茨城県陶芸美術館 愛知県陶磁資料館 福井県陶芸館 山口県立萩美術館・浦上記念館 ◄
・森田稔 1986「東播系中世須恵器生産の成立と展開－神出窯跡群を中心に－」『神戸市立博物館研究紀要』第３号、神戸市立博物館 ◄
・森田稔 1995「中世須恵器」中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社
・吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

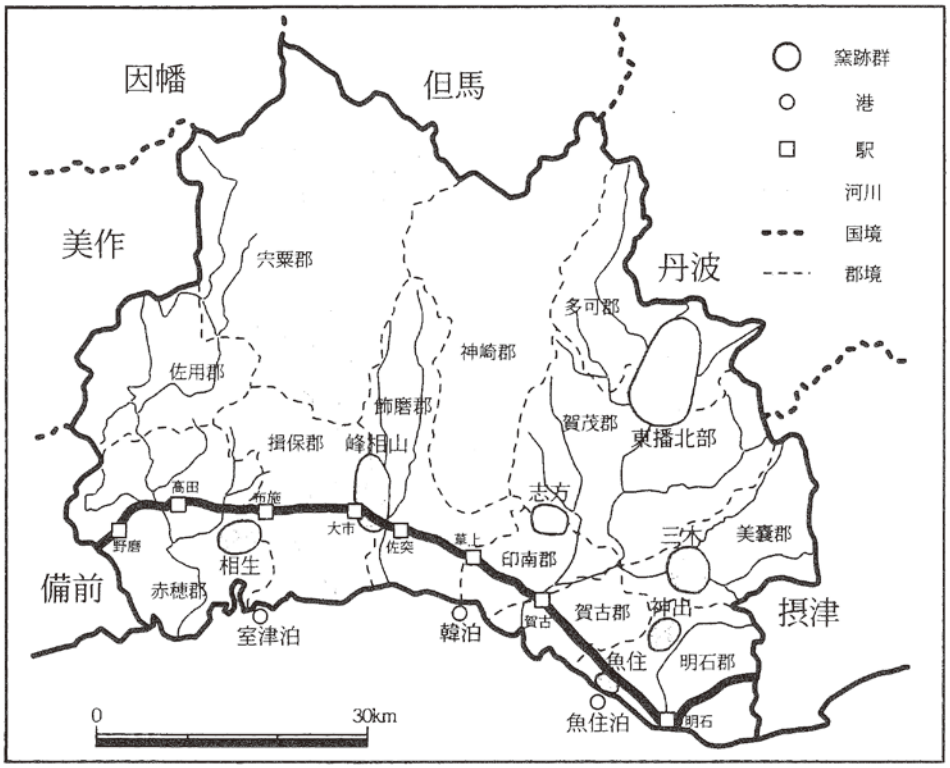


図１　平安時代における播磨諸窯の分布図（片山 2009）

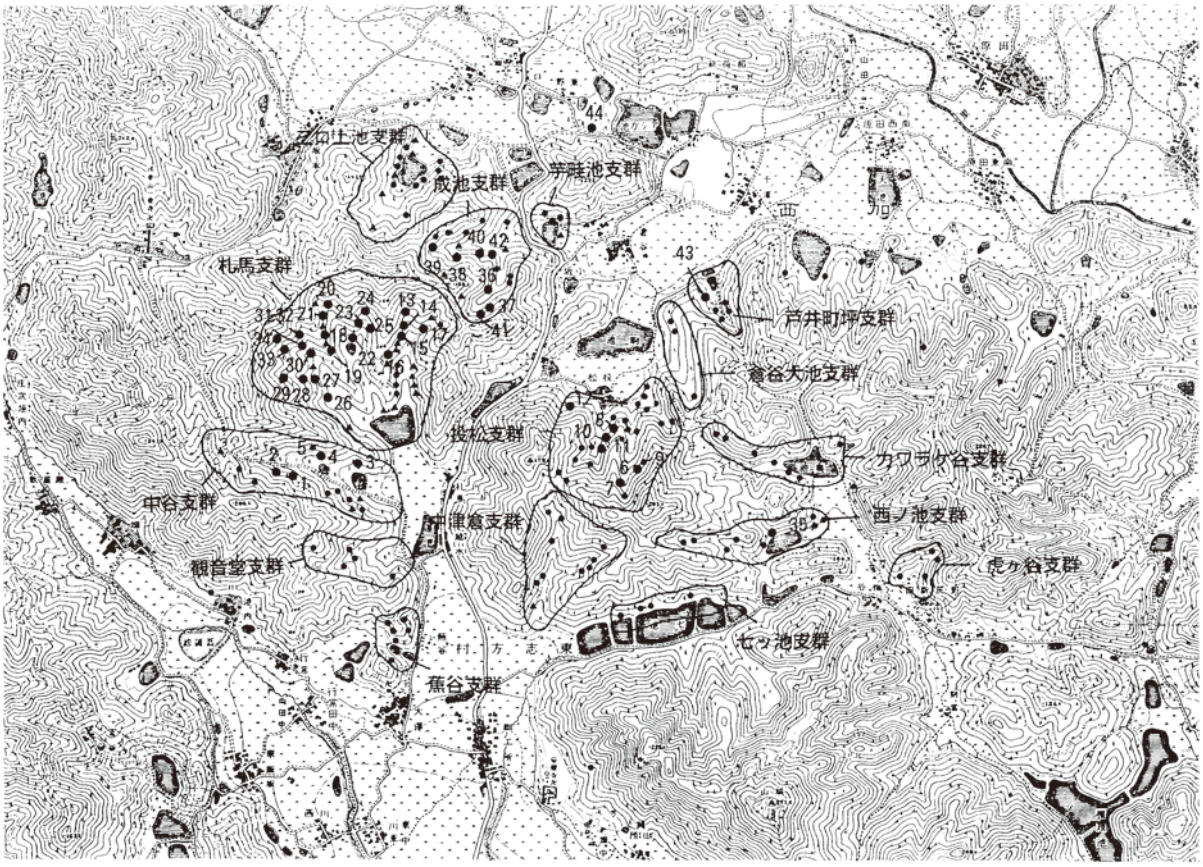


図２　東播磨・志方窯跡群（７世紀後葉～ 10 世紀中葉）分布図（兵庫県教育委員会 2001）

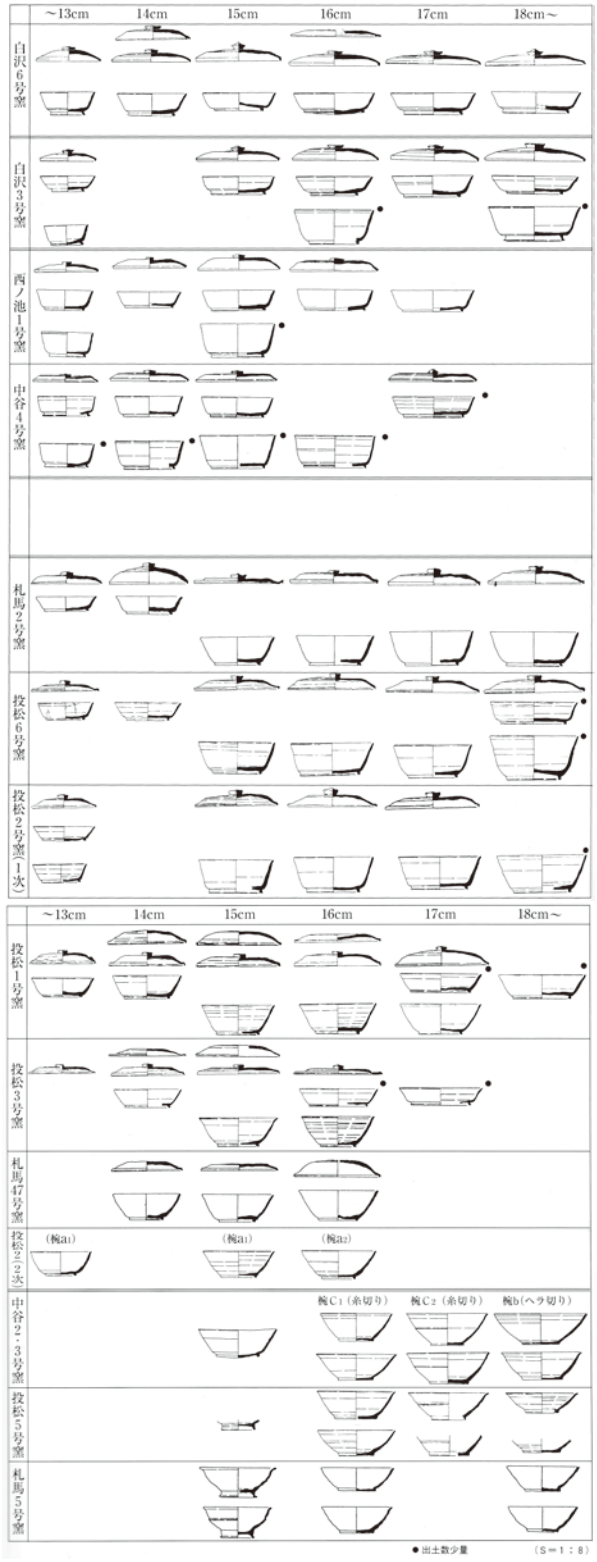


図３　東播磨・志方窯跡群の供膳具の変遷
（兵庫県教育委員会 2001）（S＝1/16）

期	平城宮・平安京編年	窯　跡	札馬編年		備　考
A	平城宮Ⅰ	白沢3号窯・白沢5号窯	札馬支群		
B	平城宮Ⅱ	西ノ池1号窯			
	平城宮Ⅲ古	中谷4号窯			
	平城宮Ⅲ中 / 平城宮Ⅵ	(該当なし)			
C'		(札馬2号窯)	2号窯	Ⅰ型式	
C	平城宮Ⅴ 平城宮Ⅵ	投松6号窯 投松2号窯(第1次) 中谷1号窯 投松7号窯	36号窯 22号窯 41号窯		
D	平安京Ⅰ新 (平城宮Ⅶ)	投松1号窯 投松3号窯		Ⅱ型式	杯B蓋つまみ残
			1号窯・23号窯 25号窯　30号窯 33号窯　44－Ⅰ号窯 47号窯　7－Ⅱ号窯		杯B蓋つまみ消失
		投松2号窯(第2次)	50号窯		杯B蓋消失
E	平安京Ⅱ古 平安京Ⅱ新	中谷2号窯 中谷3号窯 投松4号窯	24号窯・7－Ⅰ号窯 45号窯	Ⅲ型式	杯B（椀a） 平高台（ヘラ切り・糸切り共存）
		投松5号窯	5号窯・44－Ⅱ号窯		杯B（椀a）消滅

図４　東播磨・志方窯跡群の編年対比表
（兵庫県教育委員会 2001）

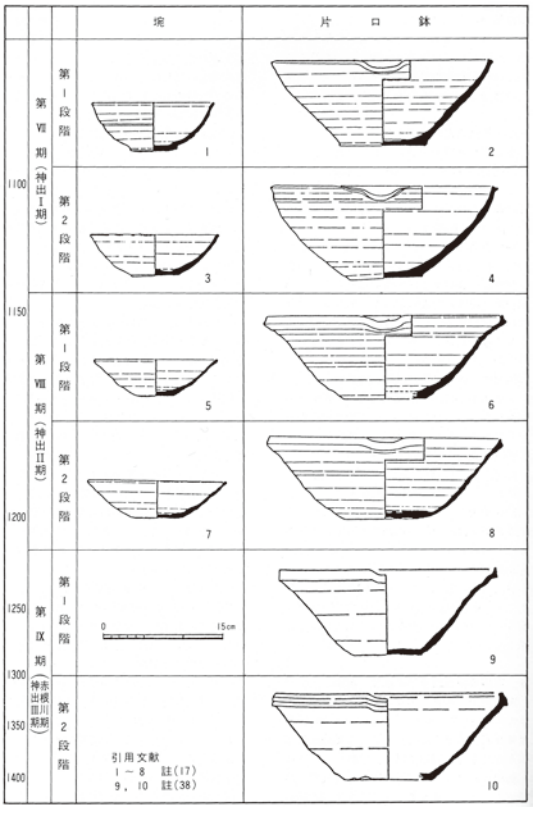


図５　森田稔氏による東播系須恵器の編年（森田 1986）



図６　神出窯跡群編年案（森内 2015）（S＝1/16）

※図左側の年代は森内 2015 を参考に報告者加筆



図７　神出窯跡群（10 世紀前葉～ 14 世紀？）の分布図（兵庫県教育委員会 2011）

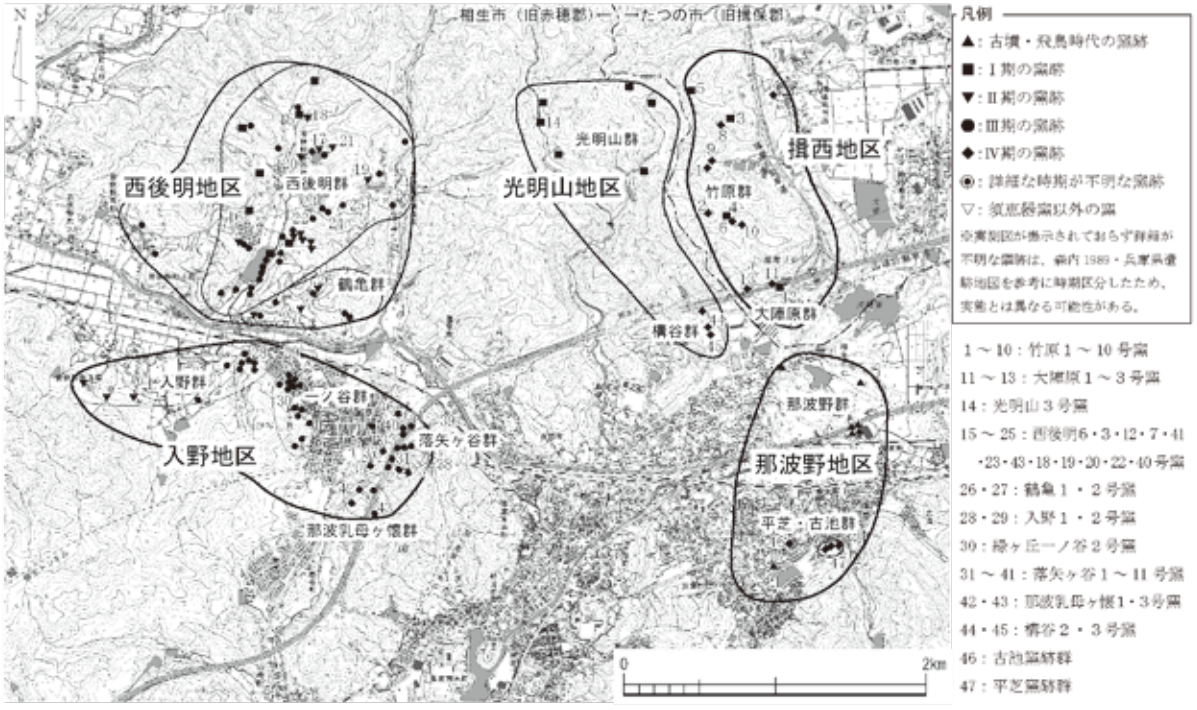


図８　相生・龍野窯跡群（８世紀前半～ 12 世紀後葉）の分布図（稲本 2024）

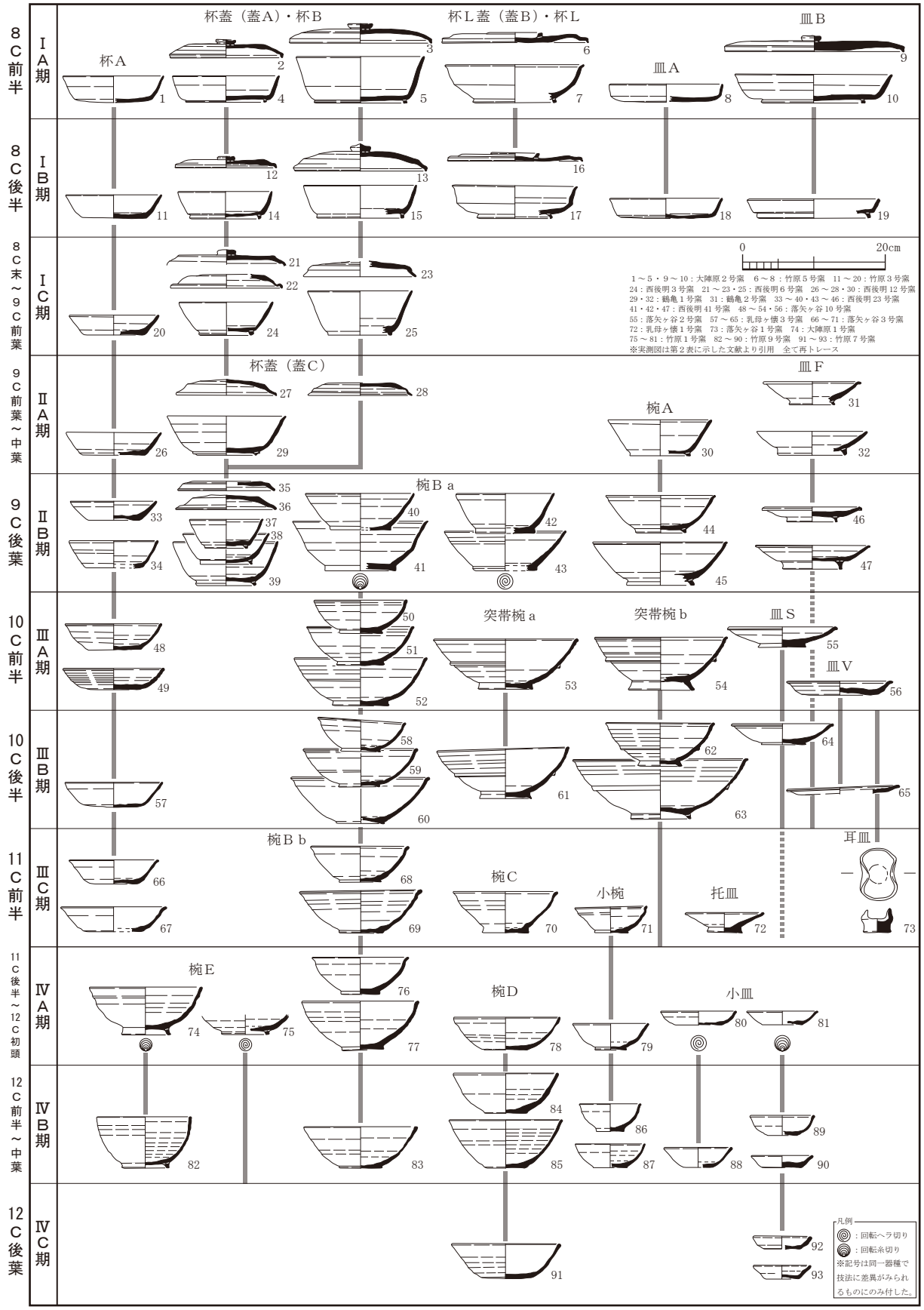
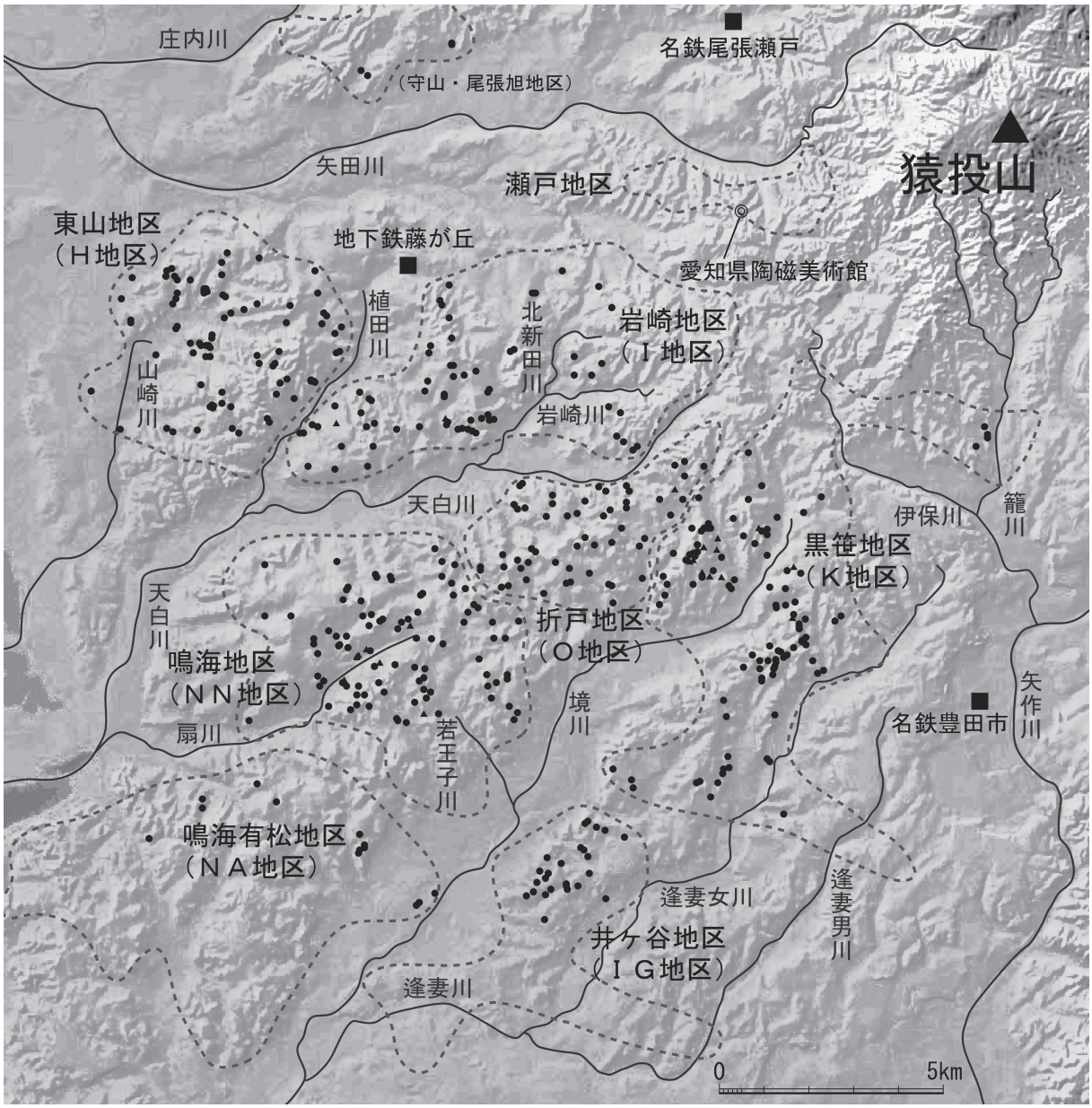


図９　相生・龍野窯跡群の供膳具（８世紀前半～ 12 世紀後葉）の変遷（稲本 2024）（S＝１／８）

※図左側の年代報告者加筆



猿投窯の窯跡分布（須恵器生産存続時：東山 111 号窯式～黒笹90号窯式期）
（地理院地図陰影起伏図（国土地理院）をベースに『愛知県史 別編 窯業 1 古代 猿投系』を元に作成）

愛知県陶磁美術館　特別展「This is SUEKI―古代のカタチ、無限大！」関連イベント

若手研究者による全国須恵器窯シンポジウム
―研究の現状を共有し、未来を探る―

資料集

2026 年 2 月 22 日（日）
助成：公益財団法人 中辻創智社
編集・発行　愛知県陶磁美術館　学芸課